

ロシア語ロシア文学研究

第 51 号

宮崎 衣澄 Идзуми Миядзаки

大阪ハリストス正教会のイコノスタス

Иконостас православной церкви Покрова Богородицы в Осаке 1

占部 歩 Аюму Урабэ

教養小説としての『帝国 V』：場所のパラドックスとアイデンティティ

«Empire V» как роман воспитания: Парадокс пространства и идентификация 23

日本ロシア文学会

2019

ロシア語ロシア文学研究

Бюллетень Японской ассоциации русистов

第 51 号

日本ロシア文学会
2019

ロシア語ロシア文学研究

第 51 号

2019 年

目 次

◆論文

- 宮崎 衣澄 大阪ハリストス正教会のイコノスタス 1
- 占部 歩 教養小説としての『帝国 V』: 場所のパラドックスとアイデンティティ 23

◆書評

- 諫早 勇一 秋草俊一郎著『アメリカのナボコフ——塗りがえられた自画像』 47
- 武田 昭文 小澤裕之著『理知の向こう ダニイル・ハルムスの手法と詩学』 54
- 貝澤 哉 巽由樹子著『ツァーリと大衆 近代ロシアの読書の社会史』 65
- 中澤 敦夫
高橋沙奈美著『ソヴィエト・ロシアの聖なる景観——社会主義体制下の
宗教文化財, ツーリズム, ナショナリズム』 75
- 岩本 和久
ソロモン・ヴォルコフ著・今村朗訳『20 世紀ロシア文化全史:
政治と芸術の十字路で』 82
- 今村 栄一 松木栄三著『ロシアと黒海・地中海世界 人と文化の交流史』 89
- 阿出川修嘉
ユーリー・S・マスロフ著・林田理恵+金子百合子訳『アспект論』 103

◆日本ロシア文学会大賞

沢田 和彦 学会大賞（2018 年度）受賞記念講演 「アカデミー版『ゴンチャロフ全集』編集入門譚」	109
諫早 勇一 学会大賞（2019 年度）選考結果	124

◆2019 年度日本ロシア文学会賞

井上 幸義 学会賞（2019 年度）選考結果	126
------------------------	-----

◆学会動静

覚張シルビア

「レフ・トルストイ：東と西の間で——研究・アダプテーション・展望

Л. Н. Толстой между Востоком и Западом:

исследования, адаптации, перспективы」報告

133

匹田 剛ほか

第 68 回全国大会・ワークショップ「ロシア語の名詞句をめぐる」報告

144

古川 哲ほか

パネル報告「プラトーフ研究の現在：日本の視座から」報告

156

◆役員・規約等

役員一覧その他	162
---------	-----

Бюллетень Японской ассоциации русистов

№ 51

2019 г.

СОДЕРЖАНИЕ

Статьи

- Идзуми Миядзаки Иконостас православной церкви Покрова Богородицы в Осаке 1
Аюму Урабэ «Empire V» как роман воспитания: Парадокс пространства и идентификация 23

Рецензии

- Юити Исахая *Сюнъитиро Акикуса*. Набоков в Америке: Перекрашенный автопортрет 47
Акифуми Такэда *Хироюки Одзава*. За ум: Метод и поэтика Даниила Хармса 54
Хадзимэ Кайдзава
Юкико Тацуми. Царь и массы: Социальная история чтения в современной России 65
Ацуо Накадзава *Санамитакахаси*. Святые пейзажи в Советской России 75
Кадзухиса Ивамото
Соломон Волков. История русской культуры XX века:
От Льва Толстого до Александра Солженицына 82
Эйити Иمامура
Эйдзо Мацуки. Россия и мир Чёрного и Средиземного морей: История культурного обмена 89
Нобуёси Адзгава *Юрий Сергеевич Маслов*. Очерки по аспектологии 103

Премия ЯАР за выдающиеся заслуги 109

Премия ЯАР за лучшие работы 2019 года 126

Хроника 133

**Bulletin of the Japan Association
for the Study of Russian Language and Literature**

No. 51

2019

CONTENTS

Articles

- Izumi Miyazaki The Iconostasis of the Orthodox Church in Osaka 1
Ayumu Urabe «Empire V» as a Bildungsroman: A Paradox of Place and Identity 23

Reviews

- Yuichi Isahaya *Nabokov in America: A Repainted Self-Portrait* by Shunichiro Akikusa 47
Akifumi Takeda *Beyond Reason: Method and Poetics of Daniil Kharms* by Hiroyuki Ozawa 54
Hajime Kaizawa
 Tsars and the Masses: A Social History of Reading in Modern Russia by Yukiko Tatsumi 65
Atsuo Nakazawa *The Sacred Landscape in Soviet Russia* by Sanami Takahashi 75
Kazuhisa Iwamoto *The Magical Chorus* by Solomon Volkov 82
Eiichi Imamura
 Russia, Black Sea, and Eastern Mediterranean: A History of the Exchange of People and Cultures
 by Eizo Matsuki 89
Nobuyoshi Adegawa *Outlines of Aspectology* by Jurij Sergeevič Maslov 103

2019 JASRLL Distinguished Merit Award 109

2019 JASRLL Outstanding Research Award 126

Chronicle 133

大阪ハリストス正教会のイコノスタス

宮 崎 衣 澄

はじめに

本研究の目的は、ロシアの宮廷イコン画家ヴァシーリイ・グリヤーノフ（B. П. Гурьянов, 1867-1920）工房が1907年に制作したイコノスタス（現：大阪ハリストス正教会）に着目し、20世紀初頭ロシア・イコンにおける位置づけを行うことである。現在大阪ハリストス正教会生神女庇護聖堂に設置されているイコノスタスは、松山ハリストス正教会用にロシアで制作されたものである。イコノスタスはその後、関東大震災、第二次世界大戦によって松山から東京、東京から大阪へと二度の移動を経験し、さらに110余年にわたる歴史の中で一度も修復されていないにも関わらず、良好な状態で現存する貴重な文化財である。このイコノスタスを制作した工房の主であるB.グリヤーノフは、アンドレイ・ルブリョフの代表作イコン《聖三位一体》（1422-27年）の修復事業の監督を務めた人物であり、まさに20世紀初頭を代表するイコン画家である。近年後期ロシア・イコン研究の進展に伴い、グリヤーノフも注目を集めている。しかし、同工房に関する文献資料の不足が大きな障害となり、工房のイコン現存数も多くないことから、未だ体系的なグリヤーノフ研究は行われていない。

そこで本稿では、現存が確認されている世界で唯一のグリヤーノフ工房によるイコノスタスである大阪正教会のイコノスタスを取り上げ、他のグリヤーノフの作例との比較・分析を通して、グリヤーノフ工房における大阪正教会イコノスタ



図1 B. グリヤーノフ工房, 大阪生神女庇護聖堂イコノスタス, 1907年

スの特徴を明らかにする。さらに 20 世紀初頭ロシアのイコンをめぐる歴史的状況の中で、グリヤーノフ工房、大阪正教会のイコノスタスがどのような位置を占めているのかについて考察する。

研究方法は次の通りである。大阪正教会のイコノスタスは、現存する唯一のグリヤーノフ工房のイコノスタスであるため、同一工房のイコノスタスとの比較はできない。そこで、グリヤーノフ工房の他のイコンとの比較により、大阪正教会のイコノスタスの様式的、図像的特徴を分析する。

1. イコノスタスの概要

大阪正教会のイコノスタスは二層構造で、中央の王門の上のみ三層である。イコンの総数は 22 点で、第一層に寸法の大きなイコンが配置される。大阪正教会のイコノスタスは、松山正教会のイコノスタスを移設したものであるが、移設した際にイコンの入替えがあった。松山正教会建設の歴史や聖器物を紹介した水島行揚著『松山ハリストス復活聖堂』（1911 年）では、イコン《大天使ガブリエル》は《生神女（聖母）》の向かって左隣に、イコン《聖ニコライ・聖セルギー》は第二層北側の端に配置されている。大阪正教会の配置と比較すると、イコン《大天使ガブリエル》と《大天使ミハイル》、イコン《聖ニコライ・聖セルギー》と《聖クセニヤ・聖イオアン》が入れ替わっている。東京ニコライ小聖堂の写真ではすでにイコンが入れ替わっており、イコノスタスが松山から東京に移動された際に配置が変わったと考える。イコンの入替えを除くと、現在の大阪正教会のイコノスタスは、1907 年制作の松山正教会のイコノスタスと同一である。

『松山ハリストス復活聖堂』（1911）によると、聖障（イコノスタス）の高さは中央が床の上から頂上の十字架まで三間半（6.4m）、第一層のイコンは横二尺五寸（95cm）、縦六尺（228cm）くらいである¹。第一層のイコン《生神女》《救世主》《主の昇天》の、向かって右下隅に（В. Гурьянов Москва 1907г.）と署名、制

¹ 水島行揚『松山ハリストス復活聖堂』（正教会事務所、1911）、9。

作地と制作年の記載がある。第一層のイコン《ハリストス復活》は松山復活聖堂の聖堂イコンである。第一層の大きなイコンには、ハリストスの事績が描かれ、第二層には生神女の事績が描かれる。イコノスタスの中に、二聖人を描いたイコンが二点ある。一点は、イコン《聖ニコライ・聖セルギー》、もう一点は、イコン《聖クセニヤ・聖イオアン》である。聖ニコライと聖セルギーは、ロシアで最も崇敬される聖人である。松山正教会では、日本で正教の布教に尽力した大主教ニコライとセルギー主教を記念して、イコノスタスに描かれたと考えられる。イコン《聖クセニヤ・聖イオアン》は、松山正教会の建設費用一切を寄進したクセニヤ・コレスニコヴァとその夫イヴァン・コレスニコフが、イコノスタスへの組み入れを要望したのであろう。コレスニコフ夫妻については、次章で詳しく取り上げる。

2. イコノスタスの歴史

前述のとおり、現在大阪正教会にあるイコノスタスは、松山正教会用に制作されたものである。そこで、はじめに松山正教会にイコノスタスが設置された経緯について述べる。松山正教会の建設は、1904年の日露戦争と深く関わっている。松山にはロシア軍人の収容所があり、大阪と並んで多くのロシア人捕虜が収容されていた。宣教者ニコライは、「どの地より長くロシア人捕虜が暮らし、99人墓地に眠っている松山に教会堂を建てる必要がある」（1906年1月27日、256頁）と日記に記している²。ロシア人が捕虜の身でありながら、教会建設のために献金した額が869円になったことから、1906年2月7日モイセイ河村伊蔵が松山教会建築の責任者となって松山に派遣され、用地を購入した（1906年2月7日、260頁）。教会建設に関する費用を捻出するため、ニコライはロシア人に広く寄付を求めた。1907年出版の『宣教団報告書（Православный благовестник）』に、

² 中村健之助監修『宣教師ニコライの全日記』第8巻（教文館、2007）、256。以下同書からの引用は（1906年1月27日、256頁）というように日付（ユリウス暦）と頁数のみを記す。

大阪と松山の教会建設費用の寄進を求める記事が掲載されている。

日本で命を落としたロシア人軍人のため、大阪と松山に木造教会を建設する援助を求める。これらの聖堂では、信仰を同じくする日本人正教徒が、亡くなったロシア人のために共に祈りを捧げるだろう。我々の聖堂への、故人への愛をみて、日本人異教徒が正教会に来るきっかけになるかもしれない。両教会（大阪と松山）のために1,020 ルーブル必要である。すでに資金が集まり始めている。早く資金が集まれば、早く建築を終えることができる。³

ニコライの日記によると、1907年10月24日「松山でついに教会建築が始められた」（1907年10月24日、275頁）。そして「松山から教会の定礎式の写真が届いた。写真を手に入れば、きっとクセニヤ・フョードロヴナ・コレスニコワも喜ぶだろう」（1907年12月19日、277頁）と、この時はじめて寄進者であるクセニヤ・フョードロヴナ・コレスニコヴァの名前が登場する。このことから、クセニヤ・コレスニコヴァは『宣教団報告書』等を見て、松山教会建設費用の寄進を申し出たのではないかと考える。

教会建築開始から2か月後の1907年12月には、すでにイコノスタスは出来上がっていた。「コレスニコワ夫人より来信。モスクワではイコノスタスがすでに出来上がり、鐘ももうすぐできるとのこと」（1907年12月25日、280頁）。そして、「イコノスタスがモスクワからリューベク経由で日本に発送された」（1908年3月3日、294頁）。イコノスタスは5月2日に神戸に到着する（1908年5月2日、311頁）。

日本正教会の司祭水口優明は、松山教会建設にかかる費用すべてを負担したコレスニコヴァは、イヴァン・アンドレーヴィチ・コレスニコフの妻であること⁴、イヴァン・コレスニコフはサヴァ・モロゾフ紡績工場の役員として財をなし、モ

³ Православный благовестник. М., No.1. 1907. С. 6.

⁴ 水口優明「大阪生神女庇護聖堂のイコノスタス」（大阪ハリストス正教会、2007）、8.

スクワヤリトニアの教会建設費用を寄進した人物であるとしている⁵。コレスニコフはプーシキン美術館建設準備委員の一人であり⁶、美術館読書室に12,000ルーブル寄付するなど⁷、教育や信仰への寄付を惜しまなかった。クセニヤ・コレスニコヴァに関しては、プーシキン美術館創設者であるイヴァン・ツヴェターエフが書簡の中でその人柄について「控えめで静かで遠慮がちで、心から寄付を申し出る」（1899年10月10日）と記している⁸。コレスニコフは、天満橋にあった旧大阪庇護聖堂の鐘一式を寄進しており、現在その鐘は吹田市の大阪正教会に移されている⁹。亜使徒ニコライはコレスニコヴァの寄付に大いに感謝し、その後建設された大阪正教会や函館正教会の費用の寄進も依頼している¹⁰。

コレスニコヴァの寄進によって完成した松山教会は1908年8月16日に大主教ニコライ、主教セルギーによって成聖された。しかし1923年の関東大震災で東京のニコライ堂が焼失したため、セルギー府主教の提案によって松山教会が東京に移築され、イコノスタスは東京ニコライ小聖堂に設置される。その後1945年大阪大空襲で旧大阪庇護聖堂が全焼する。信徒たちの新聖堂再建の要望によって、1962年吹田に大阪庇護聖堂が完成し、ニコライ小聖堂のグリヤーノフのイコノスタスが大阪庇護聖堂に設置され、現在に至る¹¹。

⁵ 司祭ダヴィド水口優明「ロシア人墓地と松山教会」（西日本主教区学びの会2008年11月3日資料）、4。

⁶ Прохорова. Е. В. Храмовоздатель // Московский журнал. 2013. No.2 (266). С. 75.

⁷ Богданов В. П. Всем миром // Московский журнал. 2012. No.6 (258). (<http://mosjour.ru/2017062687/>)

⁸ Цветаев И. В. – Нечаев-Мальцов Ю.С. Переписка 1897–1912. М., 2008. Т. 1. С. 153.

⁹ 司祭ダヴィド水口優明「大阪生神女庇護聖堂のイコノスタス」、8。

¹⁰ 中村健之助監修『宣教師ニコライの全日記』、第9巻、83、214。

¹¹ 司祭ダヴィド水口優明「大阪生神女庇護聖堂のイコノスタスについて」『西日本正教』No.123、2008年、4-5。

3. B. グリヤーノフと 20 世紀初頭ロシア・イコン

現代の後期ロシア・イコン研究家であるソスノフツェヴァは、グリヤーノフについて次のように述べている。「グリヤーノフ等の著名なイコン画家¹²に関する詳細な研究は未だ行われていない。現在は、これまで注目されてこなかった情報に基づいて、様々な文献で記載されていることを集めることしかできない」¹³。グリヤーノフに関する情報の中で、ロマノフ王朝 300 年を記念して出版された、『ロシア過去と現在 (Россия в ея прошлом и настоящем)』が研究の基礎になっている¹⁴。それによると、彼はムスチョーラ¹⁵でイコン画とイコン修復を学び、1890 年にモスクワに移住して工房を立ち上げる。1905 年に宮廷調達イコン画家 (поставщик двора Его Императорского) の称号を、1912 年に宮廷イコン画家 (придворный иконописец) の称号を得た。1904-1905 年アンドレイ・ルブリヨフのイコン《聖三位一体》の修復を手がけたことが、重要な転機となる¹⁶。1904 年第一回全ロシア修道院と教会用具展で最高賞を受賞し、クレムリンのウスペンスキー聖堂、受胎告知聖堂の修復など、多くの責任ある仕事を請け負った¹⁷。

グリヤーノフが同時代のイコン画家と異なる点は、社会的活動に積極的に関与したことである。彼は古文献愛好家協会、ペトログラード、モスクワ考古学研究

¹² 「グリヤーノフ等の著名なイコン画家」は、後期ロシア・イコンの画家を指すと考えられる。

¹³ *Сосновцева И. А. Последние императоры династии Романовых // Иконопись эпохи династии Романовых. М., 2008. С. 322-323.*

¹⁴ *Федров В. (ред.) Россия в ея прошлом и настоящем. 1914-1915. Отдел. XI. [б/п] Грилярнов* が東京、京都、松山のイコノスタスを制作したと記載があり (実際には松山のみ)、誤記もある。

¹⁵ ウラジーミル地方の村。パレフ、ホルイと並んで 19 世紀にはイコン画の産地として知られていた。特にムスチョーラは伝統的画法のイコンを継承しており、古儀式派信徒が多かった。(Комашко Н. Всё остаётся людям. Русская иконопись XVII-XX веков из собрания Виктора Бондаренко. М. 2010. С. 14.)

¹⁶ *Православная энциклопедия. Т. 13. М., 2006. С. 494.*

¹⁷ *Православная энциклопедия. С. 494.*

所、モスクワとモスクワ主教区教会古物研究調査委員等、数々の協会に所属していた¹⁸。加えてイコン手本書の出版は、彼の大きな功績である。『古イコンからの写し（Переводы с древних икон собранные и исполненные В. П. Гурьяновым）』（1902）、『モスクワ、ニコライ・エジノヴェーリエ修道院の17世紀絵入り教会暦（Лицевые святцы XVII в. Никольского единоверческого монастыря в Москве）』（1904）等、修復やイコン画制作を通して収集した古イコンの手本書を彼は自ら出版した。グリヤーノフはイコン職人という枠を超え、古イコン画伝統を復興し、芸術的高みに引き上げ、「教養のあるイコン画家」¹⁹を育成するという、ロシア聖像保護委員会の目的を体現する人物であったといえよう²⁰。

グリヤーノフ工房のもう一つの大きな特徴は、様式と技法の多様性である。同郷の古儀式派出身宮廷調達イコン画家で、グリヤーノフと並び評される Г. О. チリコフ（1882-1936）や М. И. ディカリョフ（-1917 以降没）はテンペラ技法で、細密描写に特化したイコン制作を一貫して行った。一方グリヤーノフ工房ではテンペラ画技法を中心として、混合技法²¹や、油彩技法でもイコンを制作した。グリヤーノフ工房の広告には、次のような記載がある：教会画、イコン画、壁画、中世イコンの修復を受注します。ヴィザンツ様式、ギリシア様式、ノヴゴロド様式、フリヤージ様式、ステンドグラス、キャンバス画のイコン²²。この差異は、工房主のイコン制作への関与の度合によって生まれたと考える。チリコフ、ディカリョフは工房受注のイコン制作に直接関与したが、グリヤーノフ工房は多くの画家を抱え、常に工房主が制作に携わる体制ではなかった。そのため、グリ

¹⁸ Федров В. (ред.). Россия в ее прошлом и настоящем.

¹⁹ Тарасов. Икона и благочестие. М., 1995. С. 271.

²⁰ Тарасов. Икона и благочестие. С. 236. 19世紀末から20世紀初頭のロシア・イコンをめぐる情勢については、次の資料に詳しくまとめられている：宇佐見森吉「聖像を展示する：ソビエト政権設立期における展示空間の再編過程」, 科学研究費補助金成果報告書, 2018年3月, 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院。

²¹ テンペラと油絵具を併用したもの。19世紀に流行したヴィザンティン復古様式のイコンは、混合技法で描かれた。

²² Тарасов. Икона и благочестие. С.186.

ヤーノフの署名はグリヤーノフ自身が描いたことを示すものではなく、工房の作であることを示す、商標のような存在であった²³。署名の形状も多様であり、表面の署名「Писал В. Гурьянов 1901 года в Москве」「В. Гурьянов Москва 1907」、裏面の楕円形や円形のスタンプ、刻印などがある。大阪正教会のイコンにも署名があるが、それだけではグリヤーノフ自身が制作したか否かは判断できない。

図2²⁴は初期のグリヤーノフのイコン《生神女庇護》である。イコンの図像は二段構成で、上段では生神女が覆いを手にとって、神に取りなしを求めている。下段には生神女賛歌の作者聖ロマノスが描かれている。テンペラ画で、構図、聖人の顔の描写法、背景ともに伝統的イコン画法に則り、細部まで丹念に描かれている。雲の形状はウラジーミル地方のイコン画の伝統を想起させる。一方図3²⁵はロマノフ朝300年を記念して、皇帝ニコライ二世が記念品として注文したイコンである。ロマノフ朝の守護イコンであ

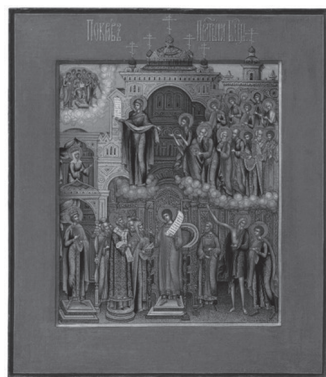


図2 B. グリヤーノフ《生神女庇護》
1902年、宗教史博物館

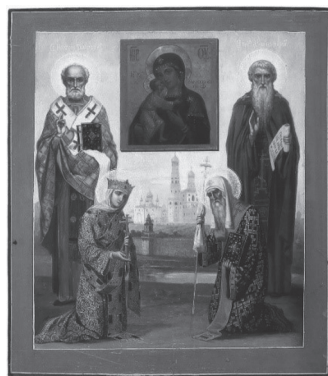


図3 B. グリヤーノフ《フョードロフスカヤの生神女イコンと選ばれし聖人》
1913年、宗教史博物館

²³ Православная энциклопедия. С.494.

²⁴ Басова М. В. Русское искусство из собрания Государственного музея истории религии. М., 2006. С.198. Рис. 295.

²⁵ Платонова О. А. (ред.) Святая Русь. Большая энциклопедия русского народа. М., 2011. С.374.



図4 B. グリヤーノフ工房《殉教者
パラスケヴァ》1910年、個人蔵

る「フョードロフスカヤの生神女」が中央上部に掲げられ、ロマノフ朝創始者ミハイル・フョードロヴィッチ、ニコライ二世の同名聖人が立像で、皇后アレクサンドラ・フョードロヴナ、アレクセイ皇太子の聖人が前方にひざまずいてイコンに祈りをささげている。モスクワ川の奥には、クレムリンが見える。聖人の顔や聖衣、風景は、宗教絵画風で、地面には聖人の陰が表現される。一方で聖人の動きは静的で正面性を保っている。グリヤーノフは同年、全く同じ主題と構図で、テンペラ画の伝統様式で描いた作品も残している²⁶。

図4²⁷は混合技法を使用した、モデルンの影響が如実に表れたイコンである。パラスケヴァの右手の十字架が、キエフの聖ウラジーミル聖堂の壁画、皇后オリガの十字架（ヴァスネツォフ作）と類似していると、カマシユカは指摘している²⁸。現存するグリヤーノフ工房のイコンを分析した結果、筆者は1904年頃からグリヤーノフ工房は様式の幅を広げたと考える。その理由は、グリヤーノフが同時代の他のイコン画家とは異なり、ロシア聖像保護委員会の動きなど、イコンを巡る社会的潮流を理解し、またそこに積極的に参画したからであろう。20世紀初頭のロシア・イコン復興運動を少し振り返ると、この運動の中心的な役割を果たしたのは、H. コンダコフである。彼は1900年ウラジーミル地方のイコン制

²⁶ Комашко. Н. (текст) Художественные сокровища России. Каталог икон из частных собраний. М., 2016. С. 98.

²⁷ Комашко Н. Всё остаётся людям. С. 257

²⁸ Комашко. Всё остаётся людям. С.116.

作の実態を調査し、印刷版アイコン画など安価な大量生産型アイコンの普及と、アイコン画家の技量や知識不足により、伝統的アイコン技法が衰退する状況を目の当たりにする。1901年、古文献愛好家協会会長のC. シェレメーチェフが代表を務め、コンダコフが統括するロシア聖像保護委員会が、ニコライ二世によって設立され、そのメンバーにはH. リハチョフ、И. オストロウーホフ、B. ヴァスネツォフ、M. ネステロフらがいた²⁹。アイコン画家のために聖像画手本書の刊行が決まり、準備委員会が設置される。手本書で模範を示す際には、新旧の図像の調和を図ること、その新たな規範として選ばれたのは、キエフ聖ウラジーミル聖堂壁画を手がけたB. ヴァスネツォフの図像形態であった³⁰。聖ウラジーミル聖堂の写真集が刊行されたことにより、個々の聖像画が広く流布し、建設ラッシュであった国内外の教会堂にヴァスネツォフの聖像画の模写が掲げられた³¹。ロシア聖像保護委員会が設立したアイコン学校でも、キエフの聖ウラジーミル聖堂壁画が手本として使用された³²。グリヤーノフもヴァスネツォフの図像に強い関心を抱いていたことは明らかで、ヴァスネツォフの影響を受けた画家の一人として挙げられている³³。

アイコン制作技術では、グリヤーノフは卓越した才能を有していたと考える。ロシア・アイコンの伝統に合致した構図、細部に至る緻密で繊細な描写、伝統的アイコン技法の熟知、豊富な色使いによる優美さが特徴と考える。グリヤーノフ工房の職人についても、アイコン制作技術の高さが認められる。大阪正教会のイコノスタスは、制作から110年経過して一度も修復されていないにもかかわらず、保存状態は良好である。1902年同じく亜鉛板に油彩で描かれた京都正教会のイコノスタスは、2007-2008年に絵具面剥離のため一部日本で修復されている³⁴。

²⁹ Тарасов. Икона и благочестие. С.236.

³⁰ Тарасов. Икона и благочестие. С.261-263.

³¹ Тарасов О. Ю. Модерн и древние иконы. М., 2016. С. 36, 41-43.

³² Комашко. Всё остаётся людям. С.16., Тарасов. Икона и благочестие. С.273-276.

³³ Басова М. В. Васнецов и его последователи. СПб. 2013. С.74.

³⁴ 田中智恵子・木島隆康・宮田順一「エパネチニコフ工房作《機密の晩餐》アイコン修復報告」『東京芸術大学美術学部紀要』第47号、2000年、93-107.

4. 大阪正教会のイコノスタス

グリヤーフ工房の特徴を踏まえた上で、大阪正教会のイコノスタスを分析する。アイコンは油彩で、アイコンを支える支持体は、亜鉛板である³⁵。日本への運搬を考えて、移動しやすい金属板を採用したと考えられる³⁶。前述の通りイコノスタスは日本で二度移設されたが、一度も修復されていない。一部絵画層に剥離部



図5 B. グリヤーフ工房《ハリストス昇天》、大阪生神女庇護聖堂



図6 E. ソローキン原画《ハリストス昇天》救世主ハリストス大聖堂壁画

³⁵ 2007年筑波大学世界文化遺産学専攻松井教授によるX線調査結果より。(司祭ダヴィッド水口優明『大阪生神女庇護聖堂のイコノスタス』, 19-20.)

³⁶ 松山正教会に先立って、1902年制作された京都正教会のイコノスタスも支持体は亜鉛板である。(田中智恵子他「エパネチニコフ工房作《機密の晩餐》アイコン修復報告」, 97.)



図7 B. グリヤーノフ工房
《生神女生誕》、大阪生神女庇護聖堂



図8 T. ネフ原画《生神女生誕》
救世主ハリストス大聖堂イコノスタス

分があるものの、大変良好な保存状態である。

個々のイコンの構図を分析した結果、筆者は19世紀教会堂のイコンや壁画からの図像の流用があることを発見した。最も多くの図像が流用されたのは、モスクワの救世主ハリストス大聖堂（1883年成聖）である。大阪正教会のイコン《最後の晩餐》の原画が救世主ハリストス大聖堂イコノスタスの《最後の晩餐》（シエミラツキ作）であることを最初に発見したのは鐸木道剛である³⁷。この指摘を手がかりに、大聖堂のイコンと壁画の図像を網羅的に調査した結果、鐸木が指摘した《最後の晩餐》に加えて、《ハリストス昇天》（ソローキン原画、図

³⁷ 鐸木道剛「ロシア・日本・セルビアにおけるポーランド人画家シエミラツキの『最後の晩餐』」『岡山大学芸術学研究』第2号、1992年、53。

6³⁸⁾, 《生神女生誕》(ネフ原画, 図8³⁹⁾, 《生神女神殿奉献》(原画制作者不明, 図10⁴⁰⁾, 《生神女就寝》(ブロンニコフ原画, 図12⁴¹⁾)の4点を新たに確認し, 合計5点の流用が明らかになった。

また, 水島行揚は『松山ハリストス復活聖堂』で, 「上帝の現れの聖像は, キエフの聖大公ウラジミール大聖堂の原作に則れる物」と記述している⁴²⁾。この点を受けてキエフの聖ウラジーミール聖堂(1896年成聖)の壁画やイコンを調査したが, 水島行揚が指摘したイコン《上帝の現れ(キリスト洗礼)》以外の図像の流用は発見できなかった。



図9 B. グリヤーノフ工房
《生神女神殿奉献》, 大阪生神女庇護聖堂



図10 《生神女神殿奉献》
救世主ハリストス大聖堂経案イコン

³⁸⁾ Яковлева Е. М. Кафедральный соборный храм Христа Спасителя. М., 2012. С.69. Рис.49.

³⁹⁾ Яковлева. Кафедральный соборный храм. С.98. Рис.70.

⁴⁰⁾ Яковлева. Кафедральный соборный храм. С.130. Рис.101.

⁴¹⁾ Яковлева. Кафедральный соборный храм. С.99. Рис.73.

⁴²⁾ 水島行揚 『松山ハリストス復活聖堂』, 11.



図 11 B. グリヤーノフ 工房
《生神女就寝》, 大阪生神女庇護聖堂

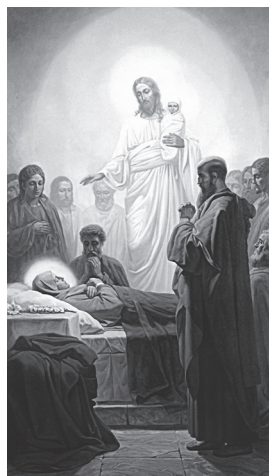


図 12 Ф. Бронников 原画《生神女就寝》
救世主ハリストス大聖堂イコノスタス

次に大阪正教会のアイコンと原画を比較して流用の内容を検討する。アイコン《ハリストス昇天》(図 5, 6)では、大阪正教会のアイコンには、救世主ハリストス大聖堂にある、救世主の両脇の天使が描かれていない。この点を除くと、両者のアイコンは全体の構図だけでなく、背景描写、付属物、色彩、聖人の動きなど細部まで一致しており、救世主ハリストス大聖堂の教会内装を流用して大阪正教会のアイコンが制作されたといえる。大阪正教会のアイコンには、アイコンに必須である頭光と銘がはっきりと描かれていて、この点も救世主ハリストス大聖堂との違いである。救世主ハリストス大聖堂から原画をとったアイコンは、生神女に関連するアイコン《生神女生誕》(図 7), 《生神女神殿奉献》(図 9), 《生神女就寝》(図 11), 及び《最後の晩餐》と第二層の比較的小さなアイコンに集中しており、第一層のアイコンは《ハリストス昇天》(図 5) 一点であった。

救世主ハリストス大聖堂はナポレオンに対する戦勝記念として皇帝アレクサンドル一世の命により建設が計画された、国家的事業であった。美術アカデミー会

員である T. ネフ, Г. セミラツキー, B. スーリコフ等当時のロシア美術界を代表する画家が内装を手がけ、19 世紀後期ロシア教会美術の代表作と認識され、ロシア国内外にこの教会の壁画やイコンの模写が出現した。伝統的なイコン画法で知られるウラジーミル地方のイコン工房にも、救世主ハリストス大聖堂の壁画やイコンは甚大な影響を与え、注文に応えるために油絵画家がイコン工房に招かれた⁴³。グリヤーノフ工房もその一例で、工房ではアカデミー様式の技法を習得した画家が働いていた⁴⁴。イコン画家が美術アカデミーで絵画法を学ぶ例もあった。例えば 19 世紀後期トロイツェ・セルギーフ大修道院附属イコン学校の指導者でイコン画家の И. マリィシェフは、イコン学校設立に際してペテルブルグの美術アカデミーに絵画教育を受けるため派遣された⁴⁵。

このように、イコンの原画を救世主ハリストス大聖堂からとることは、19 世紀末－20 世紀初頭ロシアにおいては珍しい例ではなかった。グリヤーノフ工房に関しては、同工房にアカデミー様式のイコンを制作する職人がいたことは文献資料から明らかになっているが、大阪正教会を除いて、現存する同工房のイコンには救世主ハリストス大聖堂の流用例はない。そのため大阪正教会のイコノスタスは救世主ハリストス大聖堂への原画の依拠を示す貴重な手がかりである。

一方キエフの聖ウラジーミル聖堂は、ルーシ受洗 900 年を記念して、1852 年キエフ府主教フィラレトの発案を皇帝ニコライ一世が承認して建設が計画された。ヴァスネツォフを中心に M. ネステロフらが手がけた同聖堂の壁画やイコンが、19 世紀末－20 世紀初頭のロシア宗教美術に甚大な影響を与えたことは前章で述べた。聖ウラジーミル聖堂洗礼所のネステロフによる壁画《ハリストス洗礼》⁴⁶と、大阪正教会のイコン《ハリストス洗礼》(図 13)を比較すると、ネステロフの壁画では背景の風景が色鮮やかに描かれていることに対して、大阪正教

⁴³ Бакушинский А. В. Искусство Палеха. М., 1934. С. 86.

⁴⁴ Комашко Н. Художественные сокровища России. Каталог икон частных собраний. М., 2016. С. 6.

⁴⁵ Армеева Л. А. Иконописная школа в Троице-Сергиевой лавре. М., 2014. С. 51.

⁴⁶ Владимирский собор в Киеве. Официальный сайт. Нестеров М.В. «Богоявление» (http://www.vlsobor.com/painting_18.html)

会では遠くの景色は霞がかかって薄い色調で不明瞭に表現されている。大阪正教会のイコノスタスの中で、《ハリストス洗礼》の、ヨルダン川の鮮やかな色調が際立っている印象をうけるが、これはネステロフの壁画を手本とした影響であろう。

大阪正教会のイコノスタスが、モスクワの救世主ハリストス大聖堂、キエフの聖ウラジーミル聖堂の壁画やイコンを原画とした事実をうけて、筆者は他にも同時代の著名なイコンや壁画からの転用例があるのではないかと考えた。19世紀後期の聖堂壁画やイコンを広く調査した結果、さらに2点のイコンの原画を確認した。イコン《ハリストス復活》はウクライナのジトーミル救世主変容聖堂に同一構図の壁画(M. ヴァシリエフ作、現存せず)⁴⁷があり、イコン《生神女》は、トロイツェ・セルギー大修道院聖霊聖堂のイコノスタス(И. マリシェフ作、1866年)⁴⁸、ヴォロネジのコストマロヴォ女子修道院の奇跡イコン《生神女》(B. ショコレフ作、19世紀後期)が同一源泉と考えられる⁴⁹。



図13 B. グリヤーノフ工房
《ハリストス洗礼》，大阪正教会

⁴⁷ Протоиерей Смирнов П. Спаситель мира // Азбука веры. (https://azbyka.ru/otechnik/Petr_Smirnov/spasitel-mira-50-kartin-iz-istorii-zemnoj-zhizni-spasitelja-mira-izvestnyh-isklyuchitelno-russkih-hudozhnikov-s-ob-jasn-k-nim-tekstom-i-karta-palestiny/23_5)

⁴⁸ Армеева Л. А. Иконописная школа в Троице-Сергиевой лавре. М., 2014. С.147.

⁴⁹ 函館ハリストス正教会のイコノスタスの《生神女》(1916年ヴェニグ作)も、共通の原画を採用して制作されたと考えられる。

これらの事実から、大阪正教会のイコノスタスは、19世紀末の著名な聖堂の壁画やアイコンから原画をとって制作されたと推定した。原画の存在から分かることは、次の点である。第一に大阪正教会のアイコン22点中5点と多くのアイコンの原画が、救世主ハリストス教会にあることから、グリヤーノフ工房がイコノスタス制作において、救世主ハリストス大聖堂を強く意識したと考える。大阪正教会のイコノスタスは、日露戦争で犠牲になったロシア人のための教会である松山正教会用に注文された。遠い異国の地で命を落としたロシア人信徒に、モスクワの大聖堂を思い起こさせるイコノスタスを制作したのではないだろうか。

次にネステロフの模写《ハリストス洗礼》は、20世紀初頭に聖像保護委員会が模範としたヴァスネツォフの聖像やモデルン様式への傾倒を示している。アイコン《生神女》、《ハリストス》《大天使ミハイル》《大天使ガブリエル》(図1)の聖人の大きく見開いた、観者を見つめる印象的な目は、ヴァスネツォフの生神女の影響を感じさせる。松山正教会アイコンの原画は後期アカデミー様式、モデルン様式である。異なる時代、様式区分の壁画や絵画を模写しながら、イコノスタスは色調や構成の統一感があり、調和が図られている。宗教画をイコノスタスに相応しい神性を持つアイコンへと昇華し、イコノスタシス全体としての一体感、調和した雰囲気を醸成する点は、グリヤーノフ工房の高度な技術と芸術性を示しているだろう。

5. グリヤーノフ工房における大阪正教会のイコノスタス

最後にグリヤーノフ工房のアイコンにおける、大阪正教会のイコノスタスの特徴について考察する。大阪正教会イコノスタスは、1907年制作である。大阪正教会のイコノスタスを制作した時期は、1904年ルブリョフ作《聖三位一体》の修復、1905年宮廷調達アイコン画家の称号を得た後で、ロシアを代表するアイコン画家の地位を確立しつつあった、円熟期である。1907年頃のグリヤーノフ工房の主な活動は次の通りである。1905年にロシア聖像保護委員会が出版したコンダコフ編『我が救世主イエス・ハリストス手本書集(Иконография Господа Бога и Спаса нашего Иисуса Христа. Лицевой иконописный подлинник)』のために、他

のイコン画家と共に、ヴィザティン、古ロシア・イコンの正確なコピーを描いた。1906年ルブリョフのイコン《聖三位一体》修復報告書を出版し、同年頃ベテルブルグの帝国女子教育大学付属イヴェリアの生神女イコン教会イコノスタスのイコン（現存せず）を制作している。現存するこの時期のイコンとして、イコン《ハリストス》（1907年、個人蔵）⁵⁰、イコン《聖三位一体》（1908年、イルクーツク州立美術館）⁵¹がある。イコン《ハリストス》、《聖三位一体》はいずれもテンペラ画で、ロシア・イコンの伝統的規範に則った構図と画法で描かれていて、油彩の大阪正教会のイコンとは様式が異なる。現存する同時代のグリヤーノフ工房のイコンは伝統様式のテンペラ画イコンが多いため、大阪正教会のイコンは特異な印象を受ける。しかし、グリヤーノフ工房の作例全体を通してみると、混合技法を使用したイコン《救世主》（1910年頃・個人コレクション）⁵²があること、グリヤーノフ工房には美術アカデミーで教育を受けた画家がいたこと、そして工房の広告にフリージュ様式やキャンパスのイコンや教会画を受注すると謳っていたことから、大阪正教会のイコン様式だけが特別な例とは言えないが、現存する数少ない油彩イコンである。

では松山正教会イコノスタスの様式はどのように決定されたのか。日本正教会の資料によると、明治期イコノスタスはロシアに注文するのが通例であった。1902年京都正教会記念画帖にはロシアにイコノスタスを注文した経緯について次のように記している。

聖像は日本に於いて造れば敢て造られざるに非ず、我等はイリナ山下姉の如き美妙なる聖像画家を有す。されど是が爲には圖形を製して一々指圖せざる可

⁵⁰ *Комашко. Художественные сокровища России. С.94. Рис.77.*

⁵¹ 『イルクーツク美術館所蔵 15～20世紀のロシア美術』、石川県立美術館、1997年、52、図58。

⁵² Центральный музей древнерусской культуры и искусства имени Андрея Рублева. Каталог выставки «Иконы из частных собраний. Русская иконопись XIV - начала XX века». М., 2004. С. 63.

らず、且つロシアに托するは一層便利なり。由て聖障は之をロシアに托する事に決し、聖障を附する堂内の間尺を記し、聖障を三層となし、如何なる聖像を幾枚何所に入る可きかを詳記して之れを注文せり。⁵³

松山正教会用のイコノスタス制作を依頼する際も、イコンの主題や構成は、ニコライを中心とする日本正教会の意向を、コレスニコヴァに伝えて協議したうえで、コレスニコヴァがグリヤーノフ工房に発注したと考えるのが自然であろう。イコン様式に関しても、ニコライの要望が反映された可能性が高い。大阪正教会のイコノスタスは、20世紀ロシアを代表するグリヤーノフ工房のイコノスタスであるだけでなく、明治期日本正教会のイコン制作、19-20世紀初頭にロシア国外に建設された在外正教会教会堂における日本正教会の特徴を知る上でも、重要な手がかりとなる。

6. まとめ

大阪正教会のグリヤーノフ工房制作のイコノスタスについて調査した結果、次のことが明らかになった。グリヤーノフはテンペラ画の伝統的ロシア・イコン制作とイコン修復、イコン手本書の出版等で名声を得た20世紀初頭を代表するイコン画家である。一方で宮廷イコン画家の地位を確立した頃から、テンペラ画技法のみならず、混合技法や油彩イコン、宗教画など制作の幅を広げた。大阪正教会のイコンはその一例であり、現時点では現存する世界で唯一のイコノスタスであると同時に、数少ない油彩イコンである。

本稿で、先行研究で指摘されていたモスクワ救世主ハリストス大聖堂、キエフ聖ウラジーミル聖堂の壁画やイコンからの転用例をさらに多く明らかにし、その他同時代の著名なイコンや壁画を模写してイコンを制作したことを示した。現在

⁵³ 水島行楊『京都至聖生神女福音聖堂の記念書帖』（正教本会編纂所、1904）5。函館正教会のイコノスタス用イコンも、ロシアに注文された。（『正教時報』5（13）、1916年、29。）

原画の存在が明らかになっていないアイコンについても、今後の調査で原画の存在が明らかになる可能性が高い。グリヤーノフ工房における大阪正教会のイコノスタスの特徴は、グリヤーノフ工房が最も得意とする伝統様式ではなく、アカデミー様式、モデルン様式を採用した点にある。この様式決定には、明治期の日本正教会イコノスタス制作の状況から、亜使徒ニコライが深く関わっていたと考えた。

大阪正教会のイコノスタスは、ロシアには現存しない 20 世紀初頭の貴重な文化遺産である。京都正教会、函館正教会など日本正教会に現存する明治期のロシア人アイコン画家によるイコノスタスを総合的に分析することにより、日本正教会のアイコンの独自性がさらに明らかになると考える。

(みやざき いずみ, 富山高等専門学校)

Иконостас православной церкви Покрова Богородицы в Осаке

Идзуми Миядзак

Государственный технологический колледж Тояма

Иконостас церкви Покрова Богородицы в Осаке был создан в мастерской иконописца Василия Павловича Гурьянова в 1907 году. Иконостас был заказан в Москве для новопостроенной церкви в городе Мацуяма, которая была создана для русских, погибших в Русско-японской войне, и японских православных верующих. Строительство церкви в Мацуяме и приобретение необходимой утвари для церкви осуществлялось на пожертвования Ксении Фёдоровны Колесниковой. Иконостас дошёл до нас в первозданном виде, хотя в Японии его перевозили два раза и ни разу не реставрировали. К сожалению, в России ни одного иконостаса, выполненного в мастерской В. П. Гурьянова, не сохранилось. Таким образом, иконостас в церкви Покрова Богородицы в Осаке является ценным материалом для изучения творческого наследия мастерской В. П. Гурьянова. Цели данной работы следующие: 1) сравнить иконостас в Осаке с росписями и иконами знаменитых соборов конца XIX – начала XX вв. и выяснить возможное влияние и образцы, к которым обращались иконописцы мастерской В. П. Гурьянова при создании иконостаса для церкви Воскресения Христова в Мацуяме; 2) выяснить особенности иконостаса церкви в Осаке среди других произведений мастерской В. П. Гурьянова.

В иконостасе мастерской В. П. Гурьянова в Осаке мы нашли 8 икон, которые имеют непосредственные образцы. Пять из этих образцов – росписи и иконы храма Христа Спасителя в Москве. Возможно, что мастера сознательно обратились к храму Христа Спасителя как символу православного храма России того времени.

По стилю иконы храма в Осаке можно отнести к академическому стилю и стилю модерн, которые получили популярность в России в XIX – начале XX вв. Среди произведений мастерской В. П. Гурьянова иконостас в Осаке выполнен в нехарактерной манере. Исходя из документов о строительстве православного храма в Японии в период Мэйдзи, мы считаем, что в выборе стиля для иконостаса в Мацуяме отразилось мнение Равноапостольного Николая.

教養小説としての『帝国Ⅴ』 —場所のパラドックスとアイデンティティ—

占 部 歩

はじめに

本論文では、現代ロシア文学を代表する作家の一人であるヴィクトル・ペレーヴィンの長編『帝国Ⅴ』 *Empire V* (2006) における、アイデンティティ形成の在り方について考察する。この作品は主人公ロマンが、偶然吸血鬼の能力を手に入れる場面から始まる。吸血鬼は身体に「舌」を移植され、その担い手として神話に登場する神の名前を新たに与えられる。そうして生まれ変わったロマンはラーマ二世として、吸血鬼の王国で一人前の吸血鬼となるべく修行を積んでいくことになるというのが物語のあらすじである。形式としてはファンタジーに分類可能な作品であるが、ペレーヴィンの得意とする哲学的思索が至るところにちりばめられ、その内容は非常に錯綜した様相を呈している。しかし松下隆志は、この作品には「『成長』という神話が崩壊した 21 世紀において、それでもなお可能な教養小説の一形態」¹ が提示されていると述べた。多くの論者たちによってロシア・ポストモダニズムの旗手と目されてきたペレーヴィンであるが、同じく松下が指摘する通り、2000 年代以降、ポストモダニズム自体と同様にその主軸を解体か

¹ 松下隆志「『物語』の解体と再生 —ポストモダンを超えて—」野中進ほか編『ロシア文化の方舟』東洋書店、2011 年、108.

ら構築へと移してきたといえる²。したがって本論では特に後者の構築の側面を重視して論述を進めていく。

ここで、考察の方法について説明しておきたい。注意しなければならないのは、ポストモダンとはそもそも既存の物語の解体を前提とするものであり、教養小説というジャンルによって示されるのは、池田浩一が「新しい生き方を見出すにいたる過程を扱う小説」³と述べた通り、まさにポストモダニズムがその衰退を喝破した形態の物語であったということである。これが意味するのはポストモダン以降の物語とは、それ以前とは異なる形態のものとならざるを得ないということであるが、松下の論文ではその違いについて詳細に検討されてはいない。そこで本論では『帝国Ⅴ』におけるアイデンティティ形成の在り方に着目することで、物語構築におけるアイデンティティの役割を具体的に考察する。アイデンティティはその流動性、コンテクスト依存性がつとに指摘されているが⁴、それは常にコミュニケーションを通じ、他者との関係において図式的に把握されるものであり、その意味でアイデンティティ形成は関係のネットワークとしての自己像の構築であるということが出来る。このような特質はポストモダニズム以前から変わらず存在したわけであるが、ジャン・フランソワ＝リオタールがいうように「大きな物語」が終焉を迎えた結果、ネットワークそのものの在りように決定的な変化が生じたと考えられる。すなわち、その正当性に客観的な根拠を提供すべき社会が物語を失って解体されてしまった故に、ネットワークは極めて主観性の強いものとなったといえる。コミュニケーションが行われているまさにその場のコンテクストに根拠を求めざるを得なくなり、著しく個人的かつ恣意的な世界観をアイデンティティの基礎とする以外になくなったのである。本論では、それが『帝国Ⅴ』という作品にとりわけ顕著に見られる、自身に都合の良いヒエラ

² 松下「『物語』の解体と再生」, 109.

³ 池田浩一『教養小説の崩壊』現代書館, 1979年, 6頁。

⁴ デボラ・シフリン, エリオット・ミシュラーらのディスコースとアイデンティティの関係についての論文も参照。

ルキー構造の構築というアイデンティティ形成の構造を生み出したという指摘を行う。具体的には、主人公は外世界への脱出を希求していながらその実過度に内向的であり、他者を受け容れる余地を持たない存在である。その事実がアイデンティティ形成の過程で明らかになり、彼が最終的に共同体から拒絶されるという体験を描くことで、物語構築とはヒエラルキー構造ではなく共同体の構築とならねばならないという一種の見解をペレーヴィンが提示していることを論じることが、本論の目的である。

1. 失われた場所のパラドックス

考察に入る前に、松下の具体的な記述を引用しておきたい。

しばしば「ロシアの村上春樹」と称されるペレーヴィンだが、現実とファンタジーを巧みに織りまぜた物語に寓意的なメッセージを込める両者の作品には、「成長」という神話の崩れ去った現代において、それでもなお可能な教養小説の一つの形を見ることができる。⁵

さらに松下は本論にとって重要な見解を示している。

いずれにせよ、世紀の変わり目において現代ロシア文学の課題が既存の「物語」の解体から、新たな「物語」の構築へとシフトしたことは間違いない。⁶

ここに述べられた「成長という神話の崩壊」、そして「新たな『物語』の構築」という概念が、本論における『帝国Ⅴ』の主人公ラーマのアイデンティティ形成の分析における主要な問題となる。その検討を通して、ペレーヴィンにとっての

⁵ 松下「『物語』の解体と再生」, 108.

⁶ 松下「『物語』の解体と再生」, 106.

新たな物語の構築とは主観的な世界観、ひいては自身に都合の良いヒエラルキーを構築する試みであることを明らかにし、松下の論文においては示唆されるに留まっていた、ポストモダン以降の教養小説の一つの在り方をペレーヴィンの作品に即して定式化することを目指すものである。

まずは一つ目の問題、すなわち「成長という神話の崩壊」を具体的に検討することから始めたい。ここで重要なのは、「崩壊」というキーワードである。この前の箇所では松下が述べているように、ここでの「崩壊」とはソ連の崩壊を指しており⁷、この作品における主人公のアイデンティティ形成において重要な契機となっている。それは、「失われた場所のパラドックス」とでもいうべき概念であり、本論文の議論を進めるにあたって基礎となるものである。これはソビエト連邦の崩壊によって生じた状態を表現したものであり、作品中では以下のように書かれている。

木製の円盤の表には『ソ連』と彫ってあった。自分がまさにその「ソ連」なるところに生まれ、後にそれが消滅したということは分かっていた。どうにも理解し難い話だった。見たところ家々も、木々も、そして市電もそのまま残っていた、だが、それらが載っていた土台だけが消えてしまったのだ…でもまだ僕は幼かったし、知性は他の何百ものパラドックスと同様に、この矛盾ともやがて折り合いをつけた。ソビエトカストロフの経済的な真相に、僕は徐々に気付き始めていたのだ。大半の人々が失業保険でやりくりしているようなところにまで私服姿の特務機関将校を二人送り込んでいた国にとって、訪れる結末はこれ以外にあり得なかったのだ、と。⁸

世界が本質において不可逆的な変質を被り、目の前の場所がこれまでと同じで

⁷ 松下「『物語』の解体と再生」, 106.

⁸ Пелевин В. О. Empire «V». М., 2008. С. 17. 以下、この作品からの引用注は、本文中にページ数のみを示す。

あって同じでないという矛盾が、主人公の意識をとらえている。彼は物語全般にわたって、ある種の焦燥感に苛まれている。それは決定的に失われてしまったものに対する郷愁と、それに代わるものへの希求を根底に持つものである。そして重要なのは、彼自身それに代わるものが何かを把握していないという事実である。彼に捉えられるのは感覚的な情報のみであり、それが何を意味するのかは分からない。彼にとって目の前の世界はその本質的な意味を開示することはない、謎めいたものである。そしてそれに起因する不安が、小説全編を貫いて流れている。このような矛盾した状況を、本論では「失われた場所のパラドックス」と呼ぶことにする。このパラドックスは、後により具体的な形で主人公ラーマによって語られることになる。

ベッドタウンの18階建てユニットビル群が、視界の端できらめいていた。ソビエト末期の遺物だ。僕がこの世界に生まれ落ちたのはまさにその時代が終わろうとする時だった。何が起きているのかを理解するには、まだあまりにも幼かった。でもその時代の響きや色合いは覚えている。ソビエト政権がこのビル群を建て、そこに人間を連れてきて、そうしておいて全てをご破算にしたわけだ。なんだか『済まない』という声がかすかに聞こえるような気がした。

ただ奇妙なのはこいつだ、時代は終わっても、そこで生きていた人間たちはその場に、ソ連製のコンクリートの巣穴にまだ残っているという事実だ。ちぎれてしまったのはただ、彼らを一つに結び合わせていた見えない糸だけなのだ。それで、何年かが飛ぶように過ぎると、また新たな形で糸が張り巡らされて、どうもこの糸を捉えられる科学的な方法の一つもないらしいが、世界は全く別物になってしまった。ここには何か恐ろしいものがある気がしてならない。こういった物事が僕の目に真っすぐに飛び込んできているというのに、ミートラの言うことに一々驚く価値などあるか？（209）

物理的な意味では、世界は以前のまま存続している。しかし、その世界を結び合わせていた糸が、ソ連と共に消滅してしまったのである。ここから分かるのは、世界をかくあらしめていた、目に見えない「価値体系」というシステムその

ものの崩壊である。すなわち、ソ連崩壊という事実は、主人公にとって祖国の喪失だけではなく、自身が依拠していた世界観の崩壊をも意味したのである。そのような状況下においてアイデンティティはどのような形で形成され得るのかを、以下で考察していきたい。

このように世界が変質したという実感が主人公を捉え続けているわけであるが、現象学者エドワード・レルフは、場所とは人間が自己を定位する存在であり、そこでの相互作用によって人間の自己イメージは形成されていくと述べた⁹。ソ連の場合は、国家が崩壊したことによって場所の同一性にパラドックスが発生した結果、そこに暮らす人々の自己認識においても同様のパラドックスが引き起こされた、少なくとも主人公ラーマはそのように感じていたと考えることが出来る。彼にとって自己を定位する場所がないことは、そのまま自己認識が安定した基盤を持ってないということでもある。

ラーマは作品の冒頭で、幼いころにあるアニメを目にした瞬間に、自身の少年時代が終わったことを実感したと語っている。

立ち並ぶ小人たちを見ながら、僕は泣きだしてしまった。だが記憶にもないソ連へのノスタルジーが問題なのではなかった。背丈の1.5倍はあろうかという巨大なベルフラワーの間を行進していった彼らは突如として、何かしら単純で、最も大切なこと——もう僕の記憶にはないもの——を、僕に思い出させた。(18)

これは先に引用したパラドックスから発生した感覚であると考えることが出来る。この作品では「世界(мир)」という語が頻出するが、それは物語全体が、あるシステムとしての世界観をめぐって展開するものであることを示しているといえるのである。

以上のことから、『帝国Ⅴ』はソ連という「失われた場所」に代わる、自己を

⁹ Edward Relph, *Place and Placelessness* (London: Pion Limited, 1976), 39.

定位すべき場所の探求というテーマを持つ小説であるという仮説を立てることが出来る。以下では、作品内で展開される探求について、具体的に考察していく。

「失われた場所のパラドックス」とは、端的にいえば世界の二重化を引き起こすものである。ラーマが言うように「世界は別物になってしまった」のであり、見た目には以前と変わらない世界が、その実決定的に変質してしまったところに、パラドックスは起こる。それはすなわち、世界が外見と実質に分裂してしまうという事態を示すものである。このような事態そのものは特に目新しいものであるとはいえず、古くはロマン主義の時代から、二重化した世界は創作の重要なテーマとされてきた。しかし、アレクサンドル・コワレンコが指摘するように、ペレーヴィンが描く世界の二重化は、伝統的なそれと同一視することは出来ないものである。コワレンコはこう述べている。

ロマン主義的、あるいはネオロマン主義的な詩学においては、幻覚的な『異世界的な』場所は現実のそれと対置されている。しかしペレーヴィンはこの関係性に基本的に依拠しながらも、ロマン主義的な二重世界性の領域を凝縮すると同時に拡散させることで、此岸と彼岸の世界の対立をパロディ化している。彼は新たな二項対立的な場所を創造したのだ。¹⁰

ここでいわれている「パロディ化」とは、ロマン主義の時代に考えられていた「目に見えない真実の世界が存在する」という定理に対するものであると考えられる。すなわち「隠された真実」のパロディ化である。中村唯史がペレーヴィンの創作上の特徴を分析した際に指摘していることであるが¹¹、彼の作品の多くは

¹⁰ Коваленко А. Г. МИР ИГРЫ И ИГРА МИРАМИ В.ПЕЛЕВИНА [http://pelevin.nov.ru/] 2019年1月31日閲覧。

¹¹ 中村唯史「脱出、空虚、ロシア：ペレーヴィン文学の時空間」『現代文芸研究のフロンティア (VI)』(21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集 No.4, 2004, 北海道大学スラブ研究センター) 31-54, [http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/coe21/publish/no4/nakamura.pdf] 2019年1月31日閲覧。

「目前の現実世界から別世界への脱出」というモチーフを持っている。これはコワレンコが指摘した通り、ロマン主義的な真実と偽りの二項対立を下敷きとしていているといえる。しかし、『虫の生活』の一章や『チャパーエフと空虚』の結末などを見れば分かるように、「真実と見えた世界もまた別の偽りに過ぎない」と暗示されることが少なくない。いわばここでは「真実の真実性」が相対化され、パロディ化されているのである。その結果以前は自明とされた「真実と偽り」という二項対立が、パラダイムとしてはもはや機能していないことが明らかにされたのである。ペレーヴィンの描く二重化した世界も、そのような事態を反映していると考えられる。このような前提を踏まえた世界観は、必然的に断片的なものとならざるを得ないのである。

2. 「おとぎ話の時間」

ここで、考察を進めるためにミハイル・バフチンが文学的世界観を分類するために提示した時間カテゴリーを借用しておきたい。すなわち「おとぎ話の時間」、またそれに対置されるものとしての「歴史的時間」である。これはバフチンが教養小説を分析するために用いたカテゴリーであり、彼は人間の自己形成をその全人的な発展という側面からの確に把握するためには、この歴史的時間が欠くべからざる条件となると述べている。換言すれば、教養小説は質的に定義された時間を一つの必要十分条件として成立しているということである。

バフチンは論文『小説における時間と時空間の諸形式』においてこの分類を提示しているが、そこでは時間論について深く掘り下げて考察してはいない。しかし、論文中の記述から、歴史的時間とは世界における具体的な場所と結びついたものであることが見て取れる。

文学における時空間の場合、空間的特徴と時間的特徴とは、意味を付与された具体的な全体の中かで融合する。(中略) 時間的特徴が、空間の中かでみずからを開示し、空間は、時間によって意味づけられ計測される。文学における時空間を特徴づけるのは、両種の系列のこうした交差、双方の特徴のこうした融

合である。¹²

バフチンはこちらも述べている。

文学の場合主導的な原理として働くのは、時間である。しかも、時空間は、形式・内容のカテゴリーとして、(相当程度)文学のなかの人間像をも決定する。¹³

上にあるように、バフチンは文学における時空間とは「時間と空間の交差、融合である」と述べている。これは時間や空間が独立した単体の点ではなく、相互に関連して一つの構造を作り上げているということであると考えられる。構造は一面的な情景を示すのではなく、それと関連する人間の経験を指示する機能を持つことになる。それは人間の行動を規定し、それによって人間の存在様式に対しても影響を与えることになるのである。文学において捉えられたその構造は、人間の意識に改めて表示された場合には一つの価値を表わすことになる。時空間は人間の経験を決定づける働きを持つからである。バフチンがある出来事の舞台となった場所を例にとりて説明しているように¹⁴、時空間は人間の経験と本質的に結びついている。単なる情景ではなく何かしらの出来事と関連する場所は、それを認識する人間と固有の関係を築き、取り換えのきかない独自の意義を持つことになる。そうした意義は人間の記憶に場所の体験として刻み込まれ、一つの価値を持つ。そしてそのような価値の総体が、人格形成の中核を占めると考えられる。人格とはすなわち、価値観の総体であるといえるからである。そうして構成された人格を中心に、周囲の存在一切を自身との関係において価値づけした結果

¹² ミハイル・バフチン『小説における時間と時空間の諸形式』伊藤一郎他訳(水声社, 2001), 144.

¹³ バフチン『小説における時間と時空間』144.

¹⁴ バフチン『小説における時間と時空間』145.

形成された一つの構造体がアイデンティティであると考えられる。ここで重要なのは先述の通りアイデンティティとは常に更新されるものであり、決定的な形で定義することは不可能なものであることである。レルフはその更新が一面においては人間が所属する場所との相互作用によって行われるものであると述べており、「場所との同一化 (identity with place)」¹⁵ という表現でアイデンティティと場所との関連を説明している。したがってアイデンティティ形成においては、具体的な時空間に紐づけされた経験が欠くべからざる要素となっているといえるだろう。それを可能とする性質をもつ、歴史の中に自らの位置を保持する時間、点ではなく線としての時間が、歴史的時間と呼ばれうるのである。バフチンはこれをして、現実との有意な関連を持つ、リアリズムの基礎となるべき時間であると考えたのであろう¹⁶。

そこで松下の指摘にならって『帝国 V』を教養小説の一種として捉えれば、この作品にも「歴史的時間」が見られるはずであるが、『帝国 V』においては先に述べた通り「失われた場所のパラドックス」によって空間が変質しているために、バフチンが意図した形でのアイデンティティ形成は困難となっている。したがってこの作品をその意味での教養小説と捉えることは出来ないと言わざるを得ない。しかし物語の筋書きを見れば、この作品の主要なテーマの一つとして主人公ラーマの人格形成が挙げられるのは間違いないだろう。そこで、バフチンの掲げるものとは異なる観点から教養小説の定義を確認してみたい。

池田浩一によれば教養小説とは「一人の人間が自己と周囲の世界との矛盾や緊張関係のなかに身をおくことで成長をとげ、最終的にこれまでとは別の、新しい生きかたを見出すにいたる成長過程を描くことを中心テーマとする小説」¹⁷であるとされる。この定義に則って考えれば『帝国 V』が教養小説に分類されることに異論はないはずである。しかしバフチンの掲げた条件を無視して議論を進める

¹⁵ Relph, *Place and Placelessness*, 68.

¹⁶ バフチンはフロノトープという名称でこれらの概念を定式化している。

¹⁷ 池田『教養小説の崩壊』, 6.

ことは望ましくない。そこで、本論文では彼が教養小説の前段階として掲げている「遍歴小説」というジャンルに、この作品を分類することを提案したい。バフチンはこれらの形式を先に挙げた二種類の時間の質的差異を根拠に区別して論じ、リアリズムの観点から歴史的時間を備えた教養小説の重要性を主張している。したがってその不完全な発展途上段階とでもいうべき遍歴小説には重きを置いていないともいえるが、「大きな物語の終焉」とともにリアリズムもその支配的地位を失ったといえる時代に、バフチンの分類にこれまでとは異なる視点から取り組み、そこに新たな光を当てる意味で「おとぎ話の時間」、そして「遍歴小説」を改めて取り上げることは伝統的価値観とは別の形での物語構築の可能性を考察するという意味で有意義であると考えられる。

バフチンによればこのジャンルにおける主人公は全人的な存在ではなく、「空間を動く点」として表象される。そしてこの主人公が「できごとへと分解」された背景としての世界で得る経験が描かれるわけであるが、その描写は先に挙げた「おとぎ話の時間」に基づいているのである。この時間において世界は主人公に対して異質性を示すものとなり、物語は主人公に矢継ぎ早に「剥き出しの差異」を突きつけることになる。そしてその差異との遭遇が、物語の「できごと」を構成するのである。

このような遍歴小説の特質は、先に述べた『帝国Ⅴ』という作品の断片化された世界観と呼応する。経験を規定するべき空間がパラドックスによって本来の意義を喪失しているが故に、時空間が構成されず、価値を生み出すこともない。したがってその空間で得られる経験は、人格形成のための条件を満たすことが出来ず、このパラドックスに囚われている人間においては、いわばアイデンティティの形成不全を引き起こしている状態なのである。

目の前の世界が二重化することによって、そこに仮託されたアイデンティティも分裂する。この二重化は消極的な二項対立とでもいうべき関係を樹立する。すなわち、コワレンコが述べたようにどちらかが真実であり、そうでない方は偽りであるというように結論付けることが不可能な二項が対置されるのである。どちらの側にも自身を安置することが出来ない主体は、両極の間を曖昧に放浪するしかない。

この小説において、その消極的な対立は吸血鬼と「舌」という二者の対立として表象されている。「舌」自身も意志を持ち、必要な時には吸血鬼に指令を発することが出来、そして吸血鬼はそれに従わざるを得ない。したがってラーマの個人としての意志は「舌」のそれに従属しており、新たに手に入れた吸血鬼という立場の主体性は、常に曖昧なままに留まっている。これも一種の「真実の真実性」のパロディ化であり、この場合はアイデンティティに関してそれが起こっているといえる。人間という被支配階級を脱出し、エリート側に立ったはずの自分が、その実別の存在に従属する立場であったという皮肉が、ここでは描かれている。

しかし「舌」の意志は吸血鬼に対して明確に現れることはなく、常に直観という形で示される。彼のアイデンティティは、吸血鬼としての個人と、「舌」の従者という立場の間を行き来し、物語の結末まで定まることはない。作中では両者の関係性は、「ナポレオンと彼が乗る馬車」にたとえられる。そして馬車としての自分を受け容れられないラーマは、やはり自身の立場を決めかねて苦悩するのである。自分が自分であって自分でないという状況もまた、「失われた場所のパラドックス」と対応しており、したがってアイデンティティの形成不全の一面であるといえる。

それ故に『帝国 V』における主人公ラーマの遍歴は、この不全状態を解決するために吸血鬼としての新たなアイデンティティを構築しようとする試みを中心に展開することになる。そしてそれは吸血鬼の共同体へ適応することによって達成出来るとされるが、ラーマの内面では未だ「場所のパラドックス」がくすぶっており、それを解消せずには十全なアイデンティティ形成を成し得ないと彼が感じていることが、作品の随所でほのめかされている。

ここには、複数化した二極構造が表れているといえる。これは先に述べた「消極的な二極化」が連鎖して起こっている状態を指すものであり、ピラミッド状のヒエラルキー構造を作り出すものである。ただし、もとをただせばこれはパロディ化という意味での二極化であり、その真実性は当然のことながら保証されていない。すなわち「失われた場所のパラドックス」を、対象を変えて反復したものに過ぎないのである。哲学的概念のみならず、吸血鬼と人間、「舌」と吸血鬼、

吸血鬼とハルデイ、イシュタルと吸血鬼、イシュタルと大文字の神、といったような階級間の差異に至るまでが作中でセルフパロディ的に相対化された結果、複雑に錯綜していながら内実的には空白の、すなわち断片化した世界観が現出することになるのである¹⁸。ラーマの前には矢継ぎ早に二項対立が提示され、それらに関する具体的な説明は与えられない。それ故に彼のアイデンティティの形成不全は解消されず、ラーマは遍歴を続けることになるのである。

3. 世界観構築の手段としての「秘教」

さて、今や二つ目の問題に取り組むことが出来るようになった。すなわち、「新たな『物語』の構築」である。この章で主張したいのは、この作品において、物語とはすなわち世界観であり、主人公の前に開ける新たな世界が彼の中に内面化されていく過程が小説のテーマであるということである。そしてそれはそのまま、彼のアイデンティティ形成の過程に転写される。それが意味するのは、世界観が現実離れしていればいるほど、それは主観的なものとなり（現実社会という世界観の現実性を保証してくれる要素がないわけであるから）、それに依拠して形成された彼のアイデンティティも、極度に主観的なものとなるということである。

それを検証する上で指摘しておかねばならないのは、吸血鬼の知識の伝授が作中で「儀式（*ритуал*）」と呼ばれていることである。しかしここでそう呼ばれているのは、厳密に言えば儀式というよりは「秘教的知識」とでもいうべきものであり、その点はミハイル・リュクリンがペレーヴィンの作品全体に備わる性質として指摘したものでもある。彼はこう述べている。

ペレーヴィンは、解脱した人間は深い意味において死せる存在であり、他者に

¹⁸ この混沌とした世界観は続編の『バットマン・アポロ』（2013）で吸血鬼の立場が根本的に相対化されることによって極まることになる。

何かを示す必要などないということを理解している。しかし同時に彼のテキストは瀕死のものであり、論争や、最も秘教的な筋書きに関わる謎に満ちみちている。¹⁹

秘教性についてはフランスの学者アントワース・ルフューブルが著書『エゾテリスム思想』で述べているが、グノーシス思想の流れを汲む一つの思考様式として「さまざまなタイプの経験や想像物が配置される受け皿」²⁰として考えるべき概念である。それは恣意的な基準に沿って世界を分割し分類することで世界を理解可能な形へと構築し直すことを意味するが、その基準は共同体によって共有されていなければならないという重要な条件があることを指摘しておかねばならない。これはルフューヴルが秘教性に備わる「伝授」という性質を挙げて説明している通りである。イニシエーションなどの儀式を通して伝達可能な形で知識が蓄積されていることが、秘教性を強める効果を持つのである。

そしてそのような形でラーマに伝えられる知識は、彼に世界の理を自身の力で新たに組み立て直す方法を示唆することによって、「失われた場所のパラドックス」を解消する可能性を、そして同時に十全なアイデンティティを確立する可能性をも感じさせる。マルク・リポヴェツキーはそのような世界観構築の可能性をこう論じている。

仮に他の連中が真実や現実、想像、虚構、シミュラクルについての標準化された概念に依拠して考えてきたのだとすれば、ペレーヴィンはシミュラクルや虚構から新たに現実を組み立てることが可能であることを、一貫して示してきたのである。²¹

¹⁹ Рыклин М.К. «Время Диагноза» М., 2003, С. 83.

²⁰ アントワース・ルフューブル『エゾテリスム思想』田中義廣訳（白水社、1995）、26.

²¹ Липовецкий М. Голубое сало поколения, или Два мифа об одном кризисе [<http://magazines.russ.ru/znamia/1999/11/lipovec-pr.html>] 2019 年 1 月 31 日閲覧.

この論述を踏まえて考えれば、知識の伝授という形で秘教性が強調されることによって、ベレーヴィンの作品に通底していた「選民性」という特徴が『帝国V』において顕在化したと考えることが出来る。ラーマは街中で「エリート仲間入りの真実のチャンス」²²と書かれた張り紙を見て書かれた住所を訪ね、そこで吸血鬼へと変身するのであるが、彼がそのような行動に出たという事実は、自身の出自が決して社会的に地位の高いものではなく、当時の職業がスーパーマーケットの荷卸し係であったという背景から来る劣等感と無関係ではないはずである²³。彼は自身のアイデンティティに対する不満を抱え、エリート階級へと参入することでそれを解消しようとしたのである。

ラーマのエリート階級への屈折した意識は、その少年時代に根を張るものであると考えることが出来る。

(父は) 大手の新聞で記者として働いている人だった、彼のコラムをネットで見つけさえした。縦書きの記事の上に小さな写真がついていて、禿げ頭に眼鏡で自転車にまたがった男がそこから人懐こい顔をのぞかせていた。記事には、ロシアは国民と行政が他者の財産に敬意を払うことが出来るようにならない限り、健全な国家となることは出来ないと書かれていた。説得力のある意見ではあったが、なぜだか僕には馴染まないものだった。おそらく父は当時の僕には理解出来ない表現(「平民」,「健全なエリート層」)をよく用いていた、ということだったのだろう。父の顔に浮かんでいる笑顔は僕の中に、嫉妬混じりの不快感を催させた。その笑顔は僕にではなく、健全なエリート層に向けられたものであって、しかも彼らの財産を僕は尊重出来るようにならなければならないことが明らかだったからだ。(20)

²² Пелевин. Empire «V». С. 25.

²³ ヘラの前でかつての仕事について口にしられ、ラーマが強い苛立ちを感じる描写がある (C. 181).

エリートという言葉は、否応なしにヒエラルキー構造を連想させる。父の興味が自身には向けられていないこと、そしてそれを取り戻す可能性がはじめから奪われているという事実は、ラーマの内面に消えることのない劣等感を刻み付けた。愛されない自分と、それに対置される存在としてのエリートという構図は、他者との関係をヒエラルキー構造で捉える彼の性向を決定づけたといえるだろう。それ故に彼はエリート参入のチャンスという文句に惹かれたのである。

しかし、エリートを自称する吸血鬼の共同体へ入っても、そこにはやはりヒエラルキー構造が存在し、それまでとは違った形の屈託を、ラーマは抱くことになる。彼とほぼ同じ時期に吸血鬼へと変身した女性、ヘラとの関係が、彼を悩ませるのである。彼女に対するラーマの感情は複雑なものである。当初彼はヘラに好意を抱き、彼女の方も満更ではない様子であったが、二人の思考には浅からぬ隔たりがあり、それが会話の度に明らかとなるにつれて、ラーマは彼女を異性としてよりもライバルとして捉えるようになっていく。しかし異性としての意識も消えてしまったわけではなく、彼女と近い様子を見せる先輩格の吸血鬼ミートラとの対立が、物語終盤の筋書きを規定するようになる。

しかし、実のところラーマは「彼女に嫉妬している」²⁴のであって、吸血鬼としての学習において常に自身の一歩先を行っているヘラに対して、彼は屈折した感情を抱き続ける。この屈託の根底には劣等感があると同時に、格下と見なしていた²⁵ヘラの方が優秀であったという事実を受け入れられないラーマの、裏返し選民意識が反映されているといえる。彼は自身の吸血鬼というアイデンティティに由来する（と教えられる）人間に対する優越的な立ち位置をヘラに対しても当てはめ、それをもって自身を吸血鬼社会においてもエリートの位置におくことを無意識にではあれ望んでいる。そしてそれが根拠のないものであるどころか、実際には自身の方が低い立場にあることを知り、彼は強いフラストレーションを感じるのである。ここから読み取れるのは、ラーマが本質的に優劣関係にお

²⁴ Пелевин. Empire «V». С. 306.

²⁵ ヘラが登場する場面で、ラーマが彼女に“baby”と呼び掛ける一節がある（C. 188）。

いて他者との関係を把握しようとしていること、同時に自身のアイデンティティをエリートという枠組みで終始規定しようと望んでいることである。これが本論でいう「選民意識」である。このような意識は吸血鬼社会の共同体という性質と相容れぬものであり、結果的にそれがラーマが最終的にミートラとの決闘に敗れ、吸血鬼の共同体においても居場所を失うという結末へと繋がるのである。

その他にも、ラーマは幾度も「人間のよう考える」²⁶ことをたしなめられている。時には教師であるバリドルから、また別の時にはヘラからさえもその傾向を指摘されている。これは、ラーマにとって吸血鬼の共同体への適応がうまく出来ていないことを糾弾するようなものと捉えられ、少なからぬ屈辱と感じられるものであった。それ故に彼は吸血鬼の中でも一種のはぐれ者とされる「ТОЛСОВОЕЦ»（トルストイ主義者）オシリスの下へ向かうことになる。人間社会にうまく居場所を見出すことが出来なかったラーマは、吸血鬼社会でも十全な満足を得られないのである。

クセーニヤ・ディヤコワは、この小説を『ハリー・ポッター』シリーズと比較している。確かに人間界とは別の共同体に所属し、そこで様々な体験を積んで自己形成していくというプロットの大枠においては、両者は共通しているといえなくもない。また、造語が頻出する展開、人間とそれ以外の種族との優劣関係など、いくつかの設定上の類似も見て取れるが、この魔法物語と『帝国V』とを逐一比較すれば、明確な善悪の区別、クライマックスにおける敵との対峙、明瞭なプロット展開などの特徴からいっても、彼女が挙げた類似点は偶然的なものといわざるを得ない。彼女は二つの作品をともに«фантастический роман воспитания»と評している。『帝国V』をファンタジーと受け取ってよいかどうかは多少疑問ではあるが、«роман воспитания», すなわち教養小説としての特性は両者ともに備わっているといっていいただろう。しかし両者の間には、「世界観の構築」という作業の有無という大きな差異が存在する。『ハリー・ポッター』シリーズは主人公の成長を一年ごとに描く形式を取り、第一巻の冒頭では彼は

²⁶ Пелевин. Empire «V». С. 91.

11歳の少年である。そこでは彼は両親の事故死によって預けられた親戚の下で虐げられており、ひたすらそれに耐える以外に生きる術を持たない。彼にとって魔法学校への入学は自身で選び取ったものではなく、ある日突然目の前に現れるものである。端的に言えば、このシリーズは一種のシンデレラストーリーの形式を持っている。主人公の中に選民性はほとんど見られず、むしろシリーズ全体の主軸となる巨悪との対立において、悪の側の方が選民性、純血主義を掲げている。そして主人公自身も含め、シリーズの中心人物の中でエリート立場にいる人物は少数派である。したがってこのシリーズにおいて、事実上主人公は選民主義とは対照的な立場にいるといえる。これは『帝国 V』との大きな差異である。既に述べた通り、ラーマはエリート階級へと参入するチャンスを望み、新たな世界（それが吸血鬼のものとは知らなかったとはいえ）へ入ることを自ら選択したのである。そこには先に述べたように劣等感の裏返しであるところの選民意識が存在し、結局のところ人間であるか吸血鬼であるかには関わりなく、それがラーマという存在を規定している。結局のところ、ラーマにとって世界観を構築するとは、極論すれば「選ばれた存在である」という、自身に都合の良いヒエラルキー構造を作り上げることに他ならなかったのである。

4. 『帝国 V』の作品論的位置づけ

『帝国 V』という作品は、かつてボリス・ラーニンがペレーヴィンの作品の特徴として指摘したような活劇的な筋書きを備えてはいない²⁷。この作品で描かれているのは、一つの共同体へと自身を同化させていく主人公の努力に焦点を当てた、いわば静的な筋書きである。『帝国 V』には、『チャパーエフと空虚』に見られた冒険的な要素や、『ジェネレーション P』（1999）にあった謎解きの要素などは影を潜め、専ら主人公ラーマが様々な師匠筋から教えを受けられる場面がプロットの中心となる。吸血鬼特有の性質とされる人間蝙蝠への変身や、一種の通

²⁷ ボリス・ラーニン（貝澤哉訳）『ソローキンとペレーヴィン』（東洋書店、2015）、25。

過儀礼といえるバブロスの摂取などの山場は一応設けられているが、その場面においても、それまでの作品にあったような戦闘や逃避行というような冒険らしい冒険は見られない。それは物語の主題が世界観の構築にあり、哲学的思索の焦点がこれまでの作品のように至高の原理へと到達することを目指すものではなく、自身と世界との関係を改めて築き上げることへと向けられていることと関連しているのではないだろうか。このような思索自体はペレーヴィンに特有のものというわけではないはずであり、ある意味教養小説はすべからずそのような機構を、顕在性の度合いは異なるとはいえ、備えているということが出来るかもしれないが、ペレーヴィンの場合、それが秘教性というフィルターを通して、意識的になされるところに大きな特徴があるといえる。そのような世界観の構築に関して、ミハイル・リュクリンはこう述べている。

『チャパーエフと空虚』の著者ペレーヴィンにおいては、それは外側への逃避、何らかの意味で存在している外面的な共同体への脱出であった。彼にとってはどのような場合でも弁別的言語で示すことの出来る外在的社会性が存在しているのである。たとえその外在性が虚構的なものであったとしても、その存在自体が、現実原理から逃れることで捉え難く超現実的となる複数の世界の存在を読者に認識させることによって彼らを眩惑することになるのだ。²⁸

これは1999年に書かれた論文であり、主に『チャパーエフと空虚』について分析したものである。ここに書かれているように、『チャパーエフ』においては、世界観は構築するものというよりはむしろ探求し、発見されるものであった。そのような場合は、常にどこに存在すると仮定される「外在性」を目指して思考を重ねていけばよかったのである。しかし、『帝国Ⅴ』においては、世界とは探し出すものではなく作り上げるものである。作品では世界の構造は合わせ鏡を例にとって説明される。互いを映し合う鏡の他には何ものも存在しないと、それまで

²⁸ Рыклин. «Время Диагноза» С. 84.

の作品で展開した思考のセルフパロディのような一節があるほどである²⁹。すべては言葉から作り出された虚像に過ぎない以上、その正体や本質について議論する必要はなく、それを伝承される知識に則って自由に組み上げていけばよいと、ラーマは繰り返し説かれることになる。したがって、世界観の構築とはヒエラルキーの構成を意味しているのである。しかし吸血鬼は一つのヒエラルキー構造に拘泥することなく、複数の二極構造を相対的に把握する必要があるともされている。そして、少なくとも作品内で展開される論説を字義通りに解釈すれば、それがアイデンティティ確立の方策であるということになる。

ここで重要なのは、ヒエラルキー構造と共同体の差異を確認することであろう。本論では主人公ラーマは常に自身を頂点に置くという意味で自身に都合の良いヒエラルキー構造を作り上げることを目指してきたと述べた。しかし小説の結末からも読み取れるように、彼の努力は報われることはなかった。ここに、『帝国 V』で描かれるアイデンティティ形成の在り方と以前のペレーヴィンの作品におけるそれとの差異が認められ、特にこの作品を「ポストモダン以降の教養小説」と考える一つの根拠があるといえる。すなわち、以前の『チャパーエフ』や『ジェネレーション P』では回避されてきたヒエラルキーと共同体という二つの世界観の衝突が、本作『帝国 V』では主題として取り上げられているということが出来るのである。前者二作品がその結末に「脱出」を置いていたとすれば、『帝国 V』は脱出先での主人公の適応の努力、池田の記述に従えば「新しい生き方を見出す」過程を描いたものであるといえる。そしてそこでは、これまで所屬していた共同体からの離脱を完遂するために当座の目的地としての外世界を観念的に志向していた『チャパーエフ』とは異なり、他者との関係において具体的な価値観のすり合わせとでもいうべき作業を避けて通ることは出来ない。しかし、ラーマは未だそれを感得することが出来ず、自身を頂点とするピラミッド状のヒエラルキー構造を作り上げることに躍起になり、それが首尾よくいかないために苦悩しているように思われる。この点は彼の最高傑作とされることの多い『ジェ

²⁹ Пелевин. Empire «V». С. 289.

ネレーションP』の主人公タートルスキイが、気付かぬうちに次々とピラミッドを上昇していった事実と対照的である。それは作品の焦点がアイデンティティ形成に絞られていることも一つの要因であるが、それ以上に『ジェネレーションP』においては「失われた場所のパラドックス」が扱われていないということに主要な理由があると考えることが出来るのではないだろうか。

既に述べたように、『帝国V』は主人公ラーマの、吸血鬼の王国という新たな共同体への適応の物語であると同時に、それに対応して自分自身のイメージを自身の中に構築する、アイデンティティ確立の試みを描く物語でもあった。自身の経験を糧に、新たに世界を自分の内面に構築することが、彼にとってのアイデンティティ形成であったわけであるが、結論からいえばそれは失敗に終わったと言わざるを得ない。というのも、ミートラとの決闘に生き残りはしたものの、吸血鬼の共同体への適応はかなわず、孤独な立場に置かれてしまうからである。ラーマは最終的に「フジの頂」という観念的な存在に自身を仮託することになる。これは物語全体において繰り返されるラーマの体験の帰結が、結局は主観的なものとならざるを得なかったという事実を表している。共同体への参入のチャンスを与えられながらそれを活かすことが出来ず、結果的に孤独な立場へと追いやられたラーマが自己イメージを仮託することが出来たのは、吸血鬼の共同体における確固たる地位でも、ヘラからの愛情でもなかった。最後に残ったのは女傑イシュタル・ボリソーヴナからの「私はお前の唯一の友」という手紙だけだったのである。ラーマは全編を通して無条件に自身を受け容れ、称賛してくれる存在を求め続けていた。それを端的に示しているのは、全てを失った後、イシュタルからの手紙にかすかな救いを見出していることが読み取れるシーンである。孤独でありながらも一人でも自身を肯定してくれる存在がいることが、彼にとっての救いとなると考えることが出来るわけだが、それは結末における署名に、「イシュタル・ボリソーヴナの友人」と書かれている³⁰ことから推測出来る。結局のところ、ヒエラルキー構造を完成させることを諦め、たった一人の友人を見出し

³⁰ Пелевин. Empire «V». С. 412.

たことにささやかな慰めを得る以外になかったのである。

秘教性が強調されることによって、ペレーヴィンの作品群における『帝国Ⅴ』の立場が明らかになる。それは、これまでの作品と比較して世界観の面で変化が見られる作品であるということである。これまでのペレーヴィンの作品、たとえば『チャパーエフと空虚』（1999）に見られた、複数の表象を総合して導き出された単一の（暫定的な）真理へ到達するという形式はここでは見られず、単一の結論へ達するための原理が与えられることなく、堂々巡りとも思える思索が繰り返されるのが『帝国Ⅴ』の特徴となっている。この作品の結末で示されるのは、取捨選択の結果としての結論、真理としての正当性は度外視された、恣意的といってもよいほど個人的かつ主観的な世界観である。それ故に、前章で述べたように価値観のすり合わせという作業を完遂出来ず、主人公ラーマは脱出した先の世界からも疎外されることとなる。その結末が、脱出の過程が主眼となっていた以前の作品と、ポストモダン以降の物語構築の在り方を主題とする『帝国Ⅴ』との、テーマ的な差異を示しているといえる。

『チャパーエフ』においては、物語にはある根本的、究極的な単一原理が存在し、経験を積んでその原理に到達することが小説の大筋を構成し、全体として「冒険、修行」という性格を備えていた。そこにおいて世界は幻覚という形を取ったパラレルワールドとして具現化され、多種多様な経験を描写することが可能となっていた。そしてそれらを包括し、一つの結論へまとめ上げる概念として、「空虚」などの哲学的な用語が提示されていたわけである。

しかし『帝国Ⅴ』においては、物語の筋書きは定期的に行われる儀式的描写によってある程度のメリハリが与えられてはいるものの、これまでの作品に見られたような具体的なエピソードの軽快な羅列は見られない。作品で描かれるのは基本的に、主人公に対して与えられる説明と、それに関する彼の考察のみである。主人公は少しずつ経験を積んではいくものの、それが彼の世界観を構成することはない。というのも説明に関して主人公が抱く疑問に納得のいく返答が得られることはなく、常に「いずれ分かる」「今は言われた通りのことを信じていればよい」³¹ というように、盲従を強いられるからである。言い換えれば、『帝国Ⅴ』では複数化していた世界が単一のシステムへと回収され、より共同体としての性

格を強めた、いわば社会性を帯びたものとなった。これは同時に、抽象的、観念的であったペレーヴィンの小説が、ある種の具体性を踏まえたものへとシフトしたということでもある。荒唐無稽な冒険物語の成果として、チャパーエフやアナナ、『ジェネレーションP』のイシュタルのように無条件に自身を迎え入れる人物を得るという筋書きから、ある共同体へ帰属するための努力を通して社会的なアイデンティティの構築を目指すという、いってみれば筋書きとしての特質の変化を見せているということが出来る。それが良い方向への変化であるかどうかはさておき、90年代におけるほどの熱狂を、彼の作品が引き起こすことはなくなってきていることは否みがたい事実である。また『帝国V』についても毀誉褒貶の激しい評価が与えられていることも指摘しておく必要があるだろう³²。

おわりに

本論文では、ヴィクトル・ペレーヴィンの『帝国V』におけるアイデンティティ形成の問題について考察し、これが自身の帰属する場所を求める物語であるという形式を取りながらも、その実主人公が求めているのは自身に都合の良いヒエラルキー構造であり、それに気づけなかったが故に最終的に彼は孤独をかこつことになることを論じ、それによってポストモダン以降の物語構築とは、ヒエラルキー構造ではなく共同体の構築とならねばならないという見解が提示されていること明らかにした。この作品は哲学的思索に満ちたものではあるが、中心となるテーマは青年の自己意識を巡る葛藤を扱うものであったということで、この作品が一種の教養小説であるという仮説を少しではあるが検証できたのではないかなと思われる。

(うらべ あゆむ、大阪大学大学院)

³¹ Пелевин. Empire «V». С. 124.

³² ペレーヴィンの作品を巡る社会的な反応についてはラーニン『ソローキンとペレーヴィン』、岩本和久『トラウマの果ての声—新世紀のロシア文学—』（群像社、2007）などを参照。

«Empire V» как роман воспитания: парадокс пространства и идентификация

Аюми Урабэ

Университет Осака

Цель данной работы – жанровый анализ романа Виктора Пелевина «Empire V». Этот роман был опубликован в 2008 году. М. Вахтин по жанровым особенностям назвал его романом воспитания, а Т. Мацусита в своей работе указал, что «Empire V» является романом воспитания такой эпохи, когда распался миф позитивного развития человеческой личности.

Сюжет строится как жизнеописание Романа, который становится вампиром в результате пересадки «языка». Роман старается стать настоящим вампиром для того, чтобы быть принятым в соответствующее общество, он обретает возлюбленную и подругу – Геру. Однако, в конце концов, он терпит неудачу и становится одиноким маргиналом в обществе вампиров.

Внимание автора статьи фокусируется на становлении идентификации героя. Речь идет о том, что на самом деле надежды героя были слишком субъективны и поэтому не могли быть реализованы. В центре внимания статьи то, как герой хочет достигнуть своей цели, как происходит становление иерархии, в которой он занимает самое высокое положение. Однако эта цель вступает в противоречие с общественным устройством, так как она игнорирует его гармонию.

Мы приходим к выводу, что успешное становление личности, даже в эпоху постмодерна, не может не быть связано с обществом. Другими словами, приоритетом общества всегда является не иерархия, а гармония.

秋草俊一郎著

『アメリカのナボコフ——塗りかえられた自画像』

慶應義塾大学出版会，2018 年，356 頁

諫 早 勇 一

秋草俊一郎氏の新著『アメリカのナボコフ——塗りかえられた自画像』の書評を依頼されたとき、私は戸惑いを禁じえなかった。なぜなら、亡命や亡命文学という文脈のなかでしかナボコフの小説を読んで来なかった私は、アメリカ移住以降のナボコフについては関心が薄く、その研究書を論じる資格はないように感じられたからだ。しかし、本書を読みはじめると秋草ワールドにどんどん引き込まれ、「アーカイヴ資料で自説を補強することが」「もはや常套手段になった」(322 頁)¹ 世代の研究書を、ボイドやドリーニンの世代の自分が論評することにも意味を感じるようになった。膨大な資料に裏付けられ、最新の文学研究の流れも取り入れた本書は、章のタイトルを読むだけでも興味を惹かれるが、実際ナボコフという作家の既成のイメージを大胆に破壊して再構築してくれるスリリングな本とも言えるだろう。以下私なりの視点から本書の新たな意味を紹介してみたい。

本書は序章（「ナボコフと読者たち」）と 6 つの章からなっている。序章に記された著者による簡潔なまとめから引くと、第 1 章「亡命の傷——アメリカのロシアで」は、「肯定的にのみ語られてきたナボコフの二言語使用や自己翻訳を再評価しようとした章」(24 頁)であり、「英語作家ナボコフが、20 年代、30 年代の自分の『ヨーロッパ亡命時代』をいかに後始末したかについて論じた」章である。つづく第 2 章「ナボコフとロフリン——アメリカ・デビューとモダニズム出

¹ 『アメリカのナボコフ』からの引用は丸かっこ内に頁数のみを示す。

版社」では、「ナボコフ初の英語作品の出版社となったニューディレクションズ、およびその創業者のジェイムズ・ロフリンが、英語作家ナボコフの創造と受容にはたした役割」(25 頁)が論じられ、第3章「注釈のなかのナボコフ——『エヴゲーニイ・オネーギン』訳注から自伝へ」では、プーシキン『エヴゲーニイ・オネーギン』訳注において、「ナボコフが自分の幼年期と故郷をいかに描きかえたのか」が論じられている。そして、第4章「フィルムのなかのナボコフ——ファインダー越しに見た自画像」では、ナボコフの写真(ポートレート)の「流通に焦点」(25 頁)が当てられ、第5章「日本文学のなかのナボコフ——戦後日本のシャドーキャノン」では、「日本でのナボコフ受容が、モダニズムと私小説、エロチシズム(背徳か否か)、前衛文学という争点をめぐっておこなわれていること」(26 頁)がしめされて、最後の第6章「カタログのなかのナボコフ——正典化、死後出版、オークション」では、「1977年のナボコフの死後、その『文学的価値』がいかに高められたのか」(26 頁)が詳述されている。

序章は本書の流れを整理したものだが、1940年5月にアメリカに渡ったナボコフは、「当初はさまざまなかたちでロシア人コミュニティの庇護」をうけ、「機会があればロシア語読者の前に姿をあらわし」(10-11 頁)ていたにもかかわらず、1958年の『ロリータ』の成功以降、その姿勢は大きく変化する。著者はいう。「本書で扱うのは、アメリカ到着以降、ナボコフが被り、あるいは作家自らの力で引き起こした文脈のドラスティックな変化」(24 頁)であり、「アメリカに上陸したナボコフが、卓越したロシア語作家という自画像を、世界的な英語作家へと描きかえるまでを追ったものになるだろう」(27 頁)と。もちろん、本書は「描きかえるまで」ではなく、「描きかえた後」にも多くの紙面を割いているのだが。

第1章から紹介すれば、亡命者やその組織の仲介でアメリカに到着したナボコフは、当初は亡命ロシア人たちと密な関係にあった。亡命ロシア文学の研究者として知られるストルーヴェ、英語小説『ブニン』のモデルとも言われるコーネル大学の同僚シェフチェリらが友人の側にいたとすれば、ハーヴァード大学での人事をめぐって、言語学の大家ヤコブソンや歴史学者カルボヴィチとは対立関係を結ぶことになるが。そして、『ロリータ』でアメリカの作家として華々しくデ

ビューした後も、亡命者にとってナボコフは偉大なロシア語作家であり、シャホフスカヤのように、その「英語作品は、ロシア語作品にはまったくおよばない」（38 頁）と考える人は少なくなかった。

しかし、『ロリータ』の成功後、「ナボコフの『セレブリティ』としてのステータスは、アメリカでの数少ないロシア人の友人との関係にも変化を生じさせた」（48 頁）。筆者はナボコフがロシア語版『ロリータ』に寄せた「あとがき」で、自ら手がけた『ロリータ』のロシア語訳が原作にはるかに劣ると強調していることについて触れながら、これは一般に解されているような「自分のロシア語能力の低下を嘆いたもの」（52 頁）ではなく、むしろ「アメリカのロシア人コミュニティに気兼ねする」（53 頁）ことなく、『ロリータ』を「私のもっともすぐれた英語の本」²と宣言することに力点が置かれていると解しているが、これまでの説を覆す興味深い指摘だろう。

ナボコフは「アメリカを去った 1959 年前後から、過去のロシア語作品のほぼすべてを自分の手で——多くは息子ドミトリイの手を借りて——逐一英訳し、刊行していく」（57 頁）が、短編「チョールブの帰還」の、ストルーヴェによる英訳と息子との共訳との比較は示唆的だ。著者はこうまとめる。自己翻訳、「それは過去の自己を現在の自分で——『世界的な英語作家』というセルフイメージで置きかえることだった。それは、英語作家ナボコフがロシア語作家 V・シーリンの顔に、自家製の仮面をはめることだと言ってもいい」（65 頁）と。自己翻訳とは原作にもっと近づく試みというよりは、亡命作家としての自分から遠ざかるうとする企てだったのだろうか。

第 2 章以降各章はそれぞれに魅力的だが、それらは時代順に並べられているというよりは、独立したテーマを論じたものだから、（そして、それらはかならずしも『アメリカのナボコフ』というタイトルでは括れないから）ここでは順不同に論じてみたい。まず作家論としては多少物足りなく感じた（自分の関心からは

² ナボコフ「ロシア語版『ロリータ』へのあとがき」、秋草俊一郎編訳『ナボコフの塊』（作品社、2016）、280。

離れて感じた) のが、第4章と第5章だった。もちろん、両者とも多くの関連資料にあたって、これまではうかがい知れなかった事実を教えてくれるという意味ではきわめて貴重なものだが。

第4章は、ブックカバーや研究書などでおなじみのナボコフの写真（ポートレート）を写した写真家たちを紹介し、とりわけカール・マイダンス、ヘンリー・グロスマン、フィリップ・ハルスマンという3人の写真家による写真——蝶、チェス、妻、執筆風景などを撮った写真が、セレブリティとしてのナボコフのイメージを定着させる上で重要な役割を果たしたことを教えてくれる。「ナボコフの特徴は、モントルーで人目を避けて暮らしながらも、サリンジャーやピンチョンのように完全に隠れてしまうのではなく、その環境を自分のパブリックイメージに利用した点にある」（198頁）のだ。

第5章は日本の作家、批評家がナボコフをどのように捉え、（場合によっては）作品にどのように取り込んだのかを紹介した章で、作家としては『道化師の蝶』（2012年）で芥川賞を受賞した円城塔と、『美しいアナベル・リー』（2007年）を著した大江健三郎が論じられているが、大江健三郎は丸谷オ一とともに批評家としても論じられ、「モダニズムの伝統を重視した」（257頁）丸谷とそうでない大江とは、『ロリータ』のような作品の評価も好対照をなすとされている。

つぎに第3章だが、この章のもとになった秋草氏の論文「世界は注釈でできている——ナボコフ『エヴゲーニイ・オネーギン』注釈と騙られた記憶——」（『スラヴ研究』No.33, 2008）はすでに目を通したことがあり、この章も一読したときは新しさを感じなかった。しかし、2008年の論文と比べてみると、（2013年に口頭発表した後、改稿されたというとおりの）かなりの手直しがなされており、10年の時を経た秋草氏の研究の進展が見てとれる。

本章が、『エヴゲーニイ・オネーギン』の第4章19連4-6行目に付された長大な注釈においてナボコフが立てた、プーシキンとルイレーエフが、後にナボコフの父方の祖父の領地となるバトヴォで、人知れず決闘したという仮説（筆者は「たしかめる術がない状況証拠のつかさねによる推論」（160頁）としている）をめぐる展開されていることは前稿と変わりがないが、前稿ではかなり省略されていた注釈が今回は全訳されていること、ルカおじさんに関する記述が省か

れたり、『キング、クイーン、ジャック』からの引用やドリーニンからの引用が付け加えられたりしていることなど、改稿された部分も少なくない。そして、結論部を比べてみると、「ナボコフは注をタイムマシンのように用いて、記憶を創造し、時間を操作してアリュージョンを作り出し、自分の過去と接続した」³という前稿の記述よりも、「長い注釈を書いたのは実は『再想起』するためというよりは、注釈で『でっちあげ』た『決闘』を、のちの自伝で回想と重ねあわせ、『引用する』ためだということがわかってくる」(163 頁)という本章の記述の方が理解しやすく感じられる。

なおこの章では、デカプリストだったルイレーエフを偲んで「吊るされた男の道」と呼ばれていたバトヴォにつながる道の話から、繰り返し改作されたナボコフの自伝へと議論が広がり、1940 年代に書かれた自伝『決定的証拠』は「回想記」としてまとめられたが、1960 年代に決定版として書かれた『記憶よ、語れ』は「文学者としての自画像だった」(180 頁)と述べられていることを付記しておきたい。

さて、亡命ロシア人作家だったナボコフが、世界的に有名な英語作家になるまで、そしてなった後を論じた本書の多彩な章のなかで、もっとも読み応えがあるのは、「ケンブリッジに腰を据えておこなった 1 年 8 か月の研究調査の直接の成果」(326 頁)であり、*Nabokov Online Journal*, Vol. 10/11 (2016) にも掲載された第 2 章だろう。アメリカに渡ったナボコフが英語作家としてデビューするにあたって、批評家のエドモンド・ウィルソンが果たした役割はよく知られているが、「ロフリンとニューディレクションズがナボコフの作品制作にはたした役割は、ほとんど知られていない」(78 頁)。しかし、ロフリンの出版社ニューディレクションズとナボコフとの関係は、波乱に満ちた経緯をたどっていく。ロフリンがナボコフの最初の英語小説『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』(1941 年)の刊行を決心する前、友人だった作家デルモア・シュウォーツは彼に、「き

³ 秋草俊一郎「世界は注釈でできている——ナボコフ『エヴゲーニイ・オネーギン』注釈と騙られた記憶——」(『スラヴ研究』No.33, 2008), 117.

みがこれを刷るっていうのなら、ただ愛のために (for pure love) しなくちゃいけない」(80 頁) とアドバイスしたという。それに対してロフリンは、「もちろん、ぼくは自分の魂をナボコフにやるつもりだ」(82 頁) と答え、以来彼は評論『ニコライ・ゴーゴリ』(1944 年)、最初の英語短編集『ナイン・ストーリーズ』(1947 年)などを次々と刊行していく。「文学はビジネスであるまえに芸術なのだ」(85 頁) という自分の考えを実現するために。そして、ナボコフ自身も 1942 年ウィルソンに「ニューディレクションズが心から気に入ったし、ほかの出版社を探すなんて考えられない」(102 頁) と綴っていた。

しかし、『セバスチャン・ナイト』の刊行からしばらくして、小出版社の限られた印税が原因ともなっており、両者の間には亀裂が生まれはじめる。1947 年英語小説第二作『ベンドシニスター』をヘンリー・ホルト社から刊行したナボコフは、1950 年「結局、文学は愉快なだけではありません。それはビジネスなのです」(112 頁) とロフリンに書き送っている。なお『ロリータ』執筆後、ナボコフはその原稿をロフリンにも送っていて、ロフリンも「これは最高級の文学作品だ」(114 頁) と認めたが、小出版社ゆえに出版にともなうリスクを負うことはできず、刊行は断念せざるをえなかった。そして、1961 年「ナボコフはニューディレクションズに妻をつうじて最後通牒をつきつけ」(124 頁)、両者の関係は終わりを告げる。著者は言う。『『愛』によってはじまった両者の関係のいきつくところが、ビジネス・トークだというのは皮肉なことだった」(125 頁) と。とはいえ、「ロフリンはナボコフを『ニューディレクションズの作家』にはできなかったが、ナボコフを『アメリカの作家』にするうえではたした役割は少なくともあったのである」(131 頁) という結論は十分首肯できるものだろう。

最後の章である第 6 章では、没後のナボコフをめぐる流れが詳しく紹介されている。まず「1977 年に作家が死去したあと、ナボコフの名声は下火になるどころか、逆に高ま」って、ウィルソンとの往復書簡集 (1979)、書簡集 (1991) など「重要な出版物が定期的に刊行され、そのたびに批評や研究がつみかさねられ」ていったが、「それはあたかも火に薪をくべるようなものだった」という。そして「書誌など研究上の基本文献も整備されて」いき、「90 年代後半から 2000 年代前半にナボコフ研究は黄金時代を迎えることに」なった。しかし、こうした

流れは「ナボコフ家側のシナリオにそったもの」(279 頁)でもあり、1991 年のヴェラの死以降は息子のドミトリイが跡を引き継いで、父の遺産を切り売りしていく。

だが、ナボコフの遺産が「まさに断簡零墨にいたるまで掘りつくされ、出版されつつある」(301 頁)現状に著者は懐疑的な姿勢を崩さない。「2009 年に鳴り物いりで公刊された『ローラのオリジナル』」は、「読者の期待を裏切り、小説的な魅力に乏しかった」(298 頁)し、「『ローラ』や「ナターシャ」、『『賜物』第二部』といった作品は、ナボコフが生きていれば明らかに出版を許可しなかったであろう類の作品だった」。「質の担保よりも、出版すること自体が目的化し、優先されるようになった」(301 頁)現状を筆者は憂いている。「おわりに」にあるように、「『ロリータ』が残っても、ほかの作品は批評もあつめず、読まれなくなることは十分考えられる」(323 頁)が、それでも筆者のナボコフにかける思いは変わらないのだろう。皮肉をこめた叙述のなかに愛情もこめた本書の読後感はどこかすがすがしい。

紙面の関係で書き残したことも多いが、「塗りがえられた自画像」に興味を持たれた方は、新しい情報と考察を満載した本書をぜひ一読していただきたい。最後に誤記を一つだけ記すと、ナボコフの父の名前はドミトリイではなくウラジーミルだから、息子の名前ドミトリイはむしろナボコフの祖父の名につながるものだろう(285 頁参照)。

(いさはや ゆういち)

小澤裕之著

『理知のむこう ダニイル・ハルムスの手法と詩学』

未知谷, 2019 年, 366 頁

武 田 昭 文

本書は、20 世紀前半のロシアの詩人・小説家ダニイル・ハルムス（1905－1942）を主題として書かれた、日本では最初の研究書である。

ハルムスはしばしば、最後のロシア・アヴァンギャルドとも、不条理文学の先駆者とも呼ばれて、それは一応もっともに聞こえるのだが、そうした言葉から連想される取っつきにくさがなく、児童文学の作品をはじめとして、ロシアの幅広い読者層に親しまれているという点で、ユニークな作家である。

実際、ハルムスはロシアの人気作家だ。それは一過性のブームというものではない。ペレストロイカ期に復権を果たして以来、ハルムスの著書は途切れなく刊行され、毎年のように新しい児童文学の絵本が現れ、また書籍媒体以外にも、映画、アニメーション、音楽、演劇、バレエ、オペラといった実にさまざまな分野で、彼の作品にインスピレーションを受けた芸術活動が繰り返されている。ひょっとしたら、ハルムスは今ロシアでもっとも読まれている「生きた古典」かもしれない。

アヴァンギャルドなのに読みやすく、人気があるという点については、あまりこだわらないことにしよう。マヤコフスキイの詩の多くも、読みやすくて人気のあるものだった。しかし翻って、ハルムスは本当にロシア・アヴァンギャルドの詩人といえるのだろうか？ ロシア未来派を中心とするアヴァンギャルドたちの活動が、革命期の高揚を帯して、ユートピア志向に裏うちされていたのに比べ、ハルムスの作品は、逆に、世界観の喪失やミニマリズムによって際立つ対照的な特徴をもっている。また世代の問題もばかにならない。1905 年生まれのハルム

スと未来派の主要メンバーとでは、およそ 20 年の年齢の開きがある。たった数年のうちにいくつもの芸術流派がめまぐるしく交替したこの時代の状況を考えると、ハルムス（と彼がかかわった「オペリウ」）についても、アヴァンギャルドから派生した別の一派とみなしたほうがよいのではないか？

こうした疑問にたいして、本書の著者は、「いや、ハルムスはまさしくロシア・アヴァンギャルドの詩人だ」と答える。なるほど、今ハルムスでもっとも読まれている後期作品だけを取ってみると、ロシア未来派とは非常に違ったものに見えるかもしれない。が、前期・中期の作品を丹念に読んでゆくと、そうした後期作品が、彼が「あくまでロシア未来派の詩学を独自の手法で達成しようとした」（15－16 頁）結果、生み出されたものであることがわかるのだと。

実は、このようにロシア・アヴァンギャルドとハルムスの詩学に連続性を見いだす著者の主張は、従来の定説に真っ向から反論するものである。というのは、これまでのハルムス研究では、初期から後期への作風の変化は、「1930 年前後に彼の詩学は行きづまり、その破綻を映すようにして、彼の創作は不条理性を色濃く帯びはじめた」（3 頁）と考えられて、むしろ両者の間の断絶のほうが強調されてきたからだ。

それにたいし、著者は、上記の定説において世界の不条理文学の文脈に「先駆者」として接木されたハルムスを、もう一度ロシア・アヴァンギャルドの文脈に置きなおし、その「後継者」としての意味を問うことで、詩人としてのハルムスの全体像を浮かびあがらせようとする。そこで著者が、アヴァンギャルドとハルムスを結びつける最重要の契機として取り出すのが、ロシア未来派の発明した「ザーウミ」（理知を超えた言語／概念）である。そしてこのザーウミという手法でありまた概念であるものを、ハルムスの作品を読み解くための分析用語として徹底的に鍛えあげ、まさに「ザーウミの光学」の下に、ハルムスの詩学に鮮やかな照明をあてたところに本書の眼目がある。

著者によれば、ザーウミに体现された『『理知を超える』という志向性こそ、ロシア未来派全体を貫く通奏低音である。』（39 頁）そしてハルムスは、未来派なき後、このザーウミの基本理念の実現を一貫して追求し続けた詩人だと位置づけられるのだ。

このようにザーウミをアヴァンギャルドの精神として把握したうえで、著者は、分析用語としてのザーウミを次のように定義する。「本書で「ザーウミ」というとき、それは第一に新造語としてのザーウミであり（手法としてのザーウミ）、第二に理知を超えているもの・こと […] 全般を指すザーウミである（概念としてのザーウミ）。その概念としてのザーウミのひとつとして、ザーウミ的な地平（目的としてのザーウミ）がある。」（40-41 頁）

続いて、手法としてのザーウミが、さらに「音のザーウミ」（新造語）と「意味のザーウミ」（新造語を用いずに既存の単語だけを非慣習的に組み合わせたもの）に峻別されるが、後者の「意味のザーウミ」というカテゴリーを新たに設けて、確かな分析用語として確立したことに、本書のすぐれたオリジナリティーがある。この視点が加わることによって、初期の「音のザーウミ」の詩人としてのハルムスが、次第に「意味のザーウミ」に手法の軸足を移し、その延長線上に後期の「日常語によるザーウミ」の小説家が誕生するという、本書のくっきりしたストーリーが可能になった。

このように本書の問題設定はきわめて明快である。あとは、著者の提起する魅力的なストーリーがハルムス自身の作品からどう立ち上がってくるかだ。ハルムスの詩学を、ザーウミという手法／概念の一貫した独自の発展として証明することを目的とした本書のアプローチは、おのずと彼の作品を時系列に沿って読んでゆく作品論を中心としたものになる。以下に、章をおって本書の構成を見ていこう。

本書は序章と5つの章と結論からなり、第1章から第3章にかけ、ハルムスの初期と中期のテキストがザーウミの詩学に支えられていることを明らかにし、第4章と第5章においては、後期のテキストもまた同一の志向のもとで書かれたものであることを論証する。

第1章「変貌するザーウミ」は、我が国ではこれまでほとんど紹介されてこなかった、オベリウ以前のハルムスの詩作を分析し、その目立った特徴が音のザーウミから意味のザーウミへと早くも移り変わってゆく様子を記述する。この章では、オベリウ以前に「ザーウミ派結社 DSO」を主催していた詩人トゥファーノフとハルムスの関係や、後に同結社から分離独立したオベリウの中でザーウミに

たいするさまざまな意見の相違があったことなど、興味深い事実が語られているが、評者が特に改めて発見する思いをしたのは、ハルムスが「音」の詩人として出発したという事実の重要性である。詩人の絶対音感などというものが（比喩にしても）あるかどうか知らないが、評者は、ハルムスが並はずれた音感／音とリズムをもった詩人で、そのことが今のロシアにおける彼の人気や児童文学における成功とつながっているとずっと考えていたからだ。著者の紹介するハルムス本人の朗読のエピソード——「その際立った声調はいかなる意味上の問題をも後景に押しやってしまうほどだった」（79頁）を読んで、評者はまさに我が意を得たりと思った。本書の読者は、ハルムスのいかに奇天烈なナンセンスも非合理的な散文も、そうした「意味上の問題を後景に押しやってしまう」ような魔術的な音とリズムでもって書かれていることを忘れてはならない。

第2章「音のザーウミへの鎮魂歌」は、ハルムスの戯曲『エリザヴェータ・バーム』（1927）を取り上げ、このザーウミと言葉遊びをふんだんに用いた作品がしかし、実は狭義のザーウミ（音のザーウミ）との決別を主題としていることを論証したスリリングな論考である。著者はまず、この戯曲にたいする「不当逮捕の恐怖をモチーフとした20世紀世界文学の先駆的な不条理演劇」という通説を果敢に退け、あくまで当時のロシア文学／文化の状況の中に置いて考察することで、この戯曲に隠された別の文脈と、肝心なことは、ハルムスの詩学における意味を明らかにしようとする。そうして着目されるのが、①レノーレ譚、②クルチョーヌィフの詩と詩論、③フレーブニコフの『ザンゲジ』、④鐘の音、⑤画家エリザヴェータ・ビョームの5つの題材である。ここでその各論を紹介することはできないが、著者が再現を試みた通説における不条理文学の議論とは「別の文脈」——すなわち、重層的なロシア文化テクストとしての『エリザヴェータ・バーム』の魅力は、緻密な分析と比較をととして十分な説得力をもって明らかにされている。本章において見事に達成された作品論の方法は、今後のハルムス研究が進むべき方向性を示しているだろう。

では、「ハルムスの詩学における意味」のほうはどうか？ ここでは、ハルムスが強い影響を受けたロシア未来派の詩人クルチョーヌィフのザーウミ語（「カーボランダム」）が、この戯曲で、まさに殺人の道具として用いられている

ことを指摘した論証が白眉である。評者は、クルチョーヌィフとハルムスに個人的な接触がなかったことを返すがえす残念に思うものだが、敬愛する詩人の言葉を、作中のザーウミ詩人を殺す道具として使うという引用行為そのものに、ハルムスにおける「クルチョーヌィフとの対話」の極点を見るようで、物凄いような興味をおぼえる。さらにもう一ついうと、ハルムスが21か22歳のすでにこの時点で、物語をアンビヴァレントに——つまり筋の解決においてザーウミに表現／提示する方法として戯曲形式を選んでいることが興味深い。ハルムスは、音とリズムにおいてそうであったように、また並はずれた形式感覚をもつ詩人だった。彼は以後も、戯曲ないし劇形式を用いて、そのアンビヴァレントでザーウミな物語（非-物語、反-物語）を書いてゆくだろう。

第3章「ファウストの軌跡」は、ハルムスがいよいよ独自の詩学の構築に真正面から取り組むようになる過渡期を扱う。試行錯誤にみちて代表作と呼べる作品のない（それゆえ研究者によって破綻や断裂を読みとられてきた）この時期の創作と向き合うために、著者は新たにモチーフ研究の方法を導入する。その分析の中心となるのが、劇詩『報復』（1930）と『フニユ』（1931）である。著者は、この二つのテキストの筋の導線——『報復』では、主人公ファウストの他の登場人物との関わり方の変化（争い→対話→和解）、『フニユ』では、ヒロインの物理的移動（自然から文明社会へ）に着目し、そこで「天と地」「星と木」「水と火」といった二項対立が解消されていることを丁寧に読み解いた上で、次のように述べる。「『報復』の登場人物ファウストの「地」の作家たちにたいする態度の軟化は、興味深いことに、ハルムスが音のザーウミから日常語を用いた意味のザーウミへの手法の比重を高めていったことに対応している。また、『フニユ』というタイトルと同名のヒロインの、動植物豊かな自然界から散文的な都会への移動は、彼の日常語への傾斜を一層鮮明にあらわしている。」（212頁）

この結論へといたるモチーフ分析の過程で、著者はとても大きな問題を取り出している。というのは、ハルムスの詩学の文脈において上記のような二項対立の解消は、ザーウミと日常語の対立が解消され、同一平面上で捉え直されることを示唆するからだ。超意味と意味は地続きで、もはやザーウミに特別な存在理由がなくなるのである。ふつうに見れば、これは確かに手法としてのザーウミの行き

止まりのようにみえる。(この時期の彼の創作に破綻を見る研究者にも相応の根拠はあるのだ。)しかし、ここでザウミを手法としてだけでなく概念として、さらには創作の理念「目的としてのザウミ」として定義した本書の問題設定が生きてくる。著者の見方に徹すれば、手法としてのザウミは消えても、理念(「理知を超えること」としてのザウミは残る。つまり後期作品への飛躍は、従来指摘されていたような断裂ではなく、まさに音や意味のザウミから日常語によるザウミの実現への突破として捉えられるのである。

第4章「分散と結合」は、後期ハルムスの散文作品で代表作の『出来事』(1933-1939)を取り上げ、この超短篇アンソロジーにおける断片性と統合性という二面性に着目しながら、そこで彼が音のザウミや意味のザウミにかかわって新たに考案した「出来事」という独自の概念／手法を追跡する。著者によれば、「出来事」とは、「物語化される前の——理知に侵される前の剥きだしの事実」である。著者は、ハルムスの散文におけるそうした「出来事」を現出させる方法として、①物語の拒絶と②「超-物語」という二つの契機を見いだす。(評者にはハルムス研究で「超-物語」という用語に出くわすのははじめてで、これも著者の独創的な視点であるように思われる。)

①物語の拒絶に関しては想定内である。「あるときは事件が他の事件へと発展しうる線を断ち(「出会い」)、あるときは指示するもの(言葉)と指示されるもの(事物)の関係をほどき(「青いノート No.10」)、あるときは原因と結果の関係をずらす(「最近、店で売られているもの」)(240頁)といった、ハルムスの小説の「非-物語」ないし「反-物語」的な特徴は、我々にもすでにお馴染みのものだ。

それにたいして、そうした「出来事」の背後にある秩序の可能性について、「世界を通常意味づけている因果法則や論理とは別個の秩序」(248頁)について説きおよんだ、②ハルムスの「超-物語」論は本章の見所である。ここで著者は、『出来事』に似た単発の事件の集合という内容をもちながら、それらの出来事が奇妙な因果関係で結ばれている点で違いがある『関係』(1937)というテキストに注目し、後者における「理知では把握できないが存在する真実」というモチーフが、前者の隠された構成原理になっている可能性について、新たに「超

「超-物語」という概念を導入して実に刺激的な議論を展開している。

評者なりに理解すれば、これは、ハルムスが『出来事』において、「事件の当事者には見えない因果の鎖につながれた出来事の集合」としてあるかもしれないこの世界のモデルを表現／提示したということであり、ハルムスがこういう形で神秘的な世界観をもっていたと知れたことは、（通説に囚われて詩人の世界観の喪失にばかり目が行っていた）評者には新鮮な驚きであった。

このように、後期ハルムスの散文作品では、新たに理知を超えた「秩序」や、断片を独自に組み合わせる「結合」といった詩学の課題が浮上してくる。そのことの理由について、著者が結論的に述べた文章を引用しよう。「ハルムスが散文という形式にこだわったのは、以前よりも強固に「結合」あるいは「超-物語」を希求したからではないか。音のザーウミや意味のザーウミを用いたテキストでは、結局のところ、無意味として認識されるにすぎない。「理知の限界」までしか行くことができない。しかし彼が望んでいたのは、理知とは相容れないとはいえ無意味ではない世界、「理知の限界」の先、理知のむこうへと跳躍することである。[…] それには、詩よりも確かな論理性を要求され、意味化作用の強く働く散文のほうが適しているだろう。だからこそハルムスは、言葉の意味の衝突によってばらばらに砕け、分散していた「出来事」を、「出来事」の性質をとどめたまま結合させ、「超-物語」を仮構しようとしたのではないだろうか。」（252頁）

第5章「ハルムスは間違える」は、「出来事」という概念／手法をさらに推し進めたハルムスの詩学の到達点である「妨害」という概念／手法が、後期散文作品のもう一つの代表作『老婆』（1939）における実現をとおして明らかにされる。著者はまず、この「妨害」という概念の形成をハルムスの哲学と思想から跡付け、続いてその実践的応用の手法を作品の中に見いだしてゆく。（ちなみにこれは前章と共通する分析手続きである。）

ハルムスはこの概念を、友人の哲学者ドゥルースキンの「小さな過ち」という用語から着想した。ドゥルースキンによれば、矛盾のない哲学体系はトートロジーに墮すため、そこには理性や論理を超えた「小さな過ち」が内在していなければならない。このドゥルースキンの発見は、死すべき人間の生の哲学的意味づ

けという実存的課題に密接にかかわっていた。彼はまたこうも述べている——「現実とは […] 合理的でも非合理的でもなく、脱合理的なものである。」(263 頁) ハルムスは、こうしたドゥルースキンの思想を共感的に受けとめて、「小さい過ち」を反復の同一性に亀裂を入れる誤差として捉えなおし、新たに「妨害」という概念を考案して、「これ」と「妨害」と「あれ」からなる「存在の三位一体」の考察をはじめめる。その考察を言語的に応用すれば、それは言葉と対象の指示関係の破壊へと通じてゆくだろう。

続く『老婆』の作品論は、量的にはさほどないが内容充実したものである。著者はこの「言葉と物が正しく対応していない」あらすじを紹介するのがきわめて難しい小説を、その不对応の変化(言葉よりも対象のほうに力点の置かれる関係性から、対象よりも言葉のほうに力点が置かれる関係性へ)を画するエピソードや、物語の展開に貢献しない断片としてのモチーフの在り方、同じ対象について述べた矛盾する描写などにポイントを絞って紹介することで、そこに実現された方法的な「叙述の混乱」を何だか面白そうな読みものとして読者に提示することに成功している。

このように著者は『老婆』の作品論の前半で、テキスト内部における言葉と対象の不整合性を検分してから、後半ではさらに、テキスト内部に書かれている言葉とテキスト外部にある書き手の思想との不整合性にまで論を進めてゆく。このように、あくまでハルムスの思想と作品を拠りどころとして、一つの作品を内在的に論じつくしたうえで外部からの視点を導入し、自らの構築した作品論を創造的に「内破」してゆく方法は、前章の「超-物語」という概念の導入でも見られたもので、まさに著者の作品論の面目躍如とした徹底性をつたえるものである。そうして取り上げられるのが「不死」と「奇蹟」の問題だが、読者はこの部分で——ハルムスが自らの哲学と思想においては信奉した「不死」と「奇蹟」を、この『老婆』という作品においては、いかに見事に転倒し(「いまいましいもの」として表現し)、テキストの内部と外部の関係にも不整合性を実現させているかを讀んで、きっと敬虔な畏れにも似た感慨をおぼえるだろう。ハルムスという作家はなんと頭がよく、方法論的に作品を作りこんで書いているのだろうか。

本章の「おわりに」から、著者が、ハルムスの詩学における「妨害」という

概念／手法のザーウミとしての意味について述べた文章を引用しよう。「[妨害]は […] 安定的な関係を分断することではじめて時間・空間・世界を出現させる、あらゆる存在に欠かせない要素である。同時に、それ自体は「いま・ここ」として措定され、把握することのできない、理知を超えたものでもある。このような「妨害」の性質は、まさしく手法／概念としてザーウミの性質に合致する。 […] 現実とは別個にある理知を超えた世界を求めるのではなく、「いま・ここ」こそが「妨害」＝理知を超えたものだという思想のもとに、彼はザーウミを日常（語）の基幹に見出したのだ。これこそがハルムスの詩学の到達点である。」（302－303 頁）

こうして著者の約束した、初期の「音のザーウミ」の詩人としてのハルムスが、次第に「意味のザーウミ」に手法の軸足を移し、その延長線上に後期の「日常語によるザーウミ」の小説家が誕生するというストーリーの証明は見事に果たされる。本書に収められた作品論の充実ぶりがそのことを物語っている。著者が、従来のハルムス研究の定説に抗して、世界文学における不条理文学の先駆者でもなく、またスターリン時代のソ連の不合理性を暴いた反逆者ないし諷刺作家でもなく、ロシア未来派の伝統を引き継いだ詩人・小説家として描き出したハルムス像は、評者には、定説におけるよりも遥かに「真実に近く」、それゆえずっと面白い物語として読むことができた。

それは、「言葉の復活」（シクロフスキイ）からは想像もできなかったような軌跡を描いているが、本書の中で、フレーブニコフや、特にクルチョーヌィフのザーウミの詩学が適切に紹介されているため、驚くべき展開であるが十分にあり得る（そして「あった」）継続的發展として実証的に跡付けられている。著者は、「クルチョーヌィフがやりおおせられなかったこの作業（意味のザーウミの実験——評者）を引き継ぎ、進化させたのが、ハルムスである」（212 頁）と断言するが、このようにクルチョーヌィフに脚光を当てたことも、我が国のロシア・アヴァンギャルド研究にたいする大きな貢献である。本書をとおして著者は、クルチョーヌィフを復権し、ロシア・アヴァンギャルドの本当のはじまりと新しさを再認識させてくれたといえる。

それにしても、なぜ「老婆」なのか？——ここからはすこし搦め手で、もうハ

ルムスではなく、著者の小澤氏が実現した文学研究的方法的探究の魅力について語らせてもらおう。——本書は、老婆にはじまり老婆で終わる（「落ちて行く老婆たち」から『老婆』へ）。評者は老婆があまり好きでないが、ハルムスは題材としての老婆を偏愛した。老婆はハルムスのミューズである。このようなハルムスの「老婆」について、著者は本書の『老婆』論でひと言の前置きもしない。膨大な先行研究を読破した著者であれば、その気になれば「老婆」の表象解釈についてひとくさりウンチクを傾けることもできたはずである。しかし著者はそのような途をとらない。なぜなら、そうした余談は、ハルムスの詩学を究明する本書の目的からすればすべて二次的なものだからだ。「老婆」については論の中で（「愛らしいご婦人」と対比して）それが「不死」を体現していることをちゃんと書いている、それで十分だと。そしてこの著者の態度は正しい。

同様の潔癖な態度は、本書全体をとおして貫徹されている。著者の問題意識に立てば、従来のハルムス研究における定説でさえも、ハルムスの詩学の本質的解明には役に立たぬ余談である。評者は、ハルムスから不条理作家のレッテルをはがす著者の姿勢に賛同するものだが、抑圧的な体制を批判した諷刺作家という点については、ハルムスはまさにそういう（面をもつ）作家だったと思っている。彼の児童文学においても、そうした社会批判的な特徴が見いだせることは間違いのない事実だ。「無意味で脱論理的なのは彼の短篇ではなく、彼がそこに書いている生活のほうなのだ」（33 頁）と語ったドゥルースキンの言葉には、十分な重みがある。しかし、それでもなお、こうした外部との交通をいったん遮断して、ハルムスの詩学の形成と発展の内在的論理を追うことに集中した著者の判断は正しい。なぜなら、作家なら誰しもおぼえのあることだが、実生活からのモチーフは、それが創作行為の中でどのように錬金されて作品に実現されるかということが問題なのであって、その化学反応のような作品化の力学（つまり詩学）があってはじめて、そうしたモチーフの意味も明らかになるという順番のものであるからだ。研究的に言い換えれば、作家と作品の詩学が徹底的に考察されてはじめて、外部からのモチーフとの交通の意味も実のある議論としてできるようになるということである。（こうした順番を取り違えた、テキストと外部を「繋ぐ」ことばかりに熱心な自称文学研究がいかにも多いことか。）逆にいえば、本書の書

かれた今こそ、定説の再検討と意味づけが可能になったと言ってもよい。

著者は本研究において、あえて狭き門をくぐり、険しい道を行くことで、ハルムス研究の記念すべき道標をうち立てた。先行研究に依りかからず、二次的な「雑音」を遮断して、自分のハルムスを自分の言葉で考え抜いて彫琢した、本書の真にテキスト内在論的な「閉じた研究」は、まさにその「閉じ」たことの純度によって、表現詩学の普遍的な地平へと「開かれ」ている。なぜなら、ハルムスにおいて「理知を超えたもの」として捉えられた創作の理念と目的は、たとえザーウミという言葉を知らなくても、あらゆる芸術家が本当はわかっている芸術の究極目標を言いあてているからだ。きっと言われてみればわかる。文学においても本物の詩人と作家は常に、言葉で表現できないものにむかって言葉を紡いでいるのである。

著者は「まえがき」で、本書を「ロシア文学の専門家以外にも開かれた本にしたい」と書いているが、評者はそれに、「特に、さまざまな芸術分野の表現者たちに読んでほしい」と付け加えたい。ひとりの並はずれた言語感覚をもつ方法意識の強い詩人が、「理知を超えること」をめざして展開した詩学の、意外性あふれる、しかし一貫した歩みを粘り強く跡付けた本書は、同様の問題意識を心のどこかにもっている現代の芸術家や詩人・作家たちにきっと届くはずだ。評者はもちろん、本書が数多くの読者に読まれることを願う。が、同時に、それが真にハッピー・フューのための本として読まれることを願い、また信じてやまない。

(たけだ あきふみ)

巽由樹子著

『ツァーリと大衆 近代ロシアの読書の社会史』

東京大学出版会，2019 年，iv + 196 + 28 頁

貝 澤 哉

読書史や読者研究の分野では，もともとロシアは世界的に見ても，それなりの歴史と蓄積を誇っていたと言ってよい。1860 年代の大改革期以後の各地における教育普及活動の高まりや，ナロードニキ運動とともに広まった農村への読書浸透の啓蒙的な努力のなか，すでに 1880-90 年代には，フリスチナ・アルチュフスカヤやアレクサンドル・ブルガーヴィン，ニコライ・ルバーキン，ニコライ・コルフ，セミョーン・アン＝スキイ（S. ラポボルト）などが，さまざまな形で下層民衆読者にかんする資料収集に着手し，その調査研究の成果を公表しはじめていたのである。

ソヴィエト時代には，帝政期の読書史にまつわるこうした研究の継承は，1960-70 年代のボリス・バンクやヨシフ・バレンバウムらの労作を待たなければならなかったが，ソ連末期，1980-90 年代になると，アブラム・レイトブラトによる帝政期の大衆的読書についての意欲的な研究が現れるとともに，隣接する書物史・出版史の領域でも，かつてソ連ではブルジョワ資本家・反動的出版業者と目されて必ずしも評価の高くなかった帝政後期の著名な大規模出版業者アレクセイ・スヴォーリン，アドルフ・マルクス，イワン・スイチンにかんするモノグラフがエフィム・ディネルシテインにより次々と刊行され，この分野でも時代の潮目が確実に変化しつつあることをまざまざと感じさせられたものだった。

しかし忘れてはならないが，当時この分野をリードし，これまでにない新機軸を打ち出していたのは，じつは英語圏を中心とした欧米の歴史研究であった。とりわけジェフリー・ブルックスの『ロシアはいつ読むことを学んだのか』（1985）

は、ロシア・ソ連の読書研究では一貫して無視されてきたいわゆる「ルボーク本」を帝政期ロシアの大衆の読書の重要なジャンルとして真正面から大きくとりあげ、その原典テキストを広範かつ詳細に検討して、ロシア読書史の既成概念を覆した画期的な成果だったし、90年代にはルイーゼ・マクレイノルズによる、やはりロシアのジャーナリズム史研究では黙殺され続けてきた帝政期の大衆的タブロイド紙にかんする事実上初めてのモノグラフや、出版業者スイチンのまさに資本主義的企業家としての側面に光を当てたチャールズ・ルードの著作、帝政ロシアとポーランド王国の出版資本主義にかんするベス・ホルムグレンの研究書など、これまでのロシア本国における研究の盲点を突くような仕事が少なからず出現している。

英語圏のこうしたロシア読書史研究に共通しているのが、帝政期の19世紀後半における読書や出版産業のあり方を、欧米の社会史に見られるような資本主義的な大衆化や、自由で主体的な市民的中間層が形成されるプロセスとして捉え直そうとする観点であることは容易に推察できよう。事実、1990年代以降の英語圏のロシア史研究全体を見渡しても、エディス・クロウス他編『ツァーリと民衆の間』(1991)やハーリー・バルザー編『ロシアの見失われた中間層』(1996)から、ジョーゼフ・ブラッドリー『帝政ロシアにおける自発的結社』(2009)にいたるまで、19世紀後半のロシア社会における資本主義的で自由かつ主体的な市民的中間層の形成の問題は、最もアクチュアルなテーマのひとつでありつづけているのである。

『ニーヴァ』に代表される19世紀後半のいわゆる「絵入り雑誌」の出版史・読書史を専門とする巽由樹子が、著書『ツァーリと大衆 近代ロシアの読書の社会史』で描き出そうとしているのもまた、この「絵入り雑誌」というメディアを通して見えてくる、新たに形成されつつあった19世紀後半の中間層の具体的な姿である。周知のようにロシアでは、1870年代以降、それまで主要な雑誌メディアとして君臨していた月刊総合誌、いわゆる「厚い雑誌」に代わって、『ニーヴァ』のような薄手の週刊絵入り雑誌が急速に部数を拡大してゆくのだが、こうした絵入り雑誌は、もともと19世紀前半のイギリス、フランス、ドイツなど西欧の市民社会に誕生し、まさに都市中間層をターゲットとして発達したメディア

にほかならない。そこで巽は問う——「一九世紀後半のロシアにもたしかに絵入り雑誌というメディアが存在し、西欧社会に匹敵する規模で広まったのである。一体、誰がこれを読んでいたのだろうか。ロシアには、本当に中間的な階層が存在しなかったのか」と。

こうして巽は、前述のバルザーやクロウス、ブラッドリーなどにも依拠しながら、「専制—インテリゲンツィヤ—民衆^{ナロード}」という紋切型の図式のなかに 19 世紀ロシアの社会構造を無理やり押し込めてしまうような伝統的歴史理解の粗雑な枠組みでは「見失われ」てしまう、市民的中間層が息づいていた確かな痕跡を、大衆的な絵入り雑誌を素材に炙り出そうとするわけだが、そのさいとりわけ重要な方法論上の拠り所となったのが、マクレイノルズの大衆文化史研究に見られる独自のアプローチだった。

たとえば『〈遊ぶ〉ロシア』のなかでマクレイノルズは、ロシアの中間層は政治的な自己実現には失敗したものの、大衆的な娯楽や余暇の過ごし方といった彼らの「個人的嗜好」に着目すれば、むしろそれまでのロシアにはなかった、商業的原則に依拠した彼ら独自の文化的特質を鮮明に浮かびあがらせることができると主張する。巽によれば大衆文化をそうした新しい視点から捉えることで、「マクレイノルズはロシアの中間階層を政治的側面より論じることから離れ、都市の商業的な文化に生きた大衆として分析する可能性を示した」のであり、またこのように「西欧と同様、消費者として個人意識を持つようになった」中間層は、「固有の意味、規範、価値観の体系を形づく」る能動的・意識的な「主体」として「社会を動かし、歴史を展開させる動因」となりうるという。だとすれば当然ながら、1870 年代以降に普及した絵入り雑誌という大衆文化もまた、「都市の大衆に受容され、新たな価値規範を広めて社会的、政治的転換を準備したメディアだった」はずであり、したがって「絵入り雑誌がどのような新しい主体と文化を生み出し、それが旧来の秩序にいかに関与を与えたか」の解明が、本書の重要な課題として浮かびあがってくるわけである。

こうした問いに具体的に答えるため、異なる複数の切り口を用意することで、巽はロシアの絵入り雑誌の歴史的な独自性を多角的かつ立体的に浮き彫りにしようと努めている。たとえば 1870 年代のロシアに登場した『ニーヴァ』に代表さ

れる絵入り雑誌は、単にそのメディア自体が西欧起源のイラスト誌の模倣であったというだけにとどまらない。注目すべきなのは、ポメラニア出身のドイツ人で『ニーヴァ』の版元だった出版業者アドルフ・マルクスに典型的に見られるように、絵入り雑誌メディアの主要な担い手となったのが、じつは大改革期以後、ポーランドやドイツから移住してきた外国人企業家だった事実である。彼らはロシアの出版事業に、大衆的娯楽の提供による利潤の追求という西欧市民社会的な原理を初めて公然と導入したのであり、絵入り雑誌は、そのメディア史的な起源のみならず、実際の担い手たちの資本主義的なエートスにおいても、西欧的な市民社会やその中核をなす中間層と強い親和性を持っていたことになる。

また、帝政末期における各地の公共図書館報告書に記載された利用者データや読者の回想を丹念に追いながら、巽はこの時代の読者構成の変化や、そうした新興読者層の嗜好の特色にも私たちの注意を促す。19世紀末、ロシア各地の図書館員たちは、知識人向けの真面目な「良書」ではなく、もっぱら「休息と娯楽」のための軽い読み物だけを求める新しい読者層の出現を記録していたという。そうした傾向は「リョーフコエ・チチエーニエ軽い読書」と呼ばれインテリの司書たちに蔑まれていたものの、そんな図書館も増加する読者の需要には抗えず、やがて知識人向けの真面目な「トールストイ・ジュルナル厚い雑誌」と並んで、軽い読み物である絵入り雑誌を配架せざるをえなくなる。言うまでもなくここに見出されるのは、啓蒙的な「知識人」vs. 無知蒙昧な「民衆」という近代ロシア史の二元的な紋切型には収まりきらない、第三のタイプの読者層の出現であろう。このことを実証するように、大改革期以後の公共図書館の利用者データからも、新興の企業家や専門職など市民的中間層の占める割合が急速に拡大しているのを確認することができるのだと巽は指摘するのである。

さらに巽は、伝統的に近代ロシア史を動かす社会的主体と目されてきた「インテリゲンツィヤ」「ナロード民衆」「専制」の各勢力が、絵入り雑誌とその新しい読者層の出現によってどのような変質を被ることになったのかを具体的に検証すべく、それぞれの代表的人物をとりあげてのケーススタディも試みている。たとえば、ベリンスキイの薫陶を受けて「トールストイ・ジュルナル厚い雑誌」を舞台に活躍し、芸術批評で一家を成した世襲貴族出身の「インテリゲンツィヤ」、ヴラジーミル・スターツ

フのケースでは、軽いジャーナリスティックな読み物への嫌悪を隠そうともしなかったこの芸術批評家はしかし、20世紀初頭には結局、大衆の絵入り雑誌『ニーヴァ』の付録に寄稿せざるをえなくなる。巽によれば、そうした事例が示すのは、知識人が「出版界の新しい構造」への「適応」を余儀なくされ、また同時に評論というジャンルそのものも、「ガイドと広告を兼ね」たより手軽な読み物へと変質を遂げてゆくという事態にほかならない。

一方、農民つまり「ナロード」出身ながら、絵入り科学雑誌『自然と人間』を創刊したことでソ連時代にも民主的啓蒙家として高く評価された出版企業家ピョートル・ソイキンの場合はどうだったのだろうか。巽の見立てでは、そもそもソイキンの絵入り科学雑誌の眼目は、実証的な科学性などよりも、むしろ挿絵によって読者を楽しませる過度な娯楽性にこそあって、「科学」や「啓蒙」の口実のもと、見世物よろしく購読者を集めようとする疑似科学^{ポピュラーサイエンス}と考える方がはるかにその実情にふさわしい。しかもこの出版企業家は、絵入り科学雑誌を刊行するかたわらで、一見、啓蒙的・科学的なものとはとても相容れないようにも思える絵入り宗教雑誌『ロシアの巡礼者』も同時に手掛けていたのであり、そうしたメディアを通じて、知識人の科学的立場からは迷妄と見なされてきたはずの、^{ナロード}民衆の生活文化に根差した信仰心をむしろ奨励してさえいたという。このように絵入り雑誌は大衆的読者の嗜好やニーズに敏感なメディアだったわけで、そこでは民衆はたんに啓蒙されるだけの受け身の存在であることをやめ、「消費者として読者大衆の一翼を構成し」、「近代的なメディア構造の中で発信と受信の主体となった」のだと巽は結論づけている。

最後に巽がとりあげるのが、「専制」つまり皇帝その人の表象にかかわるケースである。絵入り雑誌では、皇帝や皇族の肖像は、著名な作家や有名女優のプロマイドと選ぶところのない体裁で扱われたし、ロマノフ家御用達の商品の広告には双頭の鷲の紋章が溢れた。またアレクサンドル二世暗殺事件の記事では負傷した皇帝の身体がなまなましく描写され、逆にアレクサンドル三世御召列車転覆事故に際しては、皇帝一族が無傷だったせいで大破した列車の写真自体が守りとして商品化されて、広告欄に殺虫剤の宣伝と並んで掲載されるなど、皇帝の表象は絵入り雑誌のなかでその聖性を喪失し、世俗的で市民的な好奇心の対象へと変

質していったのである。これにたいして、最後の皇帝ニコライ二世はみずからの戴冠式のアルバムを復古趣味的なロシア様式で装飾させることで、自分が聖なるルーシの伝統的な継承者であることを表象的に印象づけようとしたものの、営利を優先する民間の出版企業は、皇帝側の意図にかかわりなく、戴冠式の報道の素材や演出法を自由に選んでいた。つまり「ツァーリの肖像をどのように演出するかを選択する主体は、出版メディアだった」わけである。

このように本書は、大衆的な商業的絵入り雑誌の読書史をプリズムとすることによって、これまで政治史的なマクロの視点では一元的に捉えることが困難だった帝政末期における市民的中間層の形成という歴史的变化を、人々の生活のごく些細で日常的な側面、とりわけ大衆的な娯楽への嗜好や、私的な消費や営利を追い求める市民的で世俗的な心性の、一見微細ではあるが着実な浸透のプロセスとして描き出すことに成功していると言えるだろう。評者自身もこれまで何度か論じてきたことだが、正統的な文学史研究の領域でもこうした変化は長らく見過ごされ、1880年代を挟んだその前後の時期はむしろ、創作活動が全般に低調となった「沈滞の時代」などと呼ばれてきた。しかしながら、この時期に新しいタイプの読者層が形成され、既存のメディアが絵入り雑誌のような新興メディアへと急速に交代していったことを考慮するなら、この時代はむしろ、メディアと受け手の大変動にともなう古い文学の退場と新しい文学の出現を準備した、文学史的にもきわめて重要な時期と捉えなければならないことになる。そのように理解してはじめて、1890-1900年代における象徴派や1910年代における未来派などの出現を歴史的に正当に位置づけることが可能となるはずなのである。

もちろんこうした、帝政末期のロシア社会における市民的中間層の形成をどう捉えるかというロシア史研究固有の文脈における課題の重要性を十分理解したうえで、あえてそこから離れ、文学の社会史や文芸社会学の領域にこの問題をより引きつけて考えた場合には、本書で巽が提示する「啓蒙的知識人（ハイカルチャー）vs. 娯楽的市民・大衆（マスカルチャー）」や「受け身の民衆 vs. 主体化する大衆」、「（皇帝の）聖性 vs. （大衆的メディアの）世俗性」といった対立の構図は、ソ連史学などの伝統的見方との対比を強調するうえでは一般読者にも明快で分かりやすいものの、他方でやや図式的、硬直的に捉えられすぎていると感じ

られるところがないわけではない。

たとえばスターソフを論じた章で、国民楽派や移動展派などを支持し、国民芸術の創設を主張したこの批評家を、巽は典型的な知識人＝ハイカルチャーの主導者と見なし、スヴォーリンの『新時代』やマルクスの『ニーヴァ』などの市民的な大衆メディアにとって過度に対立的なものとして理解しているようだが、彼らの違いは、むしろその大衆化の程度の違いにすぎないのではないだろうか。

そもそも歴史的には、いわゆる「国民文学」「国民文化」「国民芸術」等は、西欧、とりわけドイツ語圏でナポレオン戦争後のナショナリズムの高揚のなか形成され、19世紀を通じて、この時代の社会の世俗化、つまりまさに市民社会の形成による一般民衆の「国民」化とともに世界中に普及した理念だった。実際ロシアでも、国民楽派の作曲家たちは国民的・民族的な音楽を目指したし、また移動展派はハイブローな官製美術を批判して、当時の絵画の主題としては低級と見なされた民衆の生活を描いただけでなく、その名の通りロシアの各地方を巡ることで新たな観衆を生み出そうとしたのである。

このように、19世紀の「国民芸術」や「国民文化」はもともと、市民社会的な芸術文化の大衆化を前提としている。ペーター・ビュルガーなども論じているように、市民社会の形成とともに教会や宮廷・貴族社会の聖性や権威の下支えという従属的機能から解放され、それ自体で独立した領域となった芸術は、そのことによってまさに市民的（＝国民的・大衆的）な共有物になるとともに、芸術的価値それ自体が自律的に「普遍的」で「神聖」なものと思なされるようになる。つまり近代の市民社会においては、大衆化することと芸術の聖化は必ずしも矛盾しない。実際、エリック・ホブズボームは、18世紀末から全ヨーロッパ的に高まりを見せてきたナショナリズムの波が、1880年代頃から、ロシアも含めて「伝統の大量生産」の時代に突入したと論じていて、国民的伝統はむしろ、「大量生産」（つまり大衆化）されることによって「伝統」としての権威を（むしろ大衆化され単純化・図式化された形でだが）維持し、高めてもゆくのである。

このように考えると、ロシアの絵入り雑誌が文化の大衆化に火をつけたことは、巽が論じているように、たんにハイカルチャーが娯楽や営利のみを事とする大衆文化に呑み込まれてしまう、という構図に本当に回収できるのか、評者には

いささか疑問に思える。むしろ絵入り雑誌は、その大衆的かつ営利的な仕方によって、かえって伝統的国民文化を自分なりに普及し、聖別・規範化していったと見るべきなのではないだろうか。本書では触れられていないが、その最もわかりやすくかつ重要な例は、マルクスの絵入り雑誌『ニーヴェ』が1890年代初頭から、レールモントフ、ゴーゴリ、チェーホフなどロシア文学の著名な作家や詩人の全集の版權をつぎつぎと買いあさり、予約購読者を増やすために無料の付録としてそうした全集を気前よく配布したことであり、このマルクス版全集や、それを模倣した他社の付録によってはじめて、ロシアの下層読者たちのあいだに古典作家の本が広範に普及したとすら言われている。

そしてまさにこうした古典文学の氾濫と教養の全面的な大衆化こそが、大衆の文学から差異化するために、たとえば象徴派のような、大衆には理解不能なほどハイブローで難解な文学への需要を新たに生み出す。事実N. K. ミハイロフスキイは、すでに1890年代に、フランス象徴派がフランス社会の全面的なブルジョワ化の産物にほかならないと見抜いていたのだった。この意味で、知識人の「文芸の共和国」は巽が言うように解体してしまったのではけっしてなく、文化資本をめぐるヘゲモニー争いによって、共和国の主導権がより大衆的で消費志向的な社会層へと移ることで、違う形に再編されただけなのである。

また、こうして見ると、ニコライ二世がロシアの伝統的様式なるものを利用して皇帝の聖性をヴィジュアルイメージとして流布しようとしたこと自体も、まさに複製技術を利用した「伝統の大量生産」、伝統の大衆化の身振りにほかならないことが分かるだろう。ここでもやはり、皇帝の聖性そのものが、大衆的で営利的なメディアの自由な主体性によって格下げされるわけではない。ニコライも絵入り雑誌とともに、大衆化された「聖性」のイメージを、自分たちに有利になるように操作しようとしていたものの、そこに多少巧拙の差があった、という方がより実態に近いようにも見えるのである。

さらに巽は、従来「インテリゲンツィヤ」と対置され、その啓蒙の対象となってきた無知蒙昧で物言わぬ受動的な「民衆」が、^{ナロード}娛樂的で営利的な市民的出版メディアの登場によって、おのれの嗜好や価値観をみずから実現しうる能動的で自由な歴史の主体＝市民的中間層つまり「大衆」に変貌する、とかなり楽観的に考

えているように見えるが、このような資本主義的市民社会の中間層たる大衆は、はたして本当の意味で自由な主体でありうるのだろうか。ミシェル・フーコーやジュディス・バトラーの生権力や主体化の理論からもあきらかなように、「主体」とは、それがどのようなものであれ、特定の外的で社会的な権力規範や支配関係をみずからの身体に内面化することで立ち上がってくるものである。本書の場合、絵入り雑誌の読者が、みずからの自由な嗜好や欲望をもとに主体的に行っていると考えている消費行動は、じつは資本主義的な社会的諸規範を内面化することで、あたかも主体的であるかのように欲望させられた結果にすぎないのかもしれない。

このように、近代における高級な文化から大衆化された娯楽的な文化への道はけっして単純な一方通行なのではない。大衆的文化は高級な文化の文化資本（聖性）を取り込むことで、その聖性そのものを商品化し娯楽的な消費の対象としてドライに切り売りすると同時に、みずからの大衆性や娯楽性には「国民文化」や「伝統」といったブランドを付与することで付加価値を高め、その聖性や高級感にあやかろうとする一見矛盾した共犯関係を密かに孕んでおり、またそうした消費の能動的主体と思われるものも、その能動性や自由自体が、あらかじめ特定の価値観や権力関係によって受動的に規定されているという矛盾のなかではじめて、消費する主体として立ち上がってくるのだということ——それは、ロシア史研究における市民的中間層形成の論争という問題をいったん離れて、文学や芸術をその生きた生産・流通・消費や、文化資本をめぐる利害集団間のヘゲモニー闘争のプロセスのなかで捉えようとする場合には、やはり念頭に置いておくべき事柄ではあろう。

むろん、歴史の主体がみずから自由にふるまっていようが、じつは自由だと錯覚しているだけであろうが、それにかかわりなく、そうした主体が歴史の展開の動因として働くことはありうるし、実際そうした事例は過去に幾度となく経験されてもきたはずである。1870年代のロシアに彗星のごとく現れた絵入り雑誌というメディアが、その莫大な部数や新しい読者層の形成においても、多様で豊かな挿絵や読み物、豪華な付録の数々においても、またロシア社会のその後のあり方に与えた影響の巨大さという点でも、歴史的に重要でユニークな現象であり、

読書史のみならず，文化史や社会史研究全般にとっての広大な宝の山として，いまだ知られざる多くの鉱脈がそこに眠っていることは疑う余地がない。そうした巨大な鉱脈をさぐる案内書として，本書の問題意識や方法的な視点の明確さ，ロシア史研究の最新の成果への行き届いた目配り，貴重な史料の発掘とその読解の手際の良さが，読者にとって有益なものとなることは間違いないだろう。

(かいざわ はじめ)

高橋沙奈美著

『ソヴィエト・ロシアの聖なる景観——社会主義体制下の宗教文化財、ツーリズム、ナショナリズム』

北海道大学出版会，2018 年，456 頁

中 澤 敦 夫

本書で扱われているのは、ロシア・ソビエトにおける「宗教文化財」の保護の問題である。ここで宗教文化財というのは、ロシア正教に関係する、教会・修道院などの聖堂建築物、壁画やイコン画のような聖像画、人々に崇拜され巡礼者をひきつけてきた奇跡のイコン、聖骸・聖遺物などの「聖物」を指している。さらに、それらが存在する聖なる「場」とその歴史的な景観（史跡）も広い意味での宗教文化財に含まれるだろう。日本語でもあまり使われない「宗教文化財」の用語は、ロシア語では религиозное наследие に相当するだろうが、ソビエト当局から見れば反宗教の建前に触れ、教会から見れば世俗的すぎるからだろう、ロシアでもあまり聞かない言い回しである。著者はこの不慣れな言葉を前面に出すことで、問題の所在を浮き出させようとしていると思われる。

言うまでもなく、ソビエトでは、政権の反宗教政策によって、宗教にかかわるものは大規模で組織的な弾圧をこうむった。ソビエト政権は、それまで宗教が占めていた位置に、自分たちの共産主義イデオロギーをそのまま据えようとしたため、宗教は根絶しなければならない正面の敵となった。とくに、帝政ロシアの主流宗教で、支配イデオロギーの一端を担っていたロシア正教会に対する弾圧は徹底しており、教会関係者や信徒は迫害され、聖堂・墓地などの関連施設は閉鎖や破壊をこうむり、教会財産は徴発、掠奪された。徹底的に破壊、収奪されたあとの施設は、他に転用されたり、放置され荒廃するがままにまかされてきた。

そのような、現在の市民感覚からすれば明らかな文化破壊の蛮行に対して、こ

れに抵抗する動きも存在した。ただ、弾圧・破壊が国家イデオロギーにもとづいていただけに、反宗教政策そのものを批判するわけにはいかなかった。それができる信者たちは力を失っていた。そのため、運動は学者や文化人が、個々の建築物、宗教美術品、史跡などのもつ価値を取り上げて、その保護を政策当局に対して訴えかけるかたちで始まった。かれらは、弾圧と破壊の論理には触れずに、目前の文化財破壊を押しとどめるための言説を捌め手から創り出していかなければならなかった。

宗教文化財保護の動きの担い手として、ソビエト各地の博物館・美術館の役割は大きかった。ソビエト政権は、聖堂そのものを博物館化したり、文化財として価値ある教会財産を博物館に移管するなどの政策を進めたため、博物館の当事者は否応なく管理・保護の現場に立ち会うことになった。各地の博物館の管理者や館員たちは、反宗教プロパガンダを担うおおよけの立場と宗教文化財の価値を守る使命感とのギャップを感じながら、それぞれの時代や現場で保護の活動に取り組んできた。

そのような保護運動は、時代の変化にともなう宗教や文化に対する政策の変化、さらにソビエト社会の変化をうけて、その担い手や運動の方法、文化財保護の言説も変化していった。とくに、フルシチョフ時代からペレストロイカ直前まで（「後期社会主義」）の時代には、文化財保護の世論を喚起して当局を動かしていく流れが生まれ、運動が大衆化すると同時に、運動の論理も宗教文化財の学術・美術的価値を主張するものだけでなく、景観保護やツーリズム振興、さらにナショナリズムや愛国主義に結びついた様々な言説があらわれるようになった。運動の担い手も、学者・知識人、博物館関係者だけでなく、学生やジャーナリストなどに広がり、正教の信徒たちも一定の役割を果たすようになった。

以上が扱われている問題の概要だが、本書は、後期社会主義の時代の文化財保護運動に特に焦点を当てながら、ソビエトにおける宗教文化財保護の歴史とその特徴的な実態を多面的に描き出している。

文化財保護にかかわる問題は多様で複雑であることから、評者が興味を持った問題や論点を中心に、章建てに即して本書の内容を紹介してみたい。

第1章では、革命からスターリン時代までのソビエト政権がとってきた宗教政

策と正教会や社会の反応など、本書の課題の背景となる歴史的な状況が概説されている。課題の前提となる、ソビエト政権樹立直後の「戦闘的無神論」のイデオロギーにもとづく大規模な聖堂閉鎖、教会財産の収奪と破壊の実態については、本書では詳述されていないが、ここで扱われている問題を深く理解しようとする読者は、20世紀のロシア正教会史などを参照する必要があるだろう。

第2章では、「後期社会主義時代」以降のソビエト社会で見られるようになった、人々の宗教的文化財への関心の高まりと保護運動の大衆化の状況が取り上げられている。興味深いのは、フルシチョフ時代以後の社会状況、社会意識の変化が、文化財保護運動を方向付けていったという筆者の指摘である。スターリン死後、国家イデオロギーの言葉は実体的な主体を失い、人々は上から流される言葉を空疎なものとして本気で受け取らなくなった。社会が恐怖から解放され、生活が豊かになったことも、このイデオロギーの形骸化を推し進めた。そのような変化の中で、国家イデオロギーとは次元の異なる、非政治的で個人的な価値、多様な価値を求める人々が出現するようになったという。

そのような流れの一つとして、身近な場所や歴史につながる価値、愛郷的・愛国的な価値を求める人々があらわれ、かれらは地元の、自国の宗教文化財へ関心を寄せるようになる。また、社会の安定と豊かさが人々に余暇をもたらし、ツーリズムが盛んになった。そしてそのことが観光地としての史跡への関心を呼び起こすようになったという。

このようにして、宗教文化財の保護運動の新しい流れがうまれた。その担い手たちは、なによりも文化財の管理を担当する行政機関に働きかけて史跡・文化財保護を実現しようとした。そこでは、「ソビエト愛国主義」「新しい伝統」といった、おおよしのイデオロギーに寄り添った理念がつくりあげられた。とくに、運動を進めて行く上で理念的な柱になったのが、ロシア・ナショナリズムである。この理念は、文化、社会、政治の場で様々なニュアンスで表明されながらも、国家イデオロギーと結びつくことによって、保護運動を下支えしてきたと言える。

また行政を動かすためには、運動を広げて社会的影響力を持たなければならぬとして、世論を喚起のための社会への働きかけが積極的に行われた。著者はそこに独自のソビエト的公衆（市民社会）の姿を見ている。

第3章は「宗教研究」が表題となっており、ソビエト宗教学の研究史も論じられているが、本書の課題追求の流れの中では、宗教文化財の研究・管理に直接携わる博物館の館員たちの活動についての記述が興味深い。その事例として、レニングラードのカザン聖堂に置かれ、科学的無神論のもとに研究が続けられていた「無神論史（宗教史）博物館」の戦前から後期社会主義時代までの歴史と館員・研究者たちの活動が詳述されている。そこでは、ソビエトの宗教政策の変化、社会状況の変化によって、いかに研究対象、方法、評価が振り回され、研究者が弾圧され、研究自体が制約を受けてきたか、博物館が戦前は「反宗教」、戦後は「科学的無神論のプロパガンダ」の場と位置づけられながら、館員の努力によって、どのような宗教の実証研究・展示が続けられてきたかについて、資料をもとに丹念に追求されている。

1964年以降ブレジネフ時代になると、博物館の科学的無神論宣伝の側面は薄められ、宗教（正教）の体制宥和的な側面、祖国や平和への貢献（「現代化された宗教」）などに光があてられるようになる。さらに、保護運動と呼応して、文化財としての宗教遺産に関心が払われるようになり、自国の歴史や文化についての人々の知的な要求を満たす啓蒙活動も行われるようになった。そのような変化をうけて、各地の生活に根差した宗教現象の調査と実証的な研究が行われるようになった。

第4章では、まず、戦前の限られた修復家、郷土史家、研究者たちによる、聖堂を博物館化することで文化財を守る運動の事例を紹介している。戦後になると、宗教文化財は史跡・文化財として公園や博物館として保護の手が及ぶようになり、ブレジネフ時代以降は、世論に支えられて保護運動が広がりを見せるようになる。その担い手として1964年に発足した団体「ロージナ」の活動、さらにツーリズム拡大と歩調を合わせて行政と一体となって創立された「全ソ史跡・文化財保護協会」（ВООПИиК）の活動が紹介されている。

ここで興味深いのは、文化財保護の運動が当初は知識人や篤志家によって担われていたものが、フルシチョフ時代以降大衆化していき、宗教文化遺産やその価値について新しい考え方を持った人々が保護運動に参加するようになったということである。そこでは、「民族の文化遺産」「民衆の伝統」「地域の歴史」と結び

つけて宗教文化財の価値を見出すようになったことが指摘されている。学生や文化人たちは、文化財の保護を当局に行わせるために世論に働きかけ、そのアピールのために、学術的な意義や教育目的のみならず、過去から学ぶレーニンの原則、とくに民衆（ナロード）の文化遺産の側面を強調し、ソビエト的な愛国主義の文脈で訴えかけるようになった。

第5章では、ロシアの歴史にかかわりが深く、正教徒も多いウラジーミル州を例にとって、ソビエト時代の宗教政策がどのように実行されていたか、住民たちの信仰生活の実態、宗教意識の変化などについて、フィールドワーク資料をもとに明らかにされている。

特に、1958年設立のウラジーミル・スーズダリ博物館が、聖堂などの文化財保護のために果たしてきた役割が検討され、ツーリズムの要素がその博物館活動を後押ししたことが指摘されている。また、ウスペンスキー大聖堂の保護をめぐる、行政当局、博物館、教会、信者共同体との間に生じた対立などを検討して、文化財保護運動における多様な当事者と複雑な利害関係、とくに信者たちが弾圧されるだけの存在ではなく、市民として信仰の権利を主張するようになったことについて考察している。

さらに、地方の信者たちが集まる巡礼地、小さな「聖地」、あるいは地域で尊崇されている地方聖人の扱いが、後期社会主義の時代にも宗教政策の課題、行政的な措置の対象になっていたことが、ウラジーミル地方の事例をもとに明らかにされている。

第6章では、戦後からブレジネフ時代にいたるモスクワの『ルブリョフ博物館』の歴史をたどり、文化財としてのイコン画に対して行政当局、博物館員、参観者たちがどのように評価を変えていったか、人々の正教に対する態度の変化について分析がなされている。さらに、世界的な映画監督アンドレイ・タルコフスキーの『アンドレイ・ルブリョフ』（1971年公開）を取り上げて、60年代のロシアの民族的源泉への関心の高まりの中で、タルコフスキーとその作品がどのような役割を果たしたか、また、おおやけのソビエト愛国主義イデオロギーとどのように衝突したかについて、作品にそった分析が加えられている。

第7章は、ロシア北方の宗教文化財に焦点をあわせ、キジー島、ソロフキ島、

ヴァラーム島の文化財とそこにおける博物館活動を取り上げている。これらの聖堂博物館にかかわる人々が、どのようにして文化財の保護・管理に尽力してきたかについて、フィールド調査の資料を用いながら具体的に考察している。そして、中央からは遠い周縁の博物館の現場では、それぞれの場の歴史や文化財の特徴に対応した言説を、スタッフが仲間内で共有しながら創り上げ、それによって参観者人々の関心をひきつけ、ひいては文化財保護への世論を高めようと努力していたことが強調されている。

また地方では、プレジネフ時代以降の「全ロシア史跡文化財保護協会」の活動も中央の指令に従って活動を展開するというよりも、地域ごとに組織された支部が中心となって、個別の史跡保護のためにふさわしい方法を模索しており、お仕着せでない「社会団体」としての性格をもって機能していたことが指摘されており、興味深かった。

なお、本書は、様々な時期にかかれた論文をもとにしてまとめられたモノグラフであるだけに、特定の問題が複数の章や節で多角的に論じられており、読み手の関心によっては章や節をまたぎながら読むことも可能な構成になっている。

評者はあらためて読んだときには、ペテルブルグの「宗教史博物館」（第3章1, 3節）とモスクワの「ルブリョフ博物館」（第6章1, 4節）を中央の博物館の歴史として、「ウラジーミル・スーズダリ博物館」（第5章1～3節）をツェリムズと結びついて文化遺産保護を目指す活動のあり方として、「キジー島博物館」（第7章2節）, 「ソロフキ博物館」（第7章3節）, 「ヴァラーム博物館」（第7章4節）を北方の博物館のスタッフの活動の独自の歴史として、比較をしながら読み、博物館にかかわる人々の奮闘ぶり、その戦略の多様性を実感することができた。

本書を読んで、ロシアの古い文化を研究する者の一人として啓発されたことと関心を導かれたことがあった。まず、本書が、ロシアの博物館・文書館のスタッフの仕事に光をあててくれたことはありがたかった。ロシアでは、博物館・文書館員に対する社会的評価は高く、評者自身もかれらの専門性の深さや学術的レベルの高さについては研究交流の中で実感していたが、実際にかれらの仕事を現場

で触れることは難しかった。それが、本書のおかげで、かれらの仕事への使命感や責任感、専門家共同体（仲間うち社会）の組織のありかたなどについて、その一端を知ることができた。

また、本書をきっかけに、文化財保護の多様で複雑なあり方についても考えさせられた。本書で紹介されている、学者、芸術家、修復家、文化人、文化行政の担当者、ジャーナリスト、熱心な信徒たちの他にも、様々な人々が、様々な方法で文化遺産の保護にかかわりを持っていただろうことを推察することができた。例えば、ソビエト時代には表面に出ることはなかった、市井のコレクターや保護・修復活動への支援者たち、古美術品を伝家の宝として守り伝えた人々、信仰を未来に伝えるために聖画や聖具を地下室に封じ込めた信者たち、古い信仰を守るために教典やイコンを手放さなかった古儀式派共同体のように、多くの無名の人々の手によって、文化遺産が守られてきたのだということが本書を読みながら想像することができた。

さらに、本書の範囲を超えることだが、ペレストロイカ以降現在にいたる、ロシアの文化財保護運動がどのような状況に置かれているのかについても、関心を導かれた。現在の文化財保護運動は、本書で論じられた時代とは異なった環境や条件のもと、異なった利害関係のなかで、依然としてアクチュアルな問題として人々の関心を惹き続けているに違いない。盛んに報道されている教会の分離、聖堂の移管、景観保護などについてのニュースに触れると、保護運動の当事者たちが、今ではどのような論理に依拠し、どのような言説を創り出しながら、運動を担っているのかについて考えさせられた。

文化財保護のテーマは、掠奪美術品の運命など派手な話題もあるものの、全体としては地味なテーマであり、ロシア本国では地道な研究がなされていても、日本であまり紹介がなされていない分野である。本書の出版を機に、ロシア伝統文化の研究のみならず、その公開や保護のための活動についても関心が広がることを期待したい。

（なかざわ あつお）

ソロモン・ヴォルコフ著・今村朗訳

『20 世紀ロシア文化全史』

河出書房新社, 2019 年, 416 頁

岩 本 和 久

毀誉褒貶の激しかった『ショスタコーヴィチの証言』（中央公論社, 1980 年）で知られ、他のロシア文化関連の著書の翻訳も少なくない音楽学者による「20 世紀ロシア文化史」。原書は История русской культуры XX века от Льва Толстого до Александра Солженицына (M., Эксмо, 2008) である。

文化史とされているが、文学作品や音楽作品の系譜が語られるわけではなく、ましてや作品分析がなされるわけでもない。啓蒙的な文学史や音楽史のように、巨匠の名前のリストが並ぶわけでもない。ソヴィエトの生活文化を論じているわけでもない。本書のテーマは序文で明言されているように、「前世紀のロシアにおける文化と政治の相互関係」、「政治指導者と文化」なのだ。そして「文化と政治」の「結びつき」が「顕著かつ悲劇的」であったため、「20 世紀ロシア文化」がその対象として選ばれているのである（7 頁）。

「政治指導者と文化」についての論考であるため、ソ連の指導者、特にスターリン、フルシチョフ、ブレジネフについては、相当に詳しい記述がなされている。芸術家や芸術作品よりも、歴代の政治指導者の姿が浮き彫りにされるという点が本書の特徴と言えるだろう。もちろん、本書の性格上、作家や芸術家の名前は多数登場するが、重心を置かれているのはそれほど多くはなく、トルストイ、チェーホフ、ゴーリキー、ローザノフ、スクリャービン、ディアギレフ、メイエルホリド、ショーロホフ、ツヴェターエワ、プラトノフ、アフマトワ、エフトゥシェンコ、パステルナーク、ソルジェニーツィンといったところで、それ以外の作家や芸術家は主役を取り巻く脇役であるかのごとく、簡潔に触れられるに

とどまっている。

本書は5部から構成されている。第1部は革命前の文化、第2部は革命期から大テロルまで、第3部は社会主義リアリズムと弾圧、第4部は「雪どけ」と「停滞」の時代、第5部は「停滞」の時代からベレストロイカ、ソ連解体後の1990年代までを対象としている。

政治的なトルストイと非政治的なチェーホフを比較した第1部の第1章、ローザノフやスクリャービンやディアギレフを通して世紀初頭のロシア文化の爛熟を語った第1部の第2章は、ベテラン教授の流麗な講義を聞いているような気持ちにさせられる。序論では1920年代に『ロシア文学史』を執筆したドミトリー・スヴァトボルク＝ミルスキーが、本書の語り口のお手本として挙げられているが、そのようなよどみない叙述の際立っているのが第1部だ。

とはいえ、本書が精彩を放つのは、革命後を描いた第2部以降である。第2部も芸術家の迫害についての教科書的な記述から開始されるが、やがて社会主義リアリズムの成立に話移ると、突如としてスターリンが前面に進み出してくる。図式的な「政治による文化の弾圧」という単純な理解でもなく、スターリンを消去して芸術家間の闘争に重点を移すのでもなく、スターリン自らが芸術をリードしていく様がここでは語られるのだ。

本書のスターリンは文化が社会を支えることを理解している。

「最高指導者は映画、クラシック音楽、特にロシアのオペラ（グリムカ、ボロジン、ムソルグスキー、チャイコフスキー、リムスキー＝コルサコフ）の大ファンであった。スターリンは観劇のためにしばしば劇場にも姿を現した。一つのパラドックスであるが、スターリンはレーニンよりも教育程度が高くなかったにもかかわらず、レーニンよりも積極的にハイ・カルチャーを享受し鑑賞した。このため、ソビエト国民を『文化的にする』という彼の計画においては、文学と美術に最も重要な役割が与えられた」（118頁）

「スターリンは、すべての国民を教養があり『文化的』にすることなくして、農業も工業も国防も新たな水準に引き上げることはできないだろうと説明している」（119頁）

一方、続く第3部ではショーロホフやアフマートワがスターリンを前に実行し

たゲーム＝賭けが紹介されている。ショーロホフは農業集団化や拷問を批判する手紙をスターリンに送り、さらには大テロルを批判する小話（アネクドート）をスターリンとエジョフの前で披露した。アフマトワは孤高の生活を送っていたにもかかわらず、1930年代末にアパートを割り当てられたり、年金を与えられたりと、急に良い待遇を受けたが、そのような待遇の好転の背後にスターリンの存在と自身に対するその信頼を想像していたのではないかとヴォルコフは推察する。ポーランド人のユゼフ・チャプスキや、イギリスに暮らすアイザイア・バーリンといった外国人とアフマトワが平気で接触していたのも、スターリンの庇護を確信していたからではないか？　だが、バーリンとの接触はスターリンの怒りを買ひ、ジダーノフ批判をもたらすことになる。

第4部、第5部になると、本書の記述はさらに生き生きとしたものになる。ヴォルコフは1944年生まれであり、「雪どけ」期以降の時代を同時代人として記憶しているからだろう。また、ヴォルコフの主張も、ソ連文化についての既成のイメージを覆すものになる。

「雪どけ」の新しい文化を許容した一方、激情家としても知られるフルシチョフだが、本書では文化について理解できない無教養な人物、小心で愚かな暴君として描かれている。スターリンやブレジネフに比べ、ヴォルコフの筆致はフルシチョフに対しては何とも容赦ない。

「なぜフルシチョフはスターリンの文化エリートに対する外見上の慎重さと敬意を込めた態度を借用しなかったのか？　なぜ、彼は芸術家たちから何かを得ようとするための最良の方法は、公の場で彼らを罵倒して脅すことであると判断したのだろうか？

このことは、フルシチョフから見て間違いなく巨人であったスターリンのような人物の後任として、国を指導する資格があるという自信の欠如、彼を苦しめた劣等感によって説明が可能だろうか？」（228-29頁）

「フルシチョフ自身の特有のスタイルにより、このパステルナークを批判するキャンペーンは激しさと手厳しさを増した。彼とパステルナークには、スターリンと異なり、まったく何の結びつきもなかった。フルシチョフにとり、パステルナークは、ショーロホフやトヴァルドフスキー、平凡な劇作家だがフルシチョフ

のお気に入りだったアレクサンドル・コルネイチュクでさえ持っていた権威を持っていなかった。当然のことながらフルシチョフはパステルナークの詩を読んだことがなく、彼の長編小説となればなおさらだった」(236 頁)

「フルシチョフは『雪どけ』の雰囲気生まれ、それがしばらく続いたことに苛立っていた。彼には、雪どけによる自由化の思想が西側と敵対するにあたって国の規律を緩め、国を弱体化するように思われた。彼は、こうした有害な思想の国内における主要な源は作家、詩人、作曲家、そして画家だと見なした。

スターリンと異なり決してハイ・カルチャーの愛好者でなかったフルシチョフは、これらの人々に常に疑問と偏見をもっていた。十分に教育を受けていない人間としてのコンプレックスがこれに拍車をかけたことは疑いない」(244 頁)

一方、官僚支配を招き、「停滞」をもたらした無能な政治家と考えられがちなブレジネフだが、本書ではフルシチョフよりもはるかに文化的教養のある人物として描かれる。「停滞」の時代にしても、ソヴィエトの文化が閉塞しきったわけではない。本書はその例として、タガンカ劇場、ヴィソツキーやオクジャワといった「吟遊詩人」に注目している。

本書で描かれるブレジネフ像は次のようなものだ。彼は「美男子」で、「平凡」な人物というのはフルシチョフ派の工作にすぎず、モダニズム文学にも理解があったというのである。

「1964 年 10 月、巧みな党内工作の結果、フルシチョフは権力を失い、レオニド・ブレジネフが新しい指導者になった。彼は、濃い眉毛の均整のとれた美男子で、愛想よくにこやかに振る舞った。彼は経験豊かで堅実な党官僚であり、即興や激しい感情に訴えるような性癖はないとの評判だった。このニュースは多くの知識人を安堵させ、彼らに希望を抱かせた」(251 頁)

「ブレジネフに関しては、補佐官や顧問たちが自由に操ることができる、平凡で、平均的な政治家という伝説が生まれた。このイメージは、基本的にはフルシチョフのチームにいた人々の努力の結果である。彼らはゴルバチョフのガラスノスチの時代になって、この新しい歴史に関するナラティブをつくり上げることに最初に成功したのだった。このようにして彼らは元ボスのずっと以前の敗北に復讐したのだった。〔中略〕ブレジネフはフルシチョフよりも愚かではなく、彼

よりも教養があった。〔中略〕フルシチョフの更迭の後、党の少人数の集まりで文化的な自由を拡大すべきかという問題を議論した。その時、ブレジネフはこのアイデアに好意的な態度を示し、フルシチョフが芸術家や作家を怒鳴りつけたことを恥ずかしく思い出す、と付言した」(257 頁)

「ブレジネフは、既に党中央委員会の書記長になっていた時、ロシア象徴主義の巨匠、ドミトリー・メレシコフスキーの長い詩『シャカ・ムニ（釈迦牟尼）』やエセーニンの詩を暗唱して周囲を驚かせた。これらの作品はスターリン時代にはすべて禁止されていた。ブレジネフは、若い頃に俳優になることを夢見て、革命の初期に、人気があったアマチュア劇団の一つに参加さえしており、彼のオーソドックスではない詩の好みの由来はそこにあった」(259 頁)

第5部は亡命の「第三の波」、ペレストロイカ、ソ連解体とソルジェニーツインの帰国を扱っている。ゴルバチョフやエリツィンについては、ブレジネフ以前の指導者ほど詳しく述べられないが、ゴルバチョフについては、やはり既存のイメージが批判されている。ロシア文化の新たなルネサンスとも言うべきグラスノスチ政策を進めたゴルバチョフだが、本書ではナンセンスなまでに保守的な価値観の持ち主として嘲笑されるのだ。

「ゴルバチョフは党の同僚たちに向かって、劇中のある登場人物の台詞を憤慨しながら読み上げた。『おい、おっさん、今どきどんな理想があるのかよ。笑わせんじゃねえよ。ひとつでもいいから言ってみろよ』そしてこうコメントした。『この発言——そう言わせていただければだが——はソビエト人であれば誰でも警戒心を抱くのに十分だろう。文化担当の党職員や検閲官であればなおさらのことだ。監督不行届きと政治的な警戒心の欠如という過ちが犯された。我々共産党員は自党の立場、共産主義者のモラルの擁護をいつまで差し控えるのだろうか?』

〔中略〕

会議ではゴルバチョフは強硬な保守派のイーゴリ・リガチョフと一緒にあってソルジェニーツインが味方として有用か疑問を提起した。『彼がいつか我々の真の友人、ペレストロイカ支持者になってくれるとは到底思われない』そして過半数がソルジェニーツインを支持しているとみて初めて譲歩し、リガチョフに向かって、『しかたがない。あなたと私だけが残されたという訳ですね。私も読ま

ざるを得ないですな』と言った」(292 頁)

本書のエリツインはゴルバチョフ以上に無教養な人物であり、ソヴィエトの文化システムを崩壊させた元凶である。

「ゴルバチョフはフルシチョフやブレジネフよりも教養のある人物だったが、スターリンやアンドロポフほどの教養人ではなかった。エリツインの文化的な視野はゴルバチョフよりもずっと狭かったと推測される。エリツインはゴルバチョフのように即興でレールモントフの詩を暗唱したり、新しい小説や戯曲について雄弁をふるうことができたとは思われない」(330 頁)

「エリツインは彼の周囲に集まってきたリベラル派のアドバイザーたちの構想力を評価しているようだったが、ゴルバチョフと違ってハイ・カルチャーを自らの不可欠な同盟者であると見なしていた期間は短かった。エリツインはソビエトの国家システムを破壊するだけでなく、その文化政策も放棄した。新大統領にとって、共産主義国家によって何らかの支援を受けていた何万人もの作家、詩人、画家、音楽家といった『創造的活動』の同業者団体の無数の会員たちは、おそらく怠け者、目的もなく庶民のパンをがつつ食っているだけの寄食者に思われた」(331 頁)

このようにソ連の指導者を評価する本書を読んでいると、文化に熟知していたスターリンの統治下で頂点に達したロシア文化が、フルシチョフやエリツインのような無教養な政治家によって、衰退させられる過程が20世紀だったのだろうか、という気持ちにさせられる。一方で本書はブレジネフには好意的だ。そのような認識は、スターリンやブレジネフの圧政を批判する従来の発想とは、大きく異なっている。

それにしても、文化政策の変化の要因を指導者の個性に帰すというのは、果たして適切なことなのだろうか？ というのも、ハイ・カルチャーの衰退、マス・カルチャーの隆盛というのはソ連に限った現象ではなく、日本も含め、20世紀の諸国で見られたことだからだ。政治家の文化的志向にしても、それは各々の個性というよりもむしろ、それぞれの置かれた時代の社会や文化の構造に依存しているものではないだろうか？ 本書の記述においても、ゴルバチョフは結局のところ、ヤコヴレフのような周囲の賢人に従い、グラスノチ政策を進めざるをえ

ない。

文化を動かす要因として政治家と同様に、本書が注目しているのは、西側諸国との対抗関係だ。その最大のものはノーベル文学賞で、(ゴーリキーではなく)ブーニンの受賞、パステルナークの受賞辞退、ソ連公認の作家であるショーロホフの受賞、ソルジェニーツィンの亡命など、ソ連当局にとっては屈辱と栄光の場であり、西側諸国にとっては新たな神話を生み出す装置として機能していたことが強調されている。

ソ連の非公式芸術についても、東西冷戦構造の文脈で語られている。西側の外交官らの注目した非公式芸術は、本書では「ディープ・アート」と呼ばれている。また、KGB はそれらの作品が外国に紹介されることを容認し、その活動に従事した前衛芸術家を自らの手の内に取り込むことで、監視網を強化していたとされる。1974 年のブルドーザー事件にしても、展覧会を破壊したのは「地元の党幹部」で、KGB は芸術家を救出するために奔走したのだという。こうした指摘は「政治による弾圧」という単純化を破壊するもの、同時代の作品がどのような政治的力学によって注目されるのか、を明らかにするものとして、興味深い。

本書は 20 世紀ロシア文化をめぐる状況を、芸術家、政治指導者、東西陣営の対立、KGB らの地下工作など実に様々な層で論じており、やや焦点を定めづらい。とはいえ、特に著者にとっての同時代であった「雪どけ」期以降の記述は、ロシア文化を考察する際に貴重なヒントを与えてくれるものだろう。

(いわもと かずひさ)

松木栄三著

『ロシアと黒海・地中海世界 人と文化の交流史』

風行社，2018 年，286 頁

今 村 栄 一

本書は前近代ロシア史家の松木栄三氏の遺著となったものである。本書までの松木氏の著書・訳書としては、『東西ロシアの黎明』（訳書，風行社，1999 年），『白樺の手紙を送りました』（訳書，山川出版社，2001 年），『ロシア中世都市の政治世界』（彩流社，2002 年），『ピョートル前夜のロシア』（編訳書，彩流社，2003 年）がある。

2014 年のロシアによるクリミア併合は国際社会に大きな衝撃を与えたが，歴史的に見れば，ロシアとクリミア半島および黒海，そしてその先の地中海世界は常に結び付きを持っていた。最近のロシアの動きを，近代帝国主義の覇権争いの中の南下政策という概念だけで，図式的に片付けてしまって良いものではない。そうしたことを考える上で，中近世ロシアと黒海・地中海世界の関係についての洞察がなされている本書は，読者に新たな視座を提示するであろう。本書著者の松木氏は，著名なビザンツ帝国史家の渡辺金一氏の門下であり，一橋大学の地中海研究会の当初からのメンバーである。こうした環境がロシアと黒海・地中海世界の間を，その研究生活の当初から常に，氏に考えさせたであろうことは想像に難くない。松木氏は，中世における黒海・地中海世界の歴史と同義と言うことのできるビザンツ帝国史を射程に入れながらロシア史を語ることのできる，日本では稀な研究者であった。

以下では，本書の批評というより，内容を要約しながら，ロシア中近世史と黒海・地中海世界との関連の一端を，極力分かりやすく紹介してみたい。

本書第1章「ロシア＝地中海関係史の一断面」と第2章「14-15世紀の黒海沿岸とロシア」は、いずれも中世ロシアと黒海・地中海世界の関係について取り上げている。本書評では時代順に見るために、章の順番を逆にして、まず第2章を読んで13世紀以降のイタリア人の黒海進出についてや、黒海貿易そのものについて概観した後、第1章でモスクワ国家とイタリア（ヴェネチア人）との関係をまとめてみたい。

1204年のコンスタンティノーブル陥落とラテン帝国の成立はそれまでビザンツ帝国によって閉鎖されていた黒海沿岸一帯に、イタリア商人が進出する契機となった。また、モンゴル帝国の征服活動の後、黒海・カスピ海沿岸からバルト海に至る領域を統治するキプチャク・ハン国が成立し、それまで分立していた広大な空間が同一政治権力に服し、相対的に安定した政治状況が生まれた。タタール人は自国内でのイタリア人の商業活動を許容した。イタリア人の植民都市のうち黒海商業史上最も重要な地位を占めたのは、クリミア東海岸のカフファとソルダヤ（スロジ）、アゾフ海のドン河口にあったタナであった。イタリア人を黒海に引き寄せた主要な要素はアラブ地域、ペルシア、インド、中央アジア、中国などからの東方商品であったが、黒海貿易固有の重要商品もあった。それは黒海周辺の穀物、魚、イタリア商人に最大級の利益をもたらした奴隷、北方ロシアから来る毛皮、蠟などであった。14-15世紀を通じて黒海沿岸は奴隷を「商品」として、不断に供給し続けた。黒海貿易が供給した奴隷の人種上の構成比はタタール人、カフカース諸種族、ロシア人の3つが最も大きかった。タタール人とはチュルク系の遊牧民と定住民であり、エジプトの初期奴隷王朝ではチュルク系のマムルークが好んで利用された。

本章第4節「ノヴゴロドの河川賊」では、ロシア北方の都市国家ノヴゴロドと黒海・地中海交易との関係について述べられている。このテーマについては、第1章第2節「ノヴゴロドとモスクワ」を先に見たほうが理解しやすい。14-15世紀には、ドイツ人を中心とするハンザ商人もロシア人と恒常的な接触を保っていたが、ハンザ商人が交易をおこなったのはノヴゴロドであり、モスクワはバルト海による西欧との交流をノヴゴロドによって遮断されていた。ノヴゴロドがハンザ都市との間でおこなっていた交易パターンは、モスクワが黒海岸イタリア植民

都市との間でおこなっていた貿易のそれとほとんど同じで、輸出品、輸入品とも品目構成が似通っていた。しかし、1475年にカフファがオスマン軍に占領されると、イタリア人による黒海支配の時代が終わり、ドン＝クリミア水路による交易は著しく縮小した。その結果、南に運ばれなくなったモスクワ商品のはけ口の役割をノヴゴロドが果たすようになると同時に、両者の矛盾と対立も強まり、1478年にモスクワ大公がノヴゴロドを併合する。第4節の内容に戻ると、ここで取り上げられるウシクイニクとは、1360年代から15世紀の初めにかけてヴォルガ河水路を舞台に猖獗した、ノヴゴロドの武装略奪集団であった。その規模は4000-5000人の集団から、小規模なものまで様々であった。ウシクイニクという現象は14世紀におけるヴォルガ商業の著しい復活を歴史的前提にした、松木氏の表現を借りれば、「この水路による交易の独占者〔モスクワ〕に対するノヴゴロドの挑戦であり、その果実の分け前を要求する暴力的表現」であった。

本書第1章は「15世紀のロシアとイタリア人」という副題を与えられている。15世紀にイタリア人と関係を持ったロシアというのは、上述の通り、モスクワ国家を指す。15世紀後半はモスクワ国家が国内の政治的統一をほぼ完了し、中央集権国家に成長していくロシア史上の画期であった。イワン3世はタタール支配からの最終的自立を達成し、ノヴゴロドとトヴェリを完全併合し、カザン・ハン国を服属させた。これらの戦争と遠征には必ずイタリア人建築家アルベルト・フィオラヴァンティが参加していた。彼はクレムリンの大聖堂や城壁などの建築家として有名だが、同時に大砲の鑄造師であり、有能な砲術家であった。彼は1475年にロシアにやって来ると、当時まだヨーロッパでも稀な大規模な大砲工房をモスクワに作った。考古学者で、中世ロシアの武器に詳しいキルピチニコフによれば、「モスクワの手中にあった火器は、ロシアの防衛と統一の最も重要な手段となった。1471年に始まるノヴゴロド、トヴェリ、カザン、ドイツのフェリーニ、リトアニアのセルベイス、スウェーデンのヴィボルクへの遠征において、大砲は攻撃兵器のうちで決定的な役割を担ったのである」。

大砲の他、14世紀前半にはロシアにイタリア製の紙が持ち込まれる。モスクワでは14世紀末に紙の利用が定着し始め、15世紀前半には羊皮紙と争いつつも次第にそれを駆逐し、後半には実務的文書の大部分が紙で占められるようにな

る。紙について述べた節の最後を、松木氏は次のように締める。「ベリョースタ〔ノヴゴロドで筆記用に使われた白樺樹皮〕の消滅と紙の普及はノヴゴロドの滅亡とモスクワの発展でもあった。イワンは青銅の大砲と紙とでノヴゴロドをわがものにした。イタリアの共和国の贈物でロシアの専制君主はロシアの共和国を葬り去った、と言えば少々短絡的だが、そんな思いも浮かんでくる」。

15世紀後半にイタリア諸国家がモスクワ国家との関係を重視した最大の理由は、切迫するトルコの危機であった。イタリア側はモスクワ国家に対トルコ同盟国としての役割を期待していた。しかし当時のモスクワ国家は、タタールからの最終的な自立や国内統一を進めることに主要な関心を持っており、イワン3世にとって火器は、何よりもタタールやノヴゴロドと戦うためにこそ、重要な武器であった。

第3章「ノヴゴロド大主教の白頭巾」は「14-15世紀のノヴゴロドと地中海世界」という副題を与えられているが、ここまでモスクワと黒海・地中海の関係史の、交易を中心とする叙述を読んだ後で、急に、聖職者であるノヴゴロド大主教についての叙述になるのは、やや唐突に思える。そこでここでは、中世ノヴゴロド史に関する松木氏の著作『ロシア中世都市の政治世界』に一旦立ち戻ってみることを提案したい。同書第1章、第3章で取り上げられているふたりの聖職者、すなわち帰化ギリシア人司祭、および地中海聖地巡礼をおこなった経験を持つノヴゴロド大主教についての叙述を読むことを通して、中世ノヴゴロドとビザンツ帝国、すなわち黒海・地中海世界との関係を理解することができる。

同書第1章「絵師グレチン」は以下の記述から始まる。「イギリスの著名なビザンツ史家オボレンスキーは、ビザンツ帝国からギリシア正教その他の文化的伝統を受け継いだ中世東欧諸国の国際的結びつきとその世界を『ビザンティン・コモシウェルスビザンツ共同体』と呼んだ。その『共同体』の最北に位置したロシア、そのなかでも中心都市コンスタンチノーブルから最も遠く、バルト海に近い北の端に存在していたのがノヴゴロド共和国である。12-15世紀のあいだ、奇妙なことに、ロシア最北端のノヴゴロドはロシアへのビザンツ文明の摂取にきわめて重要な役割を果たし続けた。」松木氏はノヴゴロド史を「ビザンツ共同体」の歴史の中に位置づけていたのであ

り、この立場から読むならば、ノヴゴロドの聖職者についての叙述も、ロシアと黒海・地中海世界の関係史のひとつとして、自然に位置づけることができる。

さて同章では、ノヴゴロド考古学特有の出土品である白樺文書の記述内容の分析と、年代記等の既知の史料とを組み合わせ、これまでほとんど知られていなかったひとりの帰化ギリシア人グレチン（1160年代?–1231年）の生涯と活動を明らかにしている。当時のノヴゴロドにとって、キエフ公権力からの国家的自立性を完成させるため、キエフ公の政治的支配権からの自由だけでなくキエフ府主教の干渉を免れた相対的に自由で独立的な教会の確立が必要であり、1165年にはノヴゴロド主教が大主教として格付けされコンスタンティノーブル総主教と直接関係を結ぶ可能性を手に入れた。そのためビザンツ帝国の正教的伝統を正確に学び、これをノヴゴロドの中に再現することが求められた。こうした時代背景の中で、正教文化の最も本質的な構成要素であり、正教会の不可欠な伝統でもあるフレスコ画やイコンの仕事も非常に重要視されたと考えられ、それゆえに帰化ギリシア人絵師グレチンは大主教候補として推されるなど、高い社会的地位を得たのであった。

同書第3章は14世紀の大主教ワシーリー・カレカ（1330–1352年在位）を主人公として取り上げている。ワシーリーが大主教に選出され叙任を受けた当時は、イワン1世が統治するモスクワと、ゲディミナスが統治するリトアニアが政治的に台頭してきており、この両勢力にどう対応するかが政治課題となった。ワシーリーはどちらかの側に立つ、というのではなく、モスクワとリトアニアの対立関係を巧みに利用して、ノヴゴロドの安全とその特権的地位の維持をはかる、現実的な外交政策を取った。しかし、これはワシーリーの外交に対する、年代記の記録だけに依拠する評価であり、松木氏はさらに踏み込んで、「しかし彼の真価が発揮された外交舞台の一つは、実はビザンツとの関係だったと思われる」と指摘する。14世紀に聖地旅行記を残したノヴゴロド人ステファンはおそらく、ワシーリーが派遣した訪問団の一員であり、その派遣目的は、当時ギリシア人府主教フェオグノストによって、モスクワを中心にしたロシア教会の統一のために活発なビザンツ外交が展開されたことに対抗して、ノヴゴロドのこれまでの特権的な地位を確保するためのものであったと、松木氏は考えている。そして、ワ

シーリーのこうしたビザンツへの働きかけが实际的な成果を生み、ノヴゴロド大主教がビザンツ皇帝と総主教からある種の特権的地位を保証されたのが、ワシーリーの死を挟んだ14世紀中頃であった。

さてようやく本書第3章に戻ると、ここで取り上げられる「白頭巾のノヴゴロド到来物語」の主人公は、実はその大主教ワシーリー・カレカである。しかしここでは15世紀後半のノヴゴロド大主教ゲンナージー・ゴノゾフがこの物語を編纂した理由に注目して検討がおこなわれている。物語の粗筋は、松木氏のまとめを参照すると次の通りである。この白頭巾はもともとローマ皇帝コンスタンティヌス大帝がキリスト教への改宗の後に、ローマ教皇シルウェステルに対し、この世の最高の宗教的権威の印として贈ったものである。しかしカール大帝の頃以降、この真の信仰の象徴はローマでは顧みられなくなった。神の命により白頭巾は14世紀半ばのビザンツのヨハネス・カンタクゼノス帝の時代にローマからコンスタンティノーブルに移され、同帝と総主教フィロテオスにより受け入れられ深く敬われたが、神の声は異教徒による来るべきコンスタンティノーブル占領を予告し、ノヴゴロドに白頭巾を移すよう命ずる。フィロテオスはノヴゴロド大主教ワシーリー・カレカに白頭巾を贈り、こうして正教の真の権威の象徴たる主教の冠はローマ教皇、コンスタンティノーブル総主教の手を経て最終的にノヴゴロド大主教に委ねられた。それ以来この白頭巾はノヴゴロド大主教とその地位の象徴となり、ノヴゴロド主教座の特別な権威を示す印となった。

白頭巾物語の中心テーマは、真のキリスト教的メトロポリスがローマの没落、コンスタンティノーブルの来るべき没落の後を受け、神意によりノヴゴロドに移されたというものである。当時、すでにノヴゴロドはモスクワに併合されており、ゲンナージーはモスクワから派遣されていたが、イワン3世政府がノヴゴロドで押し進めていた教会領の没収・世俗化政策に対する強い不満があり、このような非モスクワ的・親ノヴゴロド的理念を打ち出したのであった。また物語には、教会的権威の世俗的権威に対する優越性という、もうひとつの理念が含まれていると松木氏は考えている。ゲンナージーはこの理念を実際のノヴゴロド大主教による教会儀式の中で体现させた。イエスのエルサレム入城を記念する「柳の日曜日」の行事では、大主教が白頭巾を着けロバに乗り、俗人権力者がその手綱

をとって市中を行進した。その後おこなわれる宴席では、白頭巾の保有者であるノヴゴロド大主教の宗教上の権威が様々な儀式によって示され、出席者の前で「白頭巾物語」が読み上げられたのであった。

続いて、本書第6章「クリミア・タタールとロシア人『捕虜奴隷』」を、ロシアと黒海・地中海世界との関係史の文脈で読んでみたい。本書では第4章以下は第Ⅱ部「モスクワ国家と東方イスラム世界（16-17世紀）」として、ロシアと黒海・地中海との関係史とは区別されているのであるが、第6章については「16-17世紀のロシア＝黒海・地中海関係から」というサブタイトルを筆者自身が与えている。ここでロシアと黒海・地中海世界を媒介する勢力として登場するのは、クリミア・ハン国である。

ロシアは1480年頃に、約2世紀半続いた、いわゆる「タタールの軛」から抜け出たとされ、キプチャク・ハン国の本体そのものは16世紀初頭に消滅する。その後継国家も次第にロシアに併合されるが、クリミア・ハン国は18世紀末まで存続した。メングリ・ギレイ・ハンは、1475年にオスマン帝国の保護のもとギレイ王朝クリミア・ハン国を創建したが、彼の時代に、略取した捕虜や住民をカフファに運んで奴隷商人に売却し、莫大な利益を得る意識的な行動が始まった。クリミア・タタールによるロシアおよびポーランドへの襲撃が猖獗し捕虜数も最高潮に達したのは一般に1514-1654年の期間であったとされ、略奪により失われた住民の総数は、ポーランドで1474-1694年の間に100万人に達し、ロシアに関しては1607-1647年の間に約20万人という推計がある。奴隷交易こそがクリミア・ハン国の経済基盤であり、奴隷狩りには門閥貴族から一般庶民までの非常に広い範囲のクリミア人が関与していた。

16-17世紀における最大の奴隷需要国はオスマン帝国であった。16世紀にオスマン帝国による捕虜奴隷の自力供給が減少すると、クリミア・タタールによるオスマン奴隷市場への供給が重要な役割を果たすようになる。とりわけオスマン海軍のガレー船の漕ぎ手としてのスラヴ人奴隷の需要が非常に大きかった。16世紀後半には最低3-4万人の漕ぎ手が必要であった。ガレー船奴隷は消耗率も高かったため、絶えざる補給が不可欠であったが、奴隷は社会内で再生産され

ず、すべて外部世界からの供給に依存せざるを得なかった。

16世紀から17世紀前半にかけて対外的には西方のポーランド・リトアニア問題に専念していたロシアは、クリミア・タタールによる住民略奪の問題を解決するに十分な軍事力ないし外交的な力を持ち合わせなかった。最初モスクワ政府は捕虜の買い戻しを、捕虜にされた者の親族による私的救済に主に委ねていた。しかし捕虜奴隷問題が深刻化した16世紀半ばには、国家財政による捕虜奴隷の買い戻しを開始した。その資金はロシア全土の所領住民から税として徴収され、1649年会議法典でより明確で整備された制度として成文化された。なお1649年会議法典は、一橋大学を中心に全国のロシア研究者が集う中近世ロシア研究会で2005年から訳読がおこなわれたが、その際、松木氏は訳読の中心的な役割を担った。それゆえ松木氏は、同法典の規定に対する検討を糸口に本章を叙述し始めたのであろう。

クリミア・タタールの略奪によって捕虜奴隷になった者たちの中には、みずから逃亡してロシアに帰還した者もいた。政府によって買い戻された者を含め、こうしたロシア人捕虜奴隷の帰還の様子を、松木氏は本書第9章「あるロシア人捕虜奴隷の東方聖地巡礼」にまとめている。オスマン帝国のガレー船奴隷とされた者が帰還を果たした例や、トルコ人領主や貴族に仕える家内奴隷ないし軍事的従者として働いた者で帰還した例を紹介している。また、外国商人がモスクワに捕虜奴隷を運んできた例も取り上げられている。

ロシアへ帰還した捕虜奴隷からの聞き取り・調書作成を担当したのは、この頃ロシア政府内に形成された使節官署であった。捕虜買い戻し税を徴収し、外国に派遣される使節に買い戻し資金を渡すのも、外国商人やクリミア・タタールの使節がモスクワに連行する捕虜たちの買い戻しをするのも、すべて使節官署の役割であった。使節官署については、本書第5章「モスクワ国家の外交慣習」および『ピョートル前夜のロシア』解説2「使節官署について」に詳しくまとめられている。

ここまで16-17世紀のロシアとクリミア・タタールの関係史を中心に見てみたが、第9章で特に松木氏が取り上げているのは、『ワシーリー・ポーロゾフの嘆願書』と呼ばれる17世紀後半の一種の文学作品である。この作品の内容は、

松木氏のまとめをそのまま引用すると、コストロマ地方出身のひとりの小士族の少年が17世紀中頃にクリミア・タタールの捕虜となって連行され、オスマン帝国でスルタンの奴隷や海軍のガレー船奴隷として都合21年間働き、ガレー船の難破を機に逃亡して、パレスチナ、エジプトなどの東方聖地を巡礼し、ペルシア、カフカース経由でロシアに帰国したあとフョードル3世に対し、長年の労苦に報い、しかるべき官位を与えてほしいと嘆願するというものである。『嘆願書』の写本は16-17世紀のロシア士族や小士族がツァーリに提出した嘆願書の用語法や形式を踏まえて書かれ、形としては当時の多くの実務的文書と完全に一致している。しかし、文書の記述の中心部分は12世紀以来の中世ロシアで発展したホジェニエと呼ばれる東方聖地巡礼のジャンルに書かれる事柄やスタイルと完全に平行であった。この『嘆願書』は書き写される過程で何度かの編纂、改訂を経て幾種類かの写本が流布しており、あきらかに不特定の「読者」を想定した作品としての性格を持っている。こうしたことから松木氏はこの『嘆願書』を嘆願書の形式をとって書かれた東方聖地巡礼記の一種であると考えてさしつかえない、とする。東方聖地巡礼記としての『嘆願書』の際立った特徴は、主人公ボーロゾフが自発的な意志で聖地に赴いた本来の巡礼者ではなく、クリミア・タタールの捕虜奴隷であり、逃亡に成功してエルサレムやエジプトの聖地を巡礼したことであった。これが文学的なフィクションではなく、17世紀のロシア、クリミア、オスマン帝国の間に広がる国際的な空間で、実際に多くの類似現象が起こっていたことは、上述の通りである。

本書第4章および第8章は、学術雑誌、書籍に、テーマを与えられて松木氏が執筆したものであり、第4章はタタール問題、第8章は巡礼の問題を概説的に叙述している。第4章「ロシア史とタタール問題」の第1節「モスクワ国家の官僚制度」で松木氏は、キプチャク・ハン国に納入する諸税の代理徴収権をテコに権力を集中したモスクワ国家は、ハン国の発達した官僚制や財政システムを模倣した可能性が大きく、また、モンゴル軍制がモスクワ騎兵軍に影響した可能性も高い、と述べる。そうした例として、駅通制度、官署制度そのもの、官僚文書の様式・言語を挙げる。第2節「モスクワ国家のタタール認識」の前半では、16世

紀のスラヴ人貴族社会がビザンツ、ドイツ、リトアニア出身のエリート家系と並んでタタールの出自を持つ有力者を貴族の仲間として受け入れていたこと、モスクワ国家の君主である「ツァーリ」も16-17世紀には、少なくとも東方ステップ諸国家との関係においては「正統なタタール支配者」的装いをこらしていたように見えることを指摘している。これ以降は、第6章で取り上げられているクリミア・ハン国のロシア人捕虜奴隷の問題、第5章で取り上げられるモスクワ国家の外交慣習の東方的起源についてが簡単に紹介されている。

第4章との関連で第5章「モスクワ国家の外交慣習」を続けて紹介する。本章執筆には、17世紀中頃に使節官署に勤務し、後にスウェーデンに亡命した、ロシアの外交官グリゴリイ・カルボヴィチ・コトシーヒンが書き残した『アレクセイ・ミハイロヴィチ帝治下のロシアについて』の記述が多く利用された。この著作の訳読は中近世ロシア研究会で1993年から2002年の間におこなわれ、2003年には松木氏の編訳で『ピョートル前夜のロシア』として刊行されている。

松木氏によれば、外交上の儀礼は、その国が属する「政治的文化圏」への実際の帰属関係や帰属意識を最も端的に表現する標識であり、ヨーロッパ人は15-17世紀のモスクワ国家の外交儀礼に自分たちのものとは異なる、異質の、非ヨーロッパの性格を読み取った。本章では、そうした儀礼の例として、モスクワ国家の外交儀礼のうち、外国からの外交使節やそれに同伴する商人がモスクワ国家の領土内に滞在する全期間を通じて、彼らに食料、宿泊施設、輸送手段、案内役などの便宜がすべてツァーリの財政から提供されるという伝統的な対外慣行を取り上げている。この慣行はペルシアその他の東方諸国では必ずしも珍しい外交儀礼ではなかったが、多くの西欧諸国には馴染みがなかった。ここで第4章第3節「モスクワ国家の自己認識」に戻ると、松木氏は、こうした外交慣習をモンゴル時代以降の東方イスラム圏との外交関係の中でロシアに定着したものでないかと推測し、その起源をモンゴルのジャムチ制度（上述の駅遞制度の起源）だと考えている。また、16-17世紀のモスクワ国家がモンゴル後継国家であるクリミア・ハン国にある種の外交上の優先を与えていたのも、この国が伝統的な価値や政治文化を共有する、同一の国際秩序の中にあるという認識をモスクワ国家が持っていた表れと見るべきではないか、と松木氏は述べる。

一方、第8章「中世ロシア人の東方聖地『巡礼』」の内容の多くは、本書第3章、『ロシア中世都市の政治世界』第1章、第3章に含まれる。しかし同章第4節「修道士ゾシマの東方聖地巡礼旅行」はこの論考にオリジナルな部分で、15世紀の第1・四半世紀における、モスクワおよびリトアニア大公家とビザンツ帝国皇室の交流を窺わせる。松木氏の推測によれば、修道士ゾシマの巡礼は、モスクワ大公ワシーリー1世の娘で、リトアニア大公ヴィタウタスの孫娘にあたるアンナがビザンツ皇帝の長男に嫁いだが数年で早世したことを受けて、ワシーリー1世が、多少とも縁のあったゾシマを東方の聖地に巡礼させ、その魂の救済を願わせたものであった。

第7章「モスコヴィアの銃兵」は、本書の他の部分からは独立した論考であるが、上述の『アレクセイ・ミハイロヴィチ帝治下のロシアについて』の訳読がおこなわれている時期に書かれたものであり、松木氏が同文献中の使節官署に注目したことが、本書の第4章、第5章、第6章、第9章の記述内容に明白につながっているように、本章でも松木氏は同文献を参照し、16-17世紀モスクワ国家の、絶対主義時代への過渡的性格を表している制度のひとつとして銃兵についてまとめている。15世紀以来ヨーロッパのあらゆる地方で進行していた弓矢から火器へ、騎馬軍から歩兵へという流れに沿って、モスクワ国家の基幹軍事力であった身分制的で伝統的な騎士軍は衰退の過程にあり、こうした中、端緒的な常備軍として銃兵が誕生した。16世紀から17世紀初め頃まで、銃兵はロシア軍の重要な軍事力の一部を成していたが、やがて新たな軍事改革と新常備軍の編成が必然化し、1630年代には歩兵、重騎兵、竜騎兵から成る西洋式の常備軍で、絶対主義ロシアの先駆的軍隊である新編成軍が誕生することになる。銃兵に対しては軍事的機能の他に、都市の治安、警察、消防、要人や外国人の護衛など様々な社会的機能が課されていた。大部分の銃兵は様々な職人でもあって、免税特権を享受しつつ副業から得た収入で給与を補っており、完全な職業軍人に特化していなかった。こうした銃兵の特徴が、彼らの軍事訓練を阻害し、軍隊としての組織性や集団性を妨げ、必然的にその軍事的能力と機能の後退をもたらした。銃兵のコースト化も進んで、都市反乱や宮廷クーデターに彼らが参加する事態となったため、

銃兵は政府にとって危険な存在となり、17世紀末ないし18世紀初めに廃絶されることになったのであった。

本書の最後にあたる第10章「聖山アトスのロシア人修道院」には、アトス山についての概説と、その附録として、松木氏のアトス山紀行文2本が収録されている。しかし附録と名付けられているとはいえ、読者にとって印象に残るのはアトス山紀行文のほうであり、この章の中心部分だということができるであろう。松木氏は1986年8月と10月にアトス山を訪問している。前者は中村喜和氏と、後者は松木氏単独での訪問であった。前近代ロシア史家としての松木氏にとっては、アトス山にあったロシア人修道院である聖パンテレイモン修道院を実際に見てみたい思いが強く、そのことは附録2「聖パンテレイモン探訪」の冒頭にも書かれており、この紀行文の発表が訪問後すぐであること、第10章も主に聖パンテレイモン修道院についての概説になっていることから明白であろう。

聖パンテレイモン修道院は、史料での初出は1057年であるが、当初はロシア人修道院ではなかった。アトス山最初のロシア人修道院であったクシルルゴス至聖聖母修道院が修道士の増加によって手狭になり、1169年、当時の修道院長ラヴレンチーの要請によりプロタトン（アトス山の最高会議）が、廃院化していた聖パンテレイモン修道院を、それを再建することを条件にラヴレンチーに引き渡した。以降、ロシア人修道院の中心は聖パンテレイモン修道院に移った。13世紀以降、ロシアとのつながりが薄れ、セルビア人との混住修道院になったこともあったが、1497年には聖パンテレイモン修道院院長がモスクワ大公イワン3世を訪問して、ロシアとの関係を復活させた。その後も盛衰があったが、19世紀後半に修道院のロシア人修道士の数が増加、ロシア人が再び修道院長になった。この時期、ロシアにおける庶民の聖地巡礼熱が高まり、ロシア人巡礼者も急速に増加した。20世紀初めには全アトスでもロシア人の数（3600人）がギリシア人の数を上回り、文字通り「ロシアのアフォン（アトスのロシア名）」が出現する。しかし社会主義革命の影響などで、1910年代から以後80年間に渡って、長く緩慢な衰亡の時期を迎えた。ロシアの体制変革以後、1993年からは再びアトスに住む修道士や巡礼の数は増加している。

さて、松木氏による2本の紀行文の内容であるが、まずは附録2「聖パンテレイモン探訪」を見てみよう。1986年10月、松木氏はこの年2度目にアトス山を訪れた。寒い雨の日で、その日のうちに聖パンテレイモン修道院に行くことを周囲から止められたが、前回に泊まった宿屋兼食堂の主人と話し、食事をした後、氏は途中のクシロボタムー修道院までは行く決心をする。同修道院では、アトス山の特定の修道院の新しい現象として、世俗社会から若年僧を引き寄せている様子を見ている。翌日回復した天気のもと、松木氏は途中の山道を味わうように歩いて、聖パンテレイモン修道院に辿り着いた。しかし、こうして訪れた同修道院はかなり寂れていた。かつて800人の僧と巡礼が食事をしたフレスコ画で飾られた食堂は、今ではその一隅のたった1台の長テーブルだけを使って18人がひっそりとつましい共同の食事を済ませている、と松木氏は記す。同修道院を離れる際、氏は「もう一度ここを訪れることがあるとすればその時はどんな姿に変わっているだろう」という感慨を持つ。

一方、附録1「聖アトスへの旅」のほうは、中村喜和氏とのふたり旅で、アトス山のある聖山半島（アギオン・オロス）の南部を、首都カリエスからアトス山最大最古の大ラウラ修道院、カラカルー修道院、イヴィロン修道院と巡っている。途中、海が荒れたり、道に迷って目的の修道院に辿り着く前に日が暮れてしまったりと、松木氏によれば、文字通り「巡礼」らしい辛苦も経験したのであった。たった5日の巡礼も現代人にはこたえる、とも氏は書き残している。紀行に残される、松木氏の歴史家としての的確な観察は印象的で、途中出会ったアトス山の代表である首長（プロトス）、ニコライ2世の叔父が完成させた聖アンドレイ教会、アトス最大のスキティ（修道院に次ぐ施設）である聖アンナ教会、修道士が人々との関係を断って生活する隠修庵（イシハステイリオン）などについて、歴史的背景も踏まえながら描写している。

以上、松木氏の遺著となった『ロシアと黒海・地中海世界 人と文化の交流史』の内容について、松木氏の研究関心ができるだけ明確になるように、実験的に、本文とは違う順序で各章を要約、紹介した。中近世ロシア史は興味を持つ人が少ない分野だが、本書を読んで、読者の間に少しでもこの分野への関心が喚起

書評

されることを期待したい。松木氏の亡き後、日本における中近世ロシア史研究の伝統を引き継ぐことが、残された我々にとっての責務であり、仲間を増やしていかなければならない。

(いまむら えいいち)

ユーリー・S・マスロフ著・林田理恵＋金子百合子訳

『アスペクト論』

ひつじ書房, 2018 年, 432 頁

阿 出 川 修 嘉

本書は、1984 年にレニングラード大学出版会より刊行された論集「Очерки по аспектологии」¹ の邦訳である。林田理恵大阪大学教授、金子百合子神戸市外国語大学准教授の両氏（所属、肩書きは同書内の記述による）による共訳で、2018 年 9 月にひつじ書房より満を持して刊行された。

本論集には、言わずと知れたアスペクト論の大家である、ユーリー・マスロフ（Маслов, Юрий Сергеевич; 1914-1990）による、体・アスペクトに関する論考が合計で 13 本収められている。氏が生涯をかけたアスペクト研究の集大成と位置付けてよいだろう。1984 年という出版年からも分かる通り、これはマスロフの生前に出版された論集であり、マスロフ自身が序文を書いている。この論集自体は、21 世紀に入ってから、同氏の直弟子であるボンダルコ（Бондарко, Александр Владимирович; 1930-2016）らの監修の下に刊行された選集²に全編が再録されたということもあり、手に入りやすい状況となったのは記憶に新しい。

ロシア語を始めとするスラヴ諸語のアスペクト論に関わる著作の邦訳について言えば、比較的大部でまとまったものとなると、菅野裕臣東京外国語大学名

¹ Маслов Ю. С., *Очерки по русской аспектологии* (Москва: Изд-во Ленинградского университета, 1984).

² Маслов Ю. С., *Избранные труды. Аспектология. Общее языкознание* (Москва: Языки славянской культуры, 2004).

誉教授によるものが90年代に刊行されており³、二冊合わせて全28編の論文が翻訳されているが、ここではマスロフを始めとして様々な著者（アグレル、コシュミードル、ドスタール、ホロドーヴィチなど）の手になる論文が翻訳されている。それに対して、単一の著者によるアスペクト論を扱った書籍の翻訳としては、本書が本邦初であると言ってよいだろう。

今回の翻訳作業に着手した経緯については、本書巻末の「マスロフ著『アスペクト論』によせて」で述べられているとおり、日本語のモダリティ研究で名高い仁田義雄氏からの勧めが直接の契機となったようである。ロシア語学のアスペクト論（あるいはより広く言えば文法論）は、日本語研究者（の一部）からも絶えず注目されてきている分野でもあるため、今回の翻訳を心待ちにしていた研究者も少なからずいたと推察される。本書の刊行はそうした日本語研究者にとっても福音となったことだろう。

本書の構成（以下丸数字はここでの説明の便宜上本稿筆者が付した）を確認すると、①はじめに、②目次、③第1章（「アスペクト論の基本概念」）、④第2章（「スラヴ諸語における完了体／不完了体カテゴリー」）、⑤第3章（「スラヴ諸語におけるインパーフェクトとアオリスト」）、⑥第4章（「非スラヴ諸語のアスペクト論と対照言語学的アスペクト論の諸問題」）、⑦マスロフ著『アスペクト論』によせて、⑧参考文献、⑨日本語文献、⑩事項索引、⑪言語索引、となっている。このうち、訳者によって新たに追加されているのは、⑦と⑨のみで、その他は1984年の原著に忠実な構成である。ただ②の目次については、原著では例によって巻末に付されているが、この邦訳版では原著者の言葉（①）の次に配置されている。

原著の構成を最大限尊重するという訳者の姿勢を反映してこのような配列になったものと思われるが、それによる構成上のちぐはぐさを感じる部分もあ

³ 菅野裕臣『動詞アスペクトについて（I）』学習院大学東洋文化研究所，調査研究報告 No. 29, 1990 年。『動詞アスペクトについて（II）』学習院大学東洋文化研究所，調査研究報告 No. 35, 1992 年。

る。具体的には、⑦の配置で、これは巻頭もしくは原著者による前書き (①) の後にも配するべきではなかっただろうか。この中では, *совершенный вид*, *перфектив*, *perfective*, *несовершенный вид*, *имперфектив*, *imperfective* といった術語, あるいはそれぞれに対応する日本語の訳語として完了体, 不完了体といった術語をどのように扱ったかといった内容に言及されている。このような, 訳出に当たっての重要な取り決めは, 本文に入る前の早い段階で読み手には示されるべきであろうから, やはり冒頭に配されていてしかるべきであったろうと思う。また, 一般言語学の分野では, *perfective* に対しては完了相, *imperfective* に対しては未完了相といった術語が充てられていることが多いわけで, これらの術語との関係についても言及しておく必要があったのではないだろうか。

アспект論におけるこうした術語や概念の氾濫は, 予てより議論の対象とはなっており, マスロフ自身もそうした術語をめぐる問題に関する論考を残している⁴ (これは 2004 年の選集にも再録されている), この論考を受ける形でパドゥチェヴァ (Падучева, Елена Викторовна; 1935-2019) が, 90 年代に入って改めて考察を加えている⁵。また, その後さらにザリズニャーク (Зализняк, Анна Андреевна; 1959-) とシュメリョーフ (Шмелев, Алексей Дмитриевич; 1957-) によって用語集の作成が試みられたり⁶ と, 定期的に術語の整理の試みは行われてきているわけで, そのあたりについても本書内で何らかの指摘があってもよかったように思われる。

その他にも, アспект論という分野における基本的な諸概念や, 内外のアспект研究などについて, 訳注などでもう少し触れられていると後学の人間に

⁴ Маслов Ю. С., “Система основных понятий и терминов славянской аспектологии” in Ю. С. Маслов, А. Б. Федоров, eds., *Вопросы общего языкознания* (Ленинград: Изд-во Ленинградского университета, 1965), pp. 53-80. 【Маслов 2004 に再録】

⁵ Падучева Е. В., “Опыт систематизации понятий и терминов русской аспектологии” in *Russian linguistics* 22 (1998), pp. 35-58.

⁶ Зализняк Анна А., Шмелев А.М., *Введение в русскую аспектологию* (Москва: Языки русской культуры, 2000)

としてはより価値のあるものになったように思う（ただ一方で、そうした仕事の大変さも容易に想像がつく）ものの、これも原著を忠実に訳出するという点に重きをおいた結果なのだろう。

その一方、本書の形式面について、原著と比較してすぐに目につくのは、原著での脚注という形式から文末注の形式に変更されていることだろう。どちらの形式を選択するかは、それぞれの視認性をどう評価するかによるので措くとしても、誤解を招きそうなのは、原著者による注と、訳者による注という、性質を異にする二つの注が同じレベルで配置されていることだろう。読み手にとっては、目にしている注が原著者注と訳者注のどちらなのかが一見して分かりづらく、このあたりは工夫の余地があったのではないだろうか。また、巻末の事項索引も、日本語から引けるだけではなく、ロシア語からも引けるようになっていて、術語の対応関係がより明確になり、本としての利便性は一層増したのではないかと思う。

ところで、2018年というこのタイミングで本書が世に出た、その意義について少し考えてみよう。それについての訳者自身による言及は本書内には見つけられないが、マスロフ以降のアспект研究の大まかな流れを概観してみるとそのヒントが得られるかもしれない。

ロシア語を中心としたスラヴ諸語のアспектのカテゴリーに関しては、1940年代から80年代くらいまでは、マスロフやボンダルコなど、レニングラード学派に属する研究者たちによる、機能文法理論における体のカテゴリーという視点からの著作が中心を占めている。もう一方の流れとしては、モスクワ意味論学派に属するグロヴィンスカヤ（Гловинская, Марина Яковлевна; 1936-）が、ヴェジビツカ（Wierzbicka, Anna; 1938-）なども取り組んでいたメタ言語による意味分析の手法を用いて、体のカテゴリーを構成する完了体と不完了体という二項の間にある意味的対立が一樣ではないことを（ある程度）客観的に示した⁷。それ以前にも、アプレシャーン（Апресян, Юрий Дереникович; 1930-）による動詞の意味記述の試みはあった⁸ものの、同様の手法で、体の意味の記述に特化した形で考察が加えられたものとしてはこれが恐らくは最初であろう。興味深いのは、機能主義的な立場とは意味分析の手法を全く異にするグロヴィンスカヤによる研究

も、その最初の着眼点となっているのは、本書にも所収のマスロフの 1948 年の論文「現代ロシア標準語におけるアスペクトと動詞の語彙的意味」⁹で指摘されている、体の二項の間にある対立の意味内容の多様性であるということである。

一方、通言語的あるいは一般言語学的な視座に立ってアスペクトというカテゴリーを扱ったものとしては、70 年代に入って上梓された、Comrie (Bernard; 1947-) による研究はつとに広く知られているところだろう¹⁰。マスロフ、ボンダルコヤラッスードヴァ (Рассудова, Ольга Петровна; 1929-2011) による研究¹¹、またヴェンドラー (Vendler, Zeno; 1921-2004) などの研究を踏まえた上でアスペクトというカテゴリーを捉え直したこの著作をきっかけにして、これ以降、Dahl (Östen; 1945-) の著作¹²などを始めとする、欧米などにおける非スラヴ系の諸言語のアスペクト研究が活発化したと言ってよいだろう。

このように見ると、今やスラヴ語の範囲内にとどまらず、一般言語学的にも認知されているアスペクト論という分野において、その分析手法や、対象とする言語の差違に関わりなく、様々な研究の出発点となっているのが、マスロフの研究であると捉えることもできるわけである。

90 年代以降現在までは、体のカテゴリーのスラヴ諸語間の比較・対象研究や通言語的な視点からの分析のほか、体・アスペクトというカテゴリーを、語用

⁷ Гловинская М. Я., *Семантические типы видовых противопоставлений русского глагола* (Москва: Наука, 1982); *Многозначность и синонимия в видо-временной системе русского глагола* (Москва: Азбуковник, 2001)

⁸ Апресян Ю. Д., *Экспериментальное исследование семантики русского глагола* (Москва: Наука, 1967)

⁹ Маслов Ю. С., “Вид и лексическое значение глагола в современном русском языке” in *Изв. АН СССР, Отд-ние лит. и яз.*, Т. 7, вып. 4, pp. 303-316.

¹⁰ Bernard Comrie, *Aspect. An introduction to the study of verbal aspect and related problems* (Cambridge: Cambridge University Press, 1976)

¹¹ Рассудова О. П. *Употребление видов глагола в русском языке* (Москва: Изд-во Московского университета, 1968)

¹² Östen Dahl, *Tense and aspect systems* (Oxford: Basil Blackwell, 1985)

論、認知言語学、形式意味論など各言語理論に拠って分析を試みるなど、多種多様な視点・立場から捉え直そうと多数の研究者が取り組んでいる状況と言える。こうした様々な試みが行われている今こそ、いま一度アスペクト研究の原点たるマスコフの研究に立ち返るべき時期に差し掛かっているのかもしれない、それを考えると、ここで本書を手にとることができるのは偶然ではないのかもしれない。

アスペクト論という分野において、Маслов（1948）を始めとする氏の一連の研究の持つ影響力は他の研究者のものの比ではない。今回の林田、金子両氏の偉大な仕事のおかげで、そのマスコフの研究を日本語で読むことができるという、大きなアドバンテージを得たのである。以後アスペクトの研究に取り組もうと志す者は本書に触れることで、マスコフのアスペクトの捉え方などに接することができる。上で今回の訳書についていくつかの不満な点などについて指摘したが、そのいずれも揚げ足取りのようなものである。そのような不足を補って余りあるほどの高い価値を本書は我々に提供してくれている。アスペクト論の出発点となった一連の論考が日本語で読めるという、この好機を享受すべきである。

（あでがわ のぶよし）

学会大賞

日本ロシア文学会大賞（2018 年度）受賞記念講演

アカデミー版『ゴンチャロフ全集』編集入門譚

沢 田 和 彦

この度は思いも寄らずこのように立派な賞を頂戴し、他にもより適当な候補者がいるのにと、大変恐縮しています。推薦してくださった方と、大賞選考委員会委員長の諫早勇一先生と委員の皆様に心から御礼申し上げます。

業 績

講演を始めるにあたって、前もって2点お断り申し上げます。

第一点として、本日の話はゴンチャロフ研究に限定させていただきます。配布資料に私の業績を記載しましたが、単行本はすべて記載し、学術論文以下はゴンチャロフ関係に限定しました¹。

単行本

1. 〔共編著〕『異郷に生きる 来日ロシア人の足跡』成文社、2001 年、264 頁
2. 『白系ロシア人と日本文化』成文社、2007 年、390 頁
3. *Pilsudskiana de Sapporo. No. 5. Bronislaw Pilsudski in Japan.* Saitama, Saitama

¹ 学術論文以下は本稿では省略した。

- University, 2008, vii+204 p.
4. 〔編著〕 *A Critical Biography of Bronislaw Pilsudski [Preprint]*. 2 vols. Edited by Kazuhiko Sawada and Kōichi Inoue. Saitama, Saitama University, 2010, ii+8 illust.+490 p.; 8 illust.+498 p.
 5. 〔共編〕 *K. Савада, В. М. Латышев, М. М. Прокофьев, Г. И. Дударев* (сост.). Бронислав Пилсудский. Японские заметки. Южно-Сахалинск: ГБУК «Сахалинский областной краеведческий музей», 2012, 122 с.
 6. 〔編著〕『埼玉大学教養学部 リベラル・アーツ叢書 5 ポーランドの民族学者ブロニスワフ・ピウスツキの生涯と業績の再検討』埼玉大学教養学部・文化科学研究科, 2013 年, 131 頁
 7. 『日露交流都市物語』成文社, 2014 年, 422 頁〔第 10 章 長崎 第 1 節 「「鍵をかけた玉手箱」の国, 日本—ゴンチャロフ『日本渡航記』について—」。第 11 章 ペテルブルグ 「ゴンチャロフと二人の日本人」〕
 8. 〔共編著〕『異郷に生きる VI 来日ロシア人の足跡』成文社, 2016 年, 356 頁
 9. 〔編訳〕『埼玉大学教養学部 リベラル・アーツ叢書 9 日本在留のロシア人「極秘」文書』埼玉大学教養学部・人文社会科学研究科, 2018 年, 94+96 頁

日露交流史については 7, 白系ロシア人については 1, 2, 7, 8, 9, ポーランド人の民族学者ブロニスワフ・ピウスツキについては 3, 4, 5, 6 をご参照ください。現在, 私はピウスツキの評伝を執筆中です。

第二点として, こういう場での話はえてして自慢話になりがちですが, ご容赦ください。

大学, 大学院時代の研究

私は 1971 (昭和 46) 年に大阪外国語大学ロシア語学科に入学しました。第一希望の大学ではなかったので, うれしくもない入学でしたが, そんな折に出会ったのが法橋和彦先生のロシア文学入門講義でした。この講義を聴講して, 私はロシア文学の世界に魅入られました。講義はほぼ毎回時間超過, 一年生向けの入門

講義として先生はまったく手加減せず、情熱と迫力あふれる講義でした。時間超過はさておき、これこそあるべき大学の講義の姿だと私は今も思っています。講義は 19 世紀中心で、私はとりわけ〈余計者〉のテーマに興味を持ち、先生のアドバイスもあってイワン・アレクサンドロヴィチ・ゴンチャロフ（1812 - 1891）の『オブローモフ』について卒論を書きました。

1975 年に私は早稲田大学大学院に進学しました。ちょうどこの年、東大を定年退官された木村彰一先生が早稲田に移ってこられました。先生は当時講談社が出していた世界文学全集のロシア関係を担当され、ご自身も『オブローモフ』を翻訳される予定でしたので、幸いにも私の指導教員になっていただきました。大学院でもゴンチャロフ研究を続け、『オブローモフ』について修士論文を書きました。日本ロシア文学会の学会誌にミルトン・エーア氏（シカゴ大学）の『オブローモフ』論の書評を書いたのが、初めて活字になったものです²。博士課程時代に日本ロシア文学会で 2 回発表し、それぞれ学会誌に執筆しました³。『オブローモフ』は木村先生と灰谷慶三先生（北大）の共訳で出ましたが、その巻末の解説類を執筆しました⁴。

バンベルグでの第一回ゴンチャロフ国際会議

1991（平成 3）年の秋、ドイツの古都バンベルグで、オットー＝フリードリヒ名称バンベルグ大学文学部スラブ文献学講座の主任教授ペーター・ティールゲン氏の組織のもと、没後 100 年を記念して世界で最初のゴンチャロフ国際会議

² 「Milton Ehre, *OBLMOV AND HIS CREATOR: The Life and Art of Ivan Goncharov*, Princeton University Press, Princeton, New Jersey, 1973.」『ロシア語ロシア文学研究』11, 1979 年 10 月, 118-122 頁。

³ 「日本におけるゴンチャロフの受容について」『ロシア語ロシア文学研究』13, 1981 年 10 月, 72-85 頁。「二葉亭訳『おひたち』について」『ロシア語ロシア文学研究』14, 1982 年 9 月, 48-61 頁。

⁴ 「解説」, 「主要作品解題」, 「年譜」『世界文学全集 35 ゴンチャロフ 木村彰一・灰谷慶三訳 オブローモフ』講談社, 1983 年, 606-642 頁。

が開催されました。私は北海道大学の太西郁夫氏とともにこれに参加しました。私にとっては外国で開かれる国際会議への最初の参加となりました。

折からこの時期、北大スラブ研究センターにゴンチャロフ研究者エレナ・クラスノシチョーコワ女史（ジョージア大学）が客員研究員として滞在中でした。女史は1987年にアメリカに亡命しましたが、日本のロシア史学界は彼女の出現に注目しました。女史の父がアレクサンドル・クラスノシチョーコフだったからです。これはアメリカに亡命した後、1920～1922年にソ連と日本の間の緩衝国として存在した極東共和国の初代大統領となった人物です。彼は1937年にスターリンの粛清により無実の反逆罪に問われて銃殺されました。クラスノシチョーコワ女史もバンベルグの会議に参加しました。女史は大西氏と私をまとめて「мальчики」と呼びました。当時私は38歳でした。

東西ドイツ統一の1年後という混沌期にこの会議を組織したティールゲン氏の功績ははかり知れず大でした。11カ国から約40名に上る全世界のゴンチャロフ研究者をリストアップし、そのネットワーク作りをしたからです。従来活字でのみその名を目にしていた、ゴンチャロフ研究の中核をなすソ連の研究者たちが一堂に会し、報告し、討論する様は、壮観としか言い様がありませんでした。

大西氏は「長編小説『オブローモフ』の文体の特徴について」という報告をし、聴衆から賞賛の声が上がっていました。私は「日本におけるゴンチャロフ」というテーマで報告しました⁵。ご存知のように、ゴンチャロフは1853（嘉永6）年に遣日使節ブチャーチン提督付きの秘書官として長崎に来航しました。その世界周航の模様を書き記したのが旅行記『フリゲート艦パルラダ号』（1858年）です。私の報告は、日本側の露西亜応接掛の全権たちとその従者の日記に登場するゴンチャロフ像を紹介し、これらと『フリゲート艦パルラダ号』

⁵ Кадзухико Савада. Гончаров глазами японцев; Икуо Онуиси. Об одной стилистической особенности в романе *Обломов* – Деталь и образ героя – // Ivan A. Gončarov; *Leben, Werk und Wirkung; Beiträge der I. Internationalen Gončarov-Konferenz*, Bamberg, 8.-10. Oktober 1991. Böhlau Verlag, Köln, Weimar, Wien, 1994, S. 125-133, 269-276.

の記述とを対比しつつ、日露交渉の過程をたどったものです。幸い私の報告はロシア人研究者たちの興味を惹いたようで、質問がいくつか出ました。また報告終了後一人の見知らぬロシア人が近づいてきて、私の報告内容をソ連国内で紹介したいとして、その許可を求めてきました。私は承諾しました。そのロシア人はゴーゴリ研究で有名なユーリイ・マン（ロシア国立人文大学）氏であることを後で知りました。私の報告内容は氏によって『書物展望』誌で紹介されました⁶。

この会議で、ロシア本国のロシア文学研究において日本人研究者も貢献できる分野があるんだということを実感できたのが大きな収穫でした⁷。

クラスノシチョーコワ女史を通じて私はペテルブルグのロシア科学アカデミー・ロシア文学研究所（以下、「プーシキン館」）のトゥニマーノフ氏、オルナーツカヤ女史らと知己を結びました。ウラジーミル・トゥニマーノフ氏はドストエフスキイとレスコーフの専門家、タマーラ・オルナーツカヤ女史はかつてツルゲーネフ、ドストエフスキイ、オストロフスキイ全集の編集に従事した、全集作りのスペシャリストです。彼女はドストエフスキイの作品やゴンチャロフの『平凡物語』、『オブローモフ』、『断崖』の長編3部作と旅行記の全草稿に数回ずつ目を通しており、さながら〈生けるコンコーダンス〉と言うべき存在です。初めてのアカデミー版ゴンチャロフ全集刊行のための作業グループが、この年にプーシキン館に創設されたばかりだったのです。

この折オルナーツカヤ女史から飛び出した質問が、「オッシリヤン」とは何か、というものでした。「オッシリヤン」は、『フリゲート艦パルラダ号』の長崎の個所で繰り返し出てくる日本の舟子たちのかけ声です。これまでレニングラードに來た何人かの日本人に尋ねたが、誰一人答えられなかったと言うのです。この問いに即答できなかったこと、また私の報告が彼らの関心を惹いたことが、全集編

⁶ Манн, Юрий. Современные лики «традиционного» классика // Книжное обозрение. № 47, 22 ноября 1991 г. С. 7.

⁷ この会議については以下の参加記を参照のこと。大西郁夫「ゴンチャロフ没後百年記念国際会議について」『えうゐ』22, 1992年1月, 70-72頁。拙稿「ゴンチャロフ国際会議に参加して」『窓』80, 1992年3月, 8-11頁。

集作業に加わる機縁となりました。

ウリヤーノフスクでの第二回ゴンチャロフ国際会議

翌 1992 年の初夏、生誕 180 周年を記念してヴォルガ河に臨む作家の故郷ウリヤーノフスク市で第二回目の、そしてロシアでは最初のゴンチャロフ国際会議が開かれました。ゴンチャロフ歴史記念博物館は赤白のレンガ造りの建物で、かつてここにゴンチャロフ家が暮らしていました。5 人の館員はすべて女性で、ゴンチャロフの生涯と創作についてそれぞれ役割を分担して、資料の収集と調査活動に従事していました。いずれも魅力的な人たちで、生涯をゴンチャロフの一側面の研究と展示に捧げる姿に感銘を受けました。

会議の組織委員長はスラブ派の作家クルーピンがつとめました。会議の場での仕切り役はモスクワ大学のネズヴェーツキイ氏でした。プーシキン館からもゴンチャロフ・グループのメンバーたちが参加し、それぞれ全集編集作業の成果の一端を披露する実証的な報告を行ないました。モスクワ学派とペテルブルグ学派の対抗意識は、外野席から見ていてなかなか面白かったです。日本からは大西氏と私が参加しましたが、ゴンチャロフとゆかりの深い日本から来たというので、この地方都市で私たちは大いに珍重されました。大西氏は「ゴンチャロフの小説における『肯定的人物』の問題」、私は「日本におけるゴンチャロフの受容」について報告しました⁸。

会議の後のエクスカッションではロシア系フランス人の研究者ブルミストル氏の発案で、各人がゴンチャロフの作品中から «Немая сцена» を演じることになりました。無言劇です。ブルミストル氏は『断崖』のライスキイ、オルナーツカヤさんは『断崖』の祖母、大西氏と私は長崎に来航したロシア人乗組員の子孫の

⁸ *Икуо Ониси*. Проблема «положительного человека» в романах И. А. Гончарова; *Кадзухико Савада*. Творчество И. А. Гончарова в Японии // сб.: И. А. Гончаров. Материалы международной конференции, посвященной 180-летию со дня рождения И. А. Гончарова. Ульяновск: «Стрежень», 1994. С. 138-145, 160-171.

方とともに、長崎での日露対面の場面を演じました。最終日は市内から4キロの距離にある「ヴィンノフカの林」という公園にバスで出かけました。『断崖』の舞台マリノフカのモデルとなった場所です。毎年作家の誕生日である新暦6月18日前後の日曜日に、ここで「全ロシア・ゴンチャロフ祭」が催されています。この会議でプーシキン館のゴンチャロフ・グループのメンバーと親しくなれたのが、後から見ると大きかったと思います⁹。

ゴンチャロフ国際会議はその後にも現在に至るまで5年ごとにウリヤーノフスクで開かれています。私は1997年の会議にも参加し、作家とペテルブルグで交流のあった二人の日本人、市川文吉と安藤謙介について報告しました。この時は藤沼貴先生も参加され、「ゴンチャロフとトルストイの学生時代」という報告をされました¹⁰。モスクワの先生のお宅に泊めてもらい、ウリヤーノフスクまでの列車の旅もご一緒させていただいて随分緊張しましたが、今となっては貴重な思い出です。

プーシキン館のゴンチャロフ・グループと『ゴンチャロフ全集』

全集の編集陣は外国在住のティールゲン氏、クラスノシチョーコワ女史、私を含む8名、作業グループはプーシキン館の館員9名で、トゥニマーノフ、オルナーツカヤの両氏はその双方を兼ねる、という体制でスタートしました。

全集は全20巻。これまでゴンチャロフ研究の定本となっていたのが8巻本作品集（1977-1980年）だったことを考えると、本全集のもつ意義は計り知れません。作家の習作期の詩や翻訳、評論、検閲官としてのコメント、長編小説執筆の準備段階の資料、膨大な量の書簡がここに初めて収められます。また『フリ

⁹ この会議については、拙稿「第二回ゴンチャロフ国際学術会議に参加して」『むうぎ』12、1993年3月、73-78頁、を参照のこと。

¹⁰ Такаси Фудзинума. Студенческие годы И. А. Гончарова и Л. Н. Толстого; Кадзухико Савада. И. А. Гончаров и его знакомые японцы в Петербурге // сб.: И. А. Гончаров: Материалы международной конференции, посвященной 185-летию со дня рождения И. А. Гончарова. Ульяновск: ГУП «Областная типография "Печатный двор"», 1998. С. 55-64, 80-90.

ゲート艦パルラダ号』に詳細きわまりない注釈が付されたことも、全集のいま一つの〈目玉〉と言えます。第2巻が『フリゲート艦パルラダ号』の本文、第3巻(2000年)は全847頁で、その大部分が注釈とヴァリエントに充てられています。この注釈作成に私は加わったのです。

長崎・下田調査旅行

もう一つの僥倖は、1994～1995年にトゥニマーノフ氏が北大スラブ研究センターに滞在したことです。これによって氏と定期的に連絡を取ることができました。また1995年の初春には氏と木下豊房先生(千葉大)、それに私の家族も一緒に長崎へゴンチャロフ調査旅行に出かけました。豪雨のなか、幕末以来ロシアと関わりの深い稲佐の悟真寺で、今は亡き木津義彰師から話をうかがったことは楽しい思い出です。長男がグラバー邸の池にはまるというおまけまで付きました。いやそれよりも、あの「オッシリヤン」の謎がこの旅行で解けたのです。長崎歴史文化協会に郷土史家の越中哲也氏を訪ねた折、この永年の疑問点を口にするやいなや、部屋の向こう側で誰かが一声叫びました。「ヤッシリヨヤサー」と。これは元来長崎地方の近海で鯨を追いつめ込む時の漁師のかけ声だったのです。もちろんこれも注釈に入れました。

同年のゴールデンウィークには私は伊豆の下田と西海岸の戸田^{へだ}に出かけました。プチャーチンが長崎での交渉の後、ディアーナ号1隻で伊豆半島に再来航し、安政東海地震に遭遇して乗艦を失ったものの、ついに日露和親条約を締結したことはよく知られています。ゴンチャロフはパルラダ号を下船、帰国していましたが、後にディアーナ号乗り組み士官たちからの聞き書きで彼らの未曾有の体験を『フリゲート艦パルラダ号』の終章「20年を経て」のなかで再現しました。伊豆旅行はこの章の注釈作りに役立ちました。プーシキン館館員への説明のために長崎港、下田港、戸田港周辺の地図と写真も不可欠でした。また「琉球諸島」の章のために沖縄の歴史のにわか勉強もしました。

1999年に私はプーシキン生誕200周年記念国際会議でペテルブルグを訪れました。その際プーシキン館3階にある「ゴンチャロフ室」で最後の打ち合わせをしました。私の息子が長崎で池にはまった話は、プーシキン館で知れ渡ってい

ました。私はこの時点で出来上がっていた分の注釈の草稿を受け取り、帰国後に目を通して正誤表をペテルブルグに送りました。彼らが見落としていたミスをいくつか発見したのが私の自慢です。

注釈作成作業

注釈はレアリア（реальный комментарий）と歴史・文学（историко-литературный комментарий）の2面から執筆しました。

私は『フリゲート艦パルラダ号』の日本関係の部分、つまり「1853年末と1854年初頭の日本滞在中のロシア人」、「日本滞在中のロシア人」、「琉球諸島」、「20年を経て」の4章の注釈を他のメンバーとともに担当しました¹¹。これは大別して3種類の文献を駆使し、ゴンチャローフの記述と比較対照することによって成り立っています。まず第一はゴンチャローフ以前に、あるいは彼と同時に日本を訪れたロシア人の記録です。例えば、1804年に長崎に来航したクルウゼンシュテルンの『世界周航記』、1811年に国後島で捕縛されたゴロヴニンの『日本幽囚記』、ブチャーチンの「上奏報告書」、パルラダ号とともに来航したスクナー船ヴォストーク号の艦長リムスキイ＝コルサコフの日記と両親宛の書簡集などです。第二は長崎出島のオランダ商館に滞在した外国人の記録です。例えば、ドイツの博物学者ケンベルの『日本誌』、スウェーデンの医師にして植物学者ツンベルグの『日本紀行』、ドイツの医師シーボルトの『日本』、オランダ商館長ドンケル＝クルチウスの覚え書などです。第三に日本側の文献。江戸時代およびそれ以前の日本、長崎、伊豆、沖縄の風俗習慣や社会制度、日本の人名や地名、ゴンチャローフ以前に日本に来航した外国人に関わる文献もここに入ります。

以上のうち私が担当したのは、第一の範疇ではブチャーチンの「上奏報告書」、

¹¹ Фрегат «Паллада». Примечания. Том второй. I. Русские в Японии в конце 1853 и в начале 1854 годов. III. Русские в Японии. IV. Ликейские острова. V. Манила. Через двадцать лет // Гончаров И. А. Полное собрание сочинений и писем в двадцати томах. Т. 3, СПб., «Наука», 2000. С. 608-659, 675-712, 781-798.

リムスキイ＝コルサコフ海軍大尉の日記と両親宛の書簡集です。このリムスキイ＝コルサコフは有名な作曲家ニコライの兄ヴォインです。彼の日記と書簡集はハバロフスクで出版されたので、プーシキン館のメンバーには知られていなかったのです。第二の範疇ではオランダ商館長ドンケル＝クルチウスの覚え書を日本語訳で用いました。第三の範疇はすべて私が担当しました。作業の原則としては、当然のことながら、日本側の史料、情報を最優先し、日本語、英語、オランダ語（の日本語訳）の文献を主として用いました。これらの作業はかなりの時間と労力を要しましたが、世界中でこの作業をやるべきは自分だという意識がありましたので、さほど苦にはなりませんでした。

作業の出発点をなしたのは、高野明・島田陽共訳『ゴンチャロフ 日本渡航記』（雄松堂書店、1969年）¹²の故高野先生の訳注です。高野先生は元早稲田大学図書館の司書で、わが国における日露交流史研究の先駆者です。この訳注は日露双方の情報を豊富に盛り込んだもので、大いに役立ちました。次に利用したのは、アメリカの故ジョージ・レンセン氏の『1852－1855年のロシアの日本遠征』¹³です。レンセン氏はフロリダ州立大学の教授で、ロシア・アジア関係史の専門家です。これら先人の仕事によって、露西亜応接掛4名のうち副全権の川路としあきら聖謨の『長崎日記』や、同じく全権員で儒学者・古賀謹一郎の『西使日記』などを効果的に利用することができました。これら以外に私は新たな史料も発見し、利用することができました。例えば、古賀の随員の米沢藩士・窪田茂^{もすい}遂の『長崎日記』、佐賀藩士・千住大之助^{せんじゅ}の長崎出張記録『西亭私記』、全権員に随行した洋学者・箕作阮甫^{みつくりげん ほう}の『西征紀行』、『大日本古文書 幕末外国関係文書』などの古文書類などです。当時ロシアはユリウス暦、日本は太陰暦だったので、暦の換算には随分神経を使いました。

注釈はまず日本語で作成し、推敲した後ロシア語に訳しました。1995年春に

¹² 本書の改訂版は、高野明・島田陽訳『ゴンチャロフ日本渡航記』講談社、2008年。

¹³ Lensen, G. A., *Russia's Japan Expedition of 1852 to 1855* (Gainesville: University of Florida Press, 1955).

第一稿が出来上がりましたが、それを初めてトゥニマーノフ氏に見せた時のことは忘れられません。北大スラブ研究センターの薄暗い部屋の中、いつもはとぼけた表情でジョークを連発する氏とはまったく別の人間がそこにいました。張りつめた空気のなか短い説明の言葉をまじえつつ草稿に赤を入れていくトゥニマーノフ氏の横顔を見ながら、これがこの人の正体かと思いました。氏の帰国後は郵便、ファクス、Eメール、あるいはペテルブルグへの旅行者を通じてプーシキン館とやりとりしました。私の注釈がすぐには合格点をもらえなかったことも白状しておかねばなりません。補訂版を送るたびに、ペテルブルグからは心のこもった返信と的確で鋭い質問が投げ返されてきました。例えば「琉球諸島」の章に「豆でつくった白いねり粉の塊のようなものを、その場で焔^{こんろ}で焼いて売っていた」というくだりがあります。「豆でつくった白いねり粉の塊のようなもの」(какое-то белое тесто из бобов)は豆腐のことですが、これを私が和露辞典に従って「大豆製のコテージチーズのようなもの」と説明したためにプーシキン館では納得がいかず、おまけに豆腐とともにゴンチャロフが用いた動詞«поджаривать»が「焼く」または「フライにする」の意味になり、ロシアではこういう料理はありえないという質問が返ってきました。琉球では行事の時によく揚げ豆腐を作ったのです。私の説明の典拠も執拗なほどに尋ねられました。

注釈の例

私が付した注釈の例をいくつか紹介しましょう。川路聖謨は日記中でゴンチャロフのことを「謀主」,「軍師」と呼んでおり、作家がプチャーチン提督の〈知恵袋〉として交渉に積極的に参加していたことが分かります。これは『フリゲート艦パルラダ号』ではうかがい知れない事実です。全権員が初めてパルラダ号を訪問するにあたって乗組員は歓迎の準備に没頭していましたが、他方日本人たちの日記によれば、これは日本人による最初の外国船訪問であり、全権員はことによればそのまま外国に連れ去られるのではないかという危惧を抱いて、決死の覚悟で乗り込んだのです。千住の日記によると、古賀は鈍刀をあらためて研磨したとあります。また川路の日記によれば、露艦が長崎を出港する前日に日本側全権員の設けた送別の午餐会の席上で、ゴンチャロフが酩酊してユーモラスな振る

舞いをしましたが、これは彼の旅行記には出てきません。

日本側の史料との対比によって、ゴンチャロフたちの誤解も指摘することができます。例えば、ロシア人は全権員の長崎到着の遅れに苛立ち、既に到着したのを隠しているのではないかと疑いましたが、日本の史料を読めばそれが誤解だったことが分かります。江戸から長崎まで片道 1500 キロ、40 日間にわたる旅は過酷なもので、川路も窪田も身分の上下を問わず旅の苦労と疲労を訴えています。また長崎西役所でロシア使節団と全権員の最初の対面を行った際、出た日本茶に茶殻が混じっているのにゴンチャロフは呆れていますが、これも彼の誤解で、茶柱は吉事の兆とされ、故意に入れたのです。さらに作家は宴会の席上で川路が女性談義に移ったことを紹介し、「日本人たちはあらゆるアジア民族と同様に官能に耽って、その弱点を隠そうともせず、また責め立てようともしないのである」と書いていますが、他方川路自身は同一の場面について、「異国人、妻のことを言えば泣いて喜ぶという故に」江戸に残してきた自分の美人妻の話をしたのだと記しており、この点に関しては双方互いに責任転嫁を計っているようです。

逆にゴンチャロフの慧眼をも指摘することができます。彼は日本側から知らされた第 12 代将軍・徳川家慶^{いえよし}の死亡の日付を信用していません。将軍が没したのはユリウス暦 1853 年 7 月 15 日で、パルラダ号の長崎到着は 8 月 10 日、長崎奉行がロシア使節団に将軍の訃報を伝えたのはその 2 カ月後の 10 月 10 日で、死亡日を 8 月 14 日としたのです。ゴンチャロフの目はさすがに日本人の本質を見抜いていました。幕府は将軍の薨去を諸外国に知られて足許を見すかされることを恐れ、また国内の人心の動揺を来すことを懸念したのです。

ロシアの文学全集編集の伝統とその後のゴンチャロフ・グループ

このような作業を始めるにあたって、実は私自身に迷いがありました。『フリゲート艦パルラダ号』はとどのつまり作者の想像力を濾過した文学作品であり、それにレアリアを羅列した注釈を付けることがいかにほどの意味を持つのか、という疑問です。しかしプーシキン館のメンバーの仕事ぶりを見て、この疑問は一掃されました。個々の事実へのこだわり方、様々な文献を渉猟し引用するその仕方

が、徹底の度合いにおいて私の予想をはるかに凌駕していたのです。ここにはソ連時代から今日まで脈々と引き継がれてきた、文学全集編集の揺るぎない伝統が強く感じられます。プーシキン館の若いメンバーたちは、実際の編集作業を通じてこのような方法論を文字どおり頭と体にたたき込まれていくのでしょうか。実にうらやましい限りですが、その一端になりと触れえたのは誠に幸せなことでした。

その後、残念なことにトゥニマーノフ氏が2006年5月に心臓麻痺で急逝されました。享年68歳でした。我々は70歳のお祝いの文集を用意していたのですが、それが追悼文集になってしまいました。この文集に日本からは木下先生と望月哲男氏、私が執筆し¹⁴、安藤厚氏、木村崇氏、望月氏と私の家族の写真が掲載されています。

オルナーツカヤさんも2016年4月に亡くなりました。ゴンチャロフ・グループを去った人もいます。残ったメンバーもそれぞれ年を取りましたが、新たなメンバーを加えつつ5名で長丁場の仕事に引続き取り組んでいます。あと10巻、プーシキン館のゴンチャロフ・グループ¹⁵に心からの声援を送ります。

ゴンチャロフ記念国際文学賞受賞

2017年に私は図らずもゴンチャロフ記念国際文学賞を受賞しました。これはウリヤーノフスク州とロシア連邦作家同盟主催のもとに2012年から毎年ウリヤーノフスク市で行なわれているものです。ロシアのベテラン作家、40歳以下のロシアの新進作家、ロシアと外国のゴンチャロフ研究者の3部門でそれぞれ賞が授与されます。賞金はベテラン作家と研究者部門がそれぞれ50万ルーブル、

¹⁴ Т. Киносита. Что я помню; Т. Киносита. «Воспоминание спасет человека!». Воспоминания детства в творчестве Ф. М. Достоевского; Т. Mochizuki. *Shame and Idea: Dostoevsky's «A Raw Youth»*; К. Савада. 100-летие со дня смерти А. С. Пушкина в Токио. Из истории русской эмиграции в Японии // сб.: *Sub Specie Tolerantiae: Памяти В. А. Туниманова*. СПб.: «Наука», 2008. С. 19-22, 110-117, 243-256, 365-377.

¹⁵ グループのHPは www.goncharov.spb.ru。

新進作家部門は 30 万ルーブルです。

選考の経緯は分かりませんが、多分プーシキン館のゴンチャロフ・グループのメンバーが私を推薦してくれたのでしょう。彼らも 2013 年にグループで受賞しています。またグループの一人サーシャ・ロマーノワさんは超人的な努力によって『I. A. ゴンチャロフ 文献目録 (1832–2011 年)』¹⁶を完成し、2016 年に受賞しています。私は外国人としてはハンガリー人、ドイツ人研究者に次いで三人目の受賞者となりました。

ゴンチャロフ国際会議は私は 1997 年以来 20 年ぶりの参加となりましたが、作家の長崎来航について報告しました¹⁷。会議の最終日に市内の書物会館で授賞式が行なわれました。想像していたよりも盛大な授賞式で、式典の主役はモロゾフ州知事とはいえ、自分のスピーチの時は緊張しました。自分の来し方を、今回はあえてネイティブ・チェックを受けず、自分でロシア語で作文、推敲し、それを頭に入れて式に臨みました。ベテラン作家部門はヤクーツク在住の歴史作家ニコライ・ルギノフ氏、新進作家部門はモスクワのユーリイ・ルーニン氏、研究者部門はモスクワ市立教育大学・モスクワ大学教授イリーナ・ベリャーエワ女史と私が受賞しました。ベリャーエワ女史はツルゲーネフ研究が中心ですが、『長編作家 I. A. ゴンチャロフ ダンテとの対比 モノグラフ』¹⁸を上梓されたのです。

『ゴンチャロフ全集』購入のお願いと謝辞

最後に宣伝で恐縮ですが、会員の皆様ご勤務の大学の図書館に是非『ゴンチャロフ全集』を入れてくださるようお願いします。1997 年に第 1 巻が刊行されてから今日まで第 1～8, 10, 15 巻が出ました。例えば第 3 巻には、ロシア外交史料館で発見された作家の手になるブチャーチン名義の公文書 24 通が収められ

¹⁶ Романова А. В. (сост.) И. А. Гончаров: Библиографический указатель (1832–2011). СПб., 2015.

¹⁷ «Запертой ларец с потерянным ключом»: И. А. Гончаров в Японии // сб.: Материалы VI международной научной конференции, посвященной 205-летию со дня рождения И. А. Гончарова. Ульяновск: «Корпорация технологий продвижения», 2017. С. 35-43.

¹⁸ Беляева И. А. И. А. Гончаров – романист: Дантовские параллели: Монография. М., 2016.

ています。日露交流史に興味をもつ者であれば、これらの文書を日本側の史料と比較対照することによって数本の論文が書けるでしょう。また〈文学と検閲〉というテーマに関心を抱く研究者にとっては、第10巻が貴重な資料として役立ちます¹⁹。

最後になりましたが、既にお名前を挙げた以外の先生方にもこれまで大変お世話になりました。とりわけ大阪外語時代の武藤洋二先生、早大大学院時代の安井亮平先生、柳富子先生、「〈ロシアと日本〉研究会」と「来日ロシア人研究会」の中村喜和先生、長縄光男先生には計り知れぬ学恩を被っています。心から感謝申し上げます。

今後はこれまでの研究を継続しつつ、2016年10月に「来日ロシア人研究会」が終了しましたので、近い将来に日露交流史関係の新たな研究会を立ち上げて、幾分なりとも若手の研究者に還元できればと考えています。

ご清聴有難うございました。

(さわだ かずひこ)

¹⁹ 拙稿「Гончаров И. А. Полное собрание сочинений и писем в двадцати томах. Том 10: Материалы цензурской деятельности. СПб.: «Наука», 2014, 700 с.」『ロシア語ロシア文学研究』47, 2015年10月, 270-275頁, を参照のこと。

日本ロシア文学会大賞(2019年度)選考結果報告

諫 早 勇 一

昨年12月末時点で2件の推薦があり、その審議のために4月13日に東京大学で選考委員会を開催したが、審議の末、大賞候補者として佐藤昭裕・京都大学名誉教授を推挙することが満場一致で決定された。

佐藤氏の研究対象は、現代ロシア語、現代ポーランド語、古教会スラブ語、中世ロシア文章語と多岐にわたるが、特に古教会スラブ語と中世ロシア文章語のテキスト構造の研究に際立った独創性を見ることができる。

佐藤氏は古教会スラブ語と中世ロシア文章語の動詞のテンス・アスペクト研究を動詞の意味論研究の枠を超えて、この動詞の文法的範疇とテキストのタイプとの関係の分析に発展させた。中世ロシア文章語の「語りのスタイル」の特殊性を古教会スラブ語のそれと比較対照することによって明らかにしたのである。さらに氏は特に「事実叙述」と「コメント」という2つのテキストタイプがもたらす統語面の現れの違いの関連性に注目して研究を進めた。この着眼点自体が佐藤氏独自のものである。氏の多くの研究によって今までにほとんど注目されてこなかった中世ロシア文章語の文体研究は新たな局面を迎えたと言ってよい。そして氏は、国際スラヴィスト会議などの国際会議においても研究成果を積極的に公表することに努め、国際的に高い評価を受けている。

また佐藤氏のロシア語研究は、「ロシア」という枠にとらわれることなく、「東スラブ語の中のロシア語」、「スラブ語の中のロシア語」、そして「自然言語の一つとしてのロシア語」という言語学者の客観的で純粋に学術的な視点からなされてきた。そして氏は一般化を急ぐことなく、自説に対する異論を想定し忍耐強く丁寧に検証する態度を保つことを忘れない。このような態度は研究者の手本とな

るべきものである。

このように佐藤氏は国際的にもすぐれた研究業績を残しているが、言語学・ロシア語学という分野の性格上、その業績が学会員に広く知られているとはいえない。今回佐藤氏が受賞されることが、言語学・文献学を志す若い研究者にとって大きな励みになることを期待したい。

(いさはや ゆういち)

学会賞

北井聡子氏と青山忠申氏に日本ロシア文学会賞

井 上 幸 義

I

日本ロシア文学会賞選考委員会は、2019年6月1日に選考会議を開催し、今年度の優れた研究業績として以下の論文の筆者に学会賞を授与することに決定した。

【論文】北井 聡子 「ファルスを持つ女：長編小説『セメント』のダーシャについて」（『ロシア語ロシア文学研究』第50号所収）

【論文】青山 忠申 「『アヴァクム自伝』自筆稿のアクセントに見られる規範と逸脱」（『ロシア語ロシア文学研究』第50号所収）

なお、選考過程として、1月末日締め切りで一般会員から候補作の推薦を募り、同じく3月末日締め切りで各選考委員から候補作の推薦を募り、6月1日の選考会議において候補作の審査および選考を行った。今年度は一般会員からの推薦はなかった。著書に関しては、今回は該当作なしという結論に至った。

受賞作に関する以下の選評は、選考委員会で各委員から出された意見を井上の責任においてまとめたものである。

II

北井氏の論文は、ラカン派の精神分析の概念である「前エディプス期」「ファリック・マザー」「想像界」「象徴界」等の枠組みを、ソビエト時代にフォードル・グラトコフによって書かれた長編小説『セメント』のヒロイン、ダーシャ・チュマーロワの分析およびその分析を通じた新たなジェンダーの産出・配分の考察に応用した論考であり、これまでもっぱら社会主義リアリズムの規範として分析されてきた小説『セメント』に対しダイナミックで新たな読みの可能性を提示することに成功している。

北井氏は、まず、ドイツ・ルネサンスを代表する画家ルカス・クラナハが描いた古代ローマの伝承に登場する女性「ルクレティア」の図像における「剣」という「ファルス」的イメージから説き起こし、そのアナロジーで論を導きながら、グラトコフの『セメント』でダーシャが被る「赤い頭巾」という「ファルス」的イメージを小説の核になるものとして取り出し、最後には「赤い旗」によるその役割交替も読み取るといった、小説の中心的イメージの摘出とその分析を軸に据えた論述を展開しており、その論旨は示唆に富み、刺激的でさえある。

伝承上のルクレティアは、夫が戦地にいる間に、ローマ王の第三王子セクストゥスに凌辱され、「体は犯されても心は潔白だ」と言い残し、短剣で自ら胸を刺して息絶える。王の圧政に不満を抱いていたブルトウスは、彼女の胸から短剣を引き抜いて掲げ、王家の打倒を呼びかけると民衆たちによって王家は追放される。北井氏は、この短剣に「ファルス」的イメージを読み取り、同様に、小説『セメント』において白軍の二人の士官に凌辱と拷問を受けたダーシャが、その後、党の女性部のリーダーとして革命に人生を捧げ、集団全体を導くに至る過程で被る「赤い頭巾」にこの「ファルス」的イメージを読み取る。

北井氏は、ダーシャが頭につけているものを「赤い頭巾」（2箇所で「スカーフ」）と訳し、これが本論文のキーワードになっているが、原作では一貫して красная повязка（赤い細長の布切れ、リボン）である。革命の際、赤軍兵は赤い повязка（リボン）や бант（蝶結びのリボン）を腕や胸に付け、女性は赤い платок（スカーフ）を頭に被ることがあったが、女性ながら платок ではなく повязка を頭に巻くという行為そのものにダーシャの先駆性・リーダー性が象徴

されている。だからこそ、軍服に「赤い蝶結びのリボン」を付けた赤軍兵たちが、頭に「リボン」を巻いたダーシャに遭遇したとき、「赤いリボンにウラー！赤い女性にウラー！」とダーシャを讃えたのであり、ダーシャを自分たちと対等な戦士と認めたということが意味されている。「赤い頭巾」と訳すと красная шапочка и серый волк「赤頭巾ちゃんと灰色オオカミ」との連想から別のイメージを与えかねない。

北井氏は、ダーシャと表裏一体の存在としてポーリャを位置付ける。ポーリャはダーシャに憧れる存在であり、自分もまた革命に人生を捧げたいと願いながら、トラウマの履歴を持たないために戦う為の根拠を欠いており、その存在基盤は脆弱であるために、ダーシャと同様「赤い頭巾」(повязка)を被ってはいるが、そこに力が宿ることはなく、言わば偽物のファルスを頭に載せた存在であるという本論文の指摘は説得力をもつ。さらに、ダーシャが短髪に男物のシャツを身に着け「男らしさ」を手にしたファリック・マザーとしてジェンダーの象徴界を攪乱しつつあるのに対し、ポーリャはジェンダーの象徴界の秩序を守るための「女」として、男達の「男らしさ」を維持することにある、というダーシャとのジェンダーを巡る存在意義における比較論は示唆に富む。

本論文では、党を肅清され廃人化したポーリャの男性恐怖症が、ダーシャの中の「男らしさ」を消滅させ、それによってダーシャが＜ファルス＞を失い、＜名誉男性＞の地位から＜普通の女＞へと格下げされること、それに呼応するように、セメント工場の再稼働を果たしたダーシャの夫グレブが「赤い旗」を掴んで群衆の上に掲げて振ることによって、ダーシャが所有していた＜ファルス＝赤い布＞が「頭巾」(повязка)から「旗」へと名称を変更する、というダイナミックなイメージの役割交替の読みを提示している。ただし、ここでも повязка が、頭全体を覆う大きな「頭巾」と捉えられ、大きな「布」が大きな「旗」のイメージと交替すると解釈されているように読めるが（あるいは、「旗」のイメージに引きずられて「頭巾」と訳したのだろうか）、повязка は布の「リボン」であり、「リボン」が「旗」へイメージ交替するという図式も成り立つだろう。

以上のように、本論文は、ラカン派の精神分析の手法を見事に文学研究に応用しており、今後の研究の発展が大いに期待できるが、それゆえに、本学会の学会

誌のような媒体においては、もう少し一般的な読者・研究者を意識したテーマの提示のしかたや論文の構成を工夫するとよいのではないかという意見が選考委員会であったことを付記しておきたい。

青山氏の論文は、17世紀後半に長司祭アヴァクムによって書かれた『自伝』の自筆稿において、アヴァクム自身が記したアクセントが規範から逸脱している現象を、「文献執筆者の主体的アクセント操作」という視点から分析したものであり、従来のアクセント論的立場からは説明困難な「逸脱」という現象に新たな方法論をもたらしうる論考である。古代・中世ロシア語のアクセント研究は、ザリズニャークが、14～17世紀に書かれたロシア各地方の方言的特徴が見られる多数の文献の統計的アクセント調査に基づき編纂した、画期的なロシア語アクセント辞典《Древнерусское ударение》を2014年に出版した時点から新たな研究段階に入ったばかりであり、本論文は、日本のロシア語研究におけるこの分野の嚆矢をなすものである。

青山氏は、アヴァクムの2種類の自筆稿のアクセント表記に関する、ザリズニャーク、コーレソフなどの先行研究を綿密に検証し、それぞれの方法論をリズム、語順などの視点から分析していく。

ザリズニャークは、アヴァクムの『自伝』の言語をロシア北東部地域の方言に分類したうえで、この地域に特徴的なアクセント体系の例外のひとつとして дефинализация（非語末化）を挙げている。非語末化とは、語末の開音節のアクセントが一音節左へ移動する現象をザリズニャークが定義したもので、たとえば, вино́ を ви́но, ѿт пяти́ を ѿт пѣти と発音する現象である。ザリズニャークは、非語末化の他に、本来的でない位置のアクセント記号として、一音節おきに韻律的強めを表す「副次的アクセント」の存在を指摘している。青山氏は、『自伝』中には非語末化も副次的アクセントも見られるが、ザリズニャークは、このような「逸脱傾向」がどのような場合に現れるかという条件を明らかにしていないとする。この指摘は正当なものであるが、用語に関して言えば、ザリズニャークは、一般的に使われる акцентные отклонения「アクセント逸脱」を敢えて避け、акцентные изменения「アクセント変異」という用語で非語末化を説明している

点に注意を払う必要があるだろう。

一方、コーレソフは、『自伝』における定語的語結合の語順とアクセントとの関係に注目し、本来の語順では標準的なアクセントが付されているのに対し、語結合内の構成要素の順番が逆転した例では例外的なアクセントが現れているという解釈を提示している。青山氏はこの定語的語結合に関する解釈を、所有代名詞と「y+ 生格」との関係に拡大し、所有代名詞同様「y+ 生格」も被限定語に対し後置語順が標準的であることを明らかにするとともに、『自伝』では、標準的なアクセント «у боярыни» に対し、「y+ 生格」が被限定語の前に置かれ、かつアクセントが例外的な例として、«у боярой кѣры всѣ занемогли» 「夫人の雌鶏は皆病気になる」という例を発見している。青山氏は、この例外的なアクセントがリズムに関わる逸脱である可能性を示唆するとともに、同じくリズムに関わる『自伝』中のアクセントの例として、バイカル湖に生息する動物の名称に付けられたアクセントを指摘しているが、これも先行研究では言及されていない新たな発見である。すなわち、『自伝』では、バイカル湖に生息する動物の名称が2種類ごとにアクセントが共通の位置に置かれているというのである。具体的には、「ガチョウウヤハクチョウ гѣсѣи j лебедѣи」「チョウザメヤイトウ всетры j таимѣни」「コチョウザメヤオームリ стѣрьледи j ѡмѣли」「アザラシヤアゴヒゲアザラシ нѣрпы j заицы」のようにまとめて列挙され、アクセントがそれぞれで共通の位置に置かれていること、その際、アヴァクムの同獄者で『自伝』を編纂したエピファニーによって修正のために付されたと考えられる標準的なアクセントの таимѣни に対し、アヴァクム自身が記したアクセントは、先行する名詞 всетры の語尾アクセントに合わせ таимѣни と語尾に打たれていることなどのリズムに関わる逸脱の現象を発見している。これらのアクセントの逸脱がこの場面の「詩的效果を高める役割を果たしている」という指摘は、読み手を意識した意図的なものという青山氏の推察を裏付けるものであり、18世紀以前のアクセント詩法を想起させ、興味深い。

以上のように、青山氏は、アクセントの逸脱という現象について、先行研究の非語末化や語順論などを綿密に検証するとともに、リズムを揃えることによる詩的効果の可能性を見出し、「文献執筆者の主体的なアクセント操作」という新たな

な概念を打ち出すことによってこれらの現象の説明に成功している。

本論文は、アヴァクムの『自伝』におけるアクセントという極めて限定された資料とテーマを研究対象とするものであり、今後「逸脱の傾向の類型化」を目指すとしながら、具体的な分野や対象文献は挙げられていないが、今後の更なる研究発展が望める分野として以下を挙げることができるかもしれない。①口承によって伝えられ、教徒たちに読み聞かせることを目的とした古儀式派の説教、とりわけ教訓的色彩の強い例話におけるアクセント、②アクセント逸脱とその後の古儀式派のロシア語との関係、③ロシア北東地域の方言に見られる「安定していない非語末化（任意の形態論的グループに現れる非語末化）」とアヴァクムの言語との関係、④18世紀後半に確立した音節・アクセント詩法とは異なる、アクセント詩法、とりわけ、フォークロアの韻文ジャンルであるプイリーナのリズム法とアヴァクムの詩的アクセントとの関係等々。

（いのうえ ゆきよし）

シンポジウム報告

Л. Н. Толстой между Востоком и Западом:
исследования, адаптации, перспективы

レフ・トルストイ ―東と西の間で― 研究・アダプテーション・展望

覚張 シルビア

昨年10月27日、名古屋外国語大学でトルストイ・シンポジウムが開催された。これは、日本ロシア文学会第68回大会の一環であると同時に、タタールスタン共和国とカザン連邦大学におけるレフ・トルストイ年の遠隔行事としても位置付けられていた。

タタールスタン共和国の首都カザンは、トルストイが青春時代を過ごし、学んだことで知られる有縁の町である。同共和国では、2018年を作家の生誕190周年を記念するレフ・トルストイ年と定め、様々なシンポジウムや祝賀行事を、カザン連邦大学を中心に行ってきた。約一年にわたる祝賀期間を締めくくるカザン連邦大学でのシンポジウムと最終日の12月1日、同大学の帝室ホールで行われた共和国をあげての盛大な式典には、筆者も報告・参加させて頂いた。「レフ・トルストイの時代には、携帯電話はありませんでした。ここで、携帯電話の電源を切るか、マナーモードにしましょう」という印象的な司会第一声で始まった式典には、作家の玄孫であるウラジーミル・トルストイ夫妻も出席し、主賓と来賓の挨拶の間に、歌や踊り、子供による朗読が交えられた活気あふれる催しとなった。モスクワ大学、サンクトペテルブルグ大学にならぶ歴史深い知の拠点でありながら、レーニンとトルストイが学び、一人は追い出され、一人は退学し、最後まで学ばなかった点で共通する大学だという紹介を興味深く聞いた。観光をする時間はなかったが、落ち着いた町の雰囲気が不思議なくらいに残った。イスラ

ム文化が根づいているため、移民による緊張関係が生まれないからだそうだ。式典後の午餐会で出席者たちが、この地は文化の融和の模範だと誇らしげに語り合っていたが、食事の方も、普通であればロシア料理のフルコースが終わり、胃が限界を超える頃にデザートとしてタートル料理が出され、文化の豊かさを文字通りに体感した。

この辺りで、日本で開催されたシンポジウムに戻ろう。名古屋のシンポジウムでは、日本人研究者二名と、このために来日したカザン連邦大学の教授陣三名が報告した。シンポジウムの終了後、同大学のロシア語教育の研究者であるタチヤナ・ボーチナ教授が大学紹介を行った。トルストイの名のもとに、日本、そしてキリスト教文化とイスラム教文化が共存するカザンの地から、20世紀ロシア文学、ロシア文学理論、ロシア映画、異言語環境におけるロシア語・ロシア文学教授法を専門とする研究者が集結したことで、一般的なトルストイ・シンポジウムとは一味違うシンポジウムとなった。アルチョム・スクヴォルツォフ、長谷川章、レゼダ・ムハメットシナ、リーリヤ・ナストゥルディーノヴァが報告し、八木直人の報告内容を楯岡求美が代読した。場内を交えた質疑応答も活発に行われた。以下の報告概要は、報告者から頂いた原稿をもとに、司会を務めた筆者が要約したものである。

第1部：Произведения Л. Н. Толстого и их адаптации

レフ・トルストイの作品とアダプテーション

第1報告：А. Э. Скворцов «Проблема режиссерской интерпретации произведений Льва Толстого (на материале русских киноэкранизаций 1960-2010-х годов)»

「レフ・トルストイの作品解釈の問題—1960～2010年代のロシア映画を題材に」

トルストイの多くの作品においては、プロットのダイナミズムが、作者の脱線

や登場人物の役割に比べて弱く、そのため映画化が困難だと指摘されてきた。しかし、それにもかかわらず、トルストイ文学を原作とする映画作品は200を超え、その半分近くは帝政ロシア、ソ連、ロシア連邦で制作されてきた。文学作品を他の芸術言語に翻訳すれば、表現手段が変わるだけではなく、意味が増大する。本報告においては、映画化されたトルストイの作品において作品解釈が進化する過程を、1960～2010年代の主要な作品を題材に検討する。

この時代の映画作品は、題材となる文学作品へのアプローチの仕方によって二つに分類することができる。第一に、監督がトルストイの作品に忠実に映画を作る場合である。この種の映画では、場面の背後から作者の声が聞こえることもある。これを、「文学的」アプローチと定義づけることができるが、この場合、映画は、文学テキストに対して従属的役割を担っている。ミハイル・シュヴァイツェルの『復活』(1960)、アレクサンドル・ザルヒの『アンナ・カレニナ』(1967)、イーゴリ・タランキンの『セルギー神父』(1978)がこの範疇に入る。

第二に、監督が、文学という素材に対し、より大胆な態度をとるタイプである。この場合、場面の順序を変える、場面を削除する、視点やカメラのアングルで遊ぶ、クロスカッティング、スプリットスクリーン、多重露光、低速撮影や高速撮影という手法が使われる。こちらを「映画的」アプローチと呼ぼう。セルゲイ・ボンダルチュクの『戦争と平和』(1965-1967)、アレクサンドル・カイダノフスキーの『A Simple Death (Простая смерть)』(1985)、シュヴァイツェルの『クロイツェル・ソナタ』(1987)、セルゲイ・ボドロフの『コーカサスの虜』(1996)とカレン・シャフナザーロフの『アンナ・カレニナ。ヴロンスキーの物語』(2017)がこうした手法によって制作された作品である。

これら、第二のタイプの映画のうち、時代を克服し、単なるトルストイ作品の挿絵としての役割にとどまらず、映画的解释を加える真の芸術作品は、ボンダルチュクの『戦争と平和』とシュヴァイツェルの『クロイツェル・ソナタ』である。ボンダルチュクは、『戦争と平和』の内容を重んじつつも、大規模な映画実験を行った。ナターシャの最初の舞踏会やボロジノの戦いの場面は、複数の浮遊カメラが、群衆の上を移動する等、当時としては画期的な手法で撮影された。『クロイツェル・ソナタ』では、原作の大部分を保ちつつも、ハンディカメラで

撮影するドキュメンタリーのような手法等が用いられている。特に、原典の本質を完全に残しつつ、別の芸術領域でオリジナル作品となっている点では、『クロイツェル・ソナタ』が最も優れたトルストイのアダプテーションだといえよう。

第2 報告：長谷川章 «Кинематографические адаптации Толстого: о фильмах Бressона и Курасава»

「トルストイの映画化作品—ブレッソンと黒澤の映画について」

本報告で取り上げるのは、黒澤明監督（1910－1998）がトルストイの『イワン・イリイチの死』から構想を得て制作した映画『生きる』（1952）と、ロベール・ブレッソン（1901－1999）が同作家の『にせ利札』に基づいて映画化した『ラルジャン（L'Argent）』（1983）である。

若き日に兄の影響を受けてロシア文学を読み始めた黒澤の映画は、ドストエフスキーとトルストイの影響を深く受けているが、彼がトルストイの作品をモチーフに制作したのは、『イワン・イリイチの死』に基づく『生きる』のみである。ここで、報告者は坂庭淳史の論文に依拠しつつ、トルストイの作品と黒澤映画の共通点と相違点に言及する。いずれの作品においても、凡人の死とそれに対する周囲の無関心、そして、主人公を精神的覚醒へと導く人物が描かれる。ただ、トルストイの主人公が、この覚醒の後、死を越えてあの世に向かうのに対し、黒澤の映画では、主人公の残りの人生に焦点が当てられている。長谷川は、ここにエイゼンシュテインの「エクスタシー」の観念を重ね合わせる。イワン・イリイチが黒い袋の中に押し込まれ、もがいた結果、死の向こうに光を見る時、「エクスタシー」が生じるわけだが、ここで、死は生の終局ではなく、第二の誕生として捉えられる。『生きる』の主人公は、一晚を遊び明かした後、トヨという部下であった女性に導かれて精神的覚醒を経験するが、この時、第二の誕生を象徴するかのよう「ハッピー・バースデー」の歌が響く。ただ、『生きる』の主人公においてエクスタシーが生じるのは、死の向こうではなく、この世であり、その点において、トルストイの小説とは異なっている。

この二つの作品を結びつけるのが、タジキスタン生まれのバフティヤル・フドイナザーロフ監督（1965–2015）による『ルナ・パパ（Лунный папа）』（1999）である。未婚の母となることが許されぬ厳しい戒律のある中央アジアの村で、不可解な状況で妊娠したヒロインは、子供の父親になってくれるという婚約者と父を失ったうえ、臨月に村の住人にリンチを受ける危険に曝される。その危機から彼女を救ったのが、戦争で精神を病み、超自然的な力を獲得した兄だった。彼の指示に従い、ヒロインが家の屋根に上り、兄が換気扇をつけると、彼女が乗った屋根が空飛ぶ絨毯のように飛んでいく。この時、画面には、「Happy Birthday」という字幕が浮かび上がる。報告者は、黒澤の『生きる』と『ルナ・パパ』の関係を証明する文献がまだ見つかっていないことについて断った上で、死の向こうで誕生が起こるトルストイの小説と『ルナ・パパ』の近似性を通して、この映画こそが、『イワン・イリイチの死』と黒澤映画『生きる』を、誕生を意味する言葉（「Happy Birthday」）で結びつけると考える。

ブレッソンの映画『ラルジャン』とその原作であるトルストイの『にせ利札』については、内容というより形式の点から比較を試みる。ブレッソンの映画で役を演じるのはプロの俳優ではなく、「モデル」といわれる素人たちだ。浅沼圭司によれば、映画の発展の帰結としてのシネマを否定し、シネマトグラフという初期の段階に戻ろうとするブレッソンの目的は、現実の表象ではなく、存在をあるがままに見せることである。一方、トルストイは、晩年、生の価値を死の視点から見直すことで、文明の欺瞞を拒否した。否定の領域の範囲に違いはあるものの、存在する偽りの価値を否定するという点で両者は共通する。

エイゼンシュテインのエクスタシーは、作中の登場人物や観客の異次元へ、別世界への移行を意味するが、トルストイとブレッソンの場合は、作者自身が文学、或いは映画という領域を脱している。長谷川は、その「メタ・エクスタシー」ともいべき新たな問題を提示しつつ、報告を締めくくった。

第2部：Теоретические и биографические аспекты 理論的・伝記的側面

第3報告：Р. Ф. Мухаметишина «Исламский Восток в творчестве Л.Н.Толстого»

「レフ・トルストイの作品におけるイスラム東方世界」

西と東、キリスト教とイスラム教、聖書とコーランを合わせ持つロシア文明の特徴は、ロシア文学や文化史にも反映されている。特に18世紀から19世紀にかけて、イスラム東方世界とその民族・文化の運命は、多くの作家や詩人の関心の対象となってきたが、トルストイもその例外ではない。山岳民やタタール人、バシキール人の生活様式やしきたり、民族的・宗教的伝統に精通していたトルストイは、自身の創作活動においても、イスラム教に注意を向けた。彼は、『ハジ・ムラート』、『コーカサスの虜』、『イリヤス』のようなロシアのイスラム民族の生活を描いた優れた作品を著している。

トルストイは日々、仕事の合間に聖書とコーランを読むことで、執筆活動と精神生活の向上に必要な刺激を受けていた。また彼は、自分の作品で、常にイスラム民族の生活テーマに戻り、イスラム教への好感を認めることを忌避しなかった。1909年2月3日付の日記では、イスラム教への敬意を表明し、「教会の教えと比べたら、はるかに優れている」と記している。また3月13日には次のように記している。「ムハンマドは、常に福音書を引用している。彼は、キリストを神とは認めないし、自身を神と見せかけることもない。イスラム教徒にとっては、神以外に神は存在しない。ムハンマドはその預言者だ。私にとっては、イスラム教のほうがよいのは明らかだ。イスラム教は非常に私の助けになった。」

トルストイは、西洋の教養あるイスラム教徒と活発に文通していた。正教会による作家への破門通告に対し、彼が「宗務院への回答」を書き、その中で、キリスト教の教義を否定したこと、そして破門の正当性を認めた後に、文通は始まっている。イスラム教徒のタタール人たちは、トルストイを支持するだけでなく、彼の基本的な宗教的見解を認めると彼に書いている。作家はそのことに感謝し、「イスラム教徒との精神的な交流をととても大切にしています」と返事をしている。

また、「真の人生は肉体ではなく、心のうちにある。それゆえ、心のために生きなければならない」と訴えつつ、禁酒生活のために一貫して闘う立場も、トルストイをイスラム教に近づける。

そして彼は、「ダッタン草（татарин）」とも呼ばれる、曲がりくねった泥だらけのアザミを見た時、その生命力に驚き、ハジ・ムラートの生命力をそれに喩える。それによって、その勇敢さとイスラム教の理想に対する忠実さを讃えるのだ。『コーカサスの虜』と『イリヤス』も、イスラム東方世界の主人公たちの信仰と勇敢さに対する深い敬意と賛嘆に貫かれている。トルストイは、東方の遺産と文化を高く評価することで、ロシア社会思想の進歩的伝統を継承、発展させ、豊かにしたのである。

第4報告：Л. Х. Насрутдинова «Казанские страницы жизни Льва Толстого в его художественных биографиях»

「伝記作品を通してみるレフ・トルストイのカザン生活」

トルストイがカザンで過ごした5年半の歳月は、全人生の6-7%にあたるが、革命以後、伝記作家がカザン生活に割いているのは全体の1.5-3%程である。とはいえ、カザンは、トルストイ家とも文豪の創作活動とも重要な関係にある。トルストイ家は、作家となるレフが生まれる前、すでにカザン県で有名であった。曾祖父は州知事であり、祖父は県知事であった。

1841年秋、両親と祖母、叔母アレクサンドラが死に、孤児となったトルストイ家の子供たちが、新たに後見人となった父の妹ベラゲーヤ・ユシコーワの住むカザンの地に越してくる。トルストイがカザンで暮らした家は3つあった。最初に彼らが暮らした家の窓は監獄に面しており、そこにあった大きな教会に家族で礼拝に通っていた。教会で、良家の人々は、囚人から扉のあるガラスの仕切りで隔てられているだけだった。ここで、得体の知れない環境に対する関心がトルストイのうちに生じたと考えられる。2番目の家の近くには、「舞踏会の後」で有名な練兵場があった。この家の真向いにはロジオノフスキー貴族女学校があ

り、妹のマリヤはここで学んだ。トルストイ兄弟が居住した最後の家は残っていない。これら3つの家の近くにある「黒い湖」について、作家自身、「スケートがまだ流行していなかったので、若者は橇遊びをし、夏は公園の並木道をかしこまって散歩したものだ」と回想している。その他、1842年の大火事の後に建てられた元貴族会館も、トルストイは学生時代によく訪問した。町の裕福な名士の家では舞踏会が催されたが、それは、トルストイにとっても娯楽の場所であった。若きトルストイが墮落した生活を送っていたという意見が定着したものそのためかも知れない。

その一方で、トルストイは、貴族女学校で名語り手として喜んで迎えられ、市立劇場の常連でもあり、自分でも活人画に参加し、生来不器用で恥ずかしがり屋であったにも関わらず、なかなかの成功を収めていた。トルストイはプーシキンと知己のあるペフツォフ兄弟と仲が良く、彼らの家に出入りしていた。かの有名な詩人も、カザン訪問の際には、ここに滞在していた。トルストイはカザンで日記をつけ始め、この地で初めて文芸作品の執筆を試みている。

1844年、16歳のレフは、一部再試験を受けたうえでカザン大学の東洋学部に入學した。19世紀の40年代、この学部には、アラビア、ペルシャ、モンゴル、中国の言語・文化に詳しい優れた専門家たちが名を連ねていたが、留年を余儀なくされて転部した法学部には、誇るに足る教員がいなかった。しかし、1846年になると、若い三人の教授が任官し、状況は改善する。その一人で、トルストイにモンテスキューの「法の精神」とエカテリーナ大帝の「訓令」を比較する自主課題を出したことで知られるドミトリー・メイエル教授は、トルストイについて次のような言葉を残している。「今日、私は彼の試験を受け持った。彼には勉強する気が全くない。とても残念なことだ。彼の顔はとても表情豊かで賢い目をしているので、自発的、自主的に学べば、並外れた人間になることを確信している」と。

1847年、ヤースナヤ・ポリャーナを相続すると、トルストイは大学を退学し、カザンを去る。彼は、学長ロバチェフスキーが退学届に署名しながら発した次のような言葉を回想している。「あなたの傑出した才能が、それを発揮する機会を得られなければとても残念です」。トルストイは、平凡な一学生に、学長がどん

な才能を見出したのか分からずに、心から困惑した。

トルストイは生きている間に伝説的人物となったが、カザンでの生活に関しては知られている事実が乏しいため、この時期の生活については、幾度となく解釈が見直され、神話的事実によって補われることとなった。

第5 報告：八木君人 «Л. Толстой для формалистов / Формалисты для Толстого»

「フォルマリストにとってのレフ・トルストイ / トルストイにとってのフォルマリスト」

この報告では、ロシア・フォルマリズムの専門家の立場から、フォルマリストとしてのシクロフスキーとエイヘンバウムのトルストイに対する見方を検討する。彼らのトルストイに対する見方は時と共に変わったが、報告者自身の興味が、フォルマリストによる文学理論の構築とフォルマリストが論じるトルストイ詩学の特徴にあるため、報告内容は、フォルマリズム期と呼ばれる初期の論文に限定する。

V・シクロフスキーの「見ること (видение)」と

B・エイヘンバウムの「観察 (наблюдение)」

シクロフスキーは論文「手法としての芸術」で、「異化」を定義づけながら、「芸術の目的とは、事物の感覚を、知ることではなく、見ることとして与えること」だと言う。ここで、シクロフスキーは、「知ること」に、事物の感覚を捉えることを可能にする「見ること」を対置させる。トルストイ自身、日記で「私にとって、人間にとって全世界は視覚的なものだ」と書いているが、シクロフスキーは、彼を「見る」作家として示すのである。

一方、エイヘンバウムは、『若きトルストイ』においてトルストイの「観察者」としての特質を明らかにする。作家自身の日記には、「外側から自分自身を眺める眼差し」が見出せるし、『森林伐採』や『襲撃』のような作品では、主人公の

義勇兵は観察者の役割を担っている。まさに、観察者の立場から「初めて眺められたかのようにくっきりとした細部の描写」がなされるのだが、この点において、エイヘンバウムの考えるトルストイ詩学の特徴は、シクロフスキーが提示する概念に接近する。ここで、トルストイの「観察（見ること）」の詩学を「解剖学的」と呼ぶことにしよう。

異化の「連続性」と「見ること」

「事物は、その空間性ではなく、いわば連続性において受容される」という時、シクロフスキーは、芸術的作品の受容を連続的とみなし、それを空間性に対置させる。1920年、彼は、「詩人・画家のすべての仕事は何よりも連続的な、それぞれの場所で知覚可能な技巧物を創ることに帰する」とエッセーに記しているが、ここで、彼は、「異化」のシステムにおいて重要な知覚可能性と連続性を結びつけるのである。さらに、「文学と映画」（1923）で、芸術作品と連続性との関係について「芸術世界、連続性の世界、間断なき言葉の世界たる詩をアクセントで分節することはできない。[中略] 詩の伝統的理論は、断続性による連続性に対する暴力である。連続する世界は見ることの世界であり、断続性の世界は知ることの世界である。映画とは断続的世界の所産である」という。つまり、シクロフスキーにとって、「異化」の手法から生成される芸術世界は連続する世界と密接に結びついており、それゆえ、彼は、「断続的世界の所産」である映画を芸術とは認めていない、ということになる。

トルストイは映画的吗

シクロフスキーによれば、トルストイの詩学の特徴は「連続的な見る行為」であり、エイヘンバウムにとっては、一体を成す描写対象を細部に分解する「解剖学的観察」である。彼らの分析に基づき、トルストイの作品は「映画的」であると考えたい。

ヴァルター・ベンヤミンは、「複製技術時代の芸術作品」で映画の特徴につい

て次のように述べる。「クローズアップをすると空間が広がり、急速なテンポでの撮影により時間の幅が広がる。写真を拡大すると、元々見えたものがよりはっきり見えるだけでなく、物質の新たな構造も明るみに出る。〔中略〕カメラの前に開かれる自然は、目の前に開かれる自然とは違うということが、明らかになる」。この説明は、エイヘンバウムが発見したトルストイ詩学の特質に似ている。カメラの非人間的なヴィジョンが、トルストイの見る行為と同様、「異化」の作用を引き起こすのだ。

「断続的な」映画を芸術とはみなさないシクロフスキーにとって、トルストイの作品は映画的不是ではない。しかし、シクロフスキーの視点を離れば、映画の特徴の一つは「異化」のシステムにおいても重要な連続性にある。後に映画史は、映画の特徴を連続性と定義する。映画は言葉ではなく、イメージによって語る、より正確には、見せるのであり、上映時間中、観客に見ることを強いるのである。結果として、映画（シネマトグラフ）は、トルストイ同様、芸術的・連続的世界を創造するのである。

（かくばり しるびあ）

第 68 回全国大会・ワークショップ ロシア語の名詞句をめぐる

匹田剛, 光井明日香, 後藤雄介, 宮内拓也

趣旨

ロシア語に関する研究には長い伝統があり、ロシア語学は様々な個別言語学の中でもとりわけ長い歴史を有するものの一つであると言えよう。日本でも大黒屋光太夫や馬場佐十郎の時代からの長い伝統があるが、その発展は決して均等なものではなく、研究が進んでいる領域とそうでない領域の不均等は無くなることはない。例えば統語論（あるいは文法論）は意味と形式の研究が2本の柱であり、また文を構成する最も重要な範疇には動詞と名詞（句）があるが、日本の研究者は形式よりも意味、名詞（句）よりも動詞に関わる領域にどちらかと言うとより高い関心を示し、そこに多くの成果を積み重ねてきた。しかし、ここ数年、若手を中心に少しずつではあるがその逆、つまり動詞に関わる意味ではなく、名詞に関わる形式論的研究に関心を示す研究者が生まれてきている。本ワークショップの最も重要な目的はそれら若手（とはいい難い者も1名含まれてはいるが）の「名詞句の形式」に関心の中心に据える研究の一端を紹介することにある。

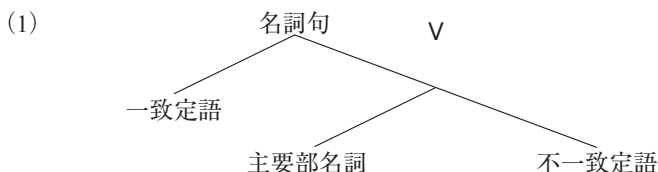
はじめに

最初に司会の阿出川修嘉から全体への導入が行われた後、匹田から「はじめに」として、簡単な概要説明と以後の議論の前提となる情報・考え方が提示され

た。

(i) 名詞句の構造

ロシア語の名詞句は概略以下の様な構造をなすと考ええる。このうち一致定語は主要部名詞と性・数・格などで一致し、不一致定語はそのような一致は行わない。また、この名詞句を主語とする述語も性・数などで主要部名詞や一致定語と一致する。



(ii) 格と他の文法素性 (Babby 1980 など)

格と他の素性ではその出所やコピーのされ方が異なると考える。格は名詞句外から名詞句全体に与えられ、そこから下の節点にコピーされると考える一方、それ以外の文法素性は主要部名詞から一致定語や主要部名詞を支配する節点にコピーされると考える。また、不一致定語からはその素性が外にコピーされることはない。これは格が異なるためと考え、格を共有する範囲を仮に「格領域」と呼ぶ。

(iii) 数量生格 (Babby 1980 など)

数詞が付与する生格は通常の生格ではなく数量生格である。そして以下のように数詞句が変化する際に数詞と名詞の格が異なる場合と一致する場合があることを説明するために「語彙格>数量生格>構造格」という格の付与の優先順位に関する階層を想定する。

(iv) 少数 (秋山 2002)

ロシア語の2~4の数詞に後続する名詞は一般に「単数」生格と考えられているが、これは「少数」という別の数を持っていると考える。つまり два человека の человека は単数生格形ではなく少数数量生格形である。ただし、名詞の数量生格以外では少なくとも形態的に少数はその対立を消失し、複数に融合する。

(e.g. три письменных стола, с тремя столами など)

(v) 複数における性と屈折タイプの対立

Шведова и др. (1980), Wade (1992) などをはじめとしてしばしば言われているようにロシア語の性は複数においては対立を消失すると考える。また, Шведова и др. (1980), Levine (1978), Pesetsky (2013) などと言及されているように名詞の屈折タイプも複数においては対立を消失すると考える。なお, 上述の少数では性と屈折タイプのいずれも対立が維持されていると考える。

(vi) 連続体としての数詞 (Corbett 1978)

ロシア語の数詞は以下のように形容詞的な振る舞いと名詞的な振る舞いが混在しており, より形容詞的なものからより名詞的なものへと連なる連続体として存在している。

(2)

		形容詞的 (dependent) ← → (head) 名詞的						
		1	2	3, 4	5	100	1,000	100 万
(i)	名詞との数の一致	a	n					
(ii)	全ての格で一致	a	n					
(iii)	性の一致	a	n					
(iv)	有生性の一致	a			n			
(v)	自身の複数形	a					n	
(vi)	数詞に対する一致定語	a					n	
(vii)	複数生格のみ支配	a					n	

この「名詞性・形容詞性の違い」という記述の事実を, 上記の格領域の境界を数詞に後続する名詞の文法素性に越えさせる能力の違いと捉え, 以下のようにそれぞれの数量詞の素性と値を整理する:

(3)

		1	2	3	5	100	1,000	100 万	ряд etc.
格付与	(i) asCase	-	+	+	+	+	+	+	+
	(ii) asLex		-	-	-	-	±	+	+
領名 域詞 るをの も越素 のえ性 さに せ格	(iii) upNum		+	+	+	+	+	+	+
	(iv) horNum		+	+	+	+	-	-	-
	(v) horGend		+	-	-	-	-	-	-
	(vi) upAni		+	+	-	-	-	-	-
	(vii) horAni		+	+	+	+	-	-	-
	(viii) setContr		+	+	+	+	+	+	-

それぞれの素性の意味は以下の通り:

up- : 格領域を越えて上方向にコピーを可に

hor- : 格領域を越えて横方向にコピーを可に

(Num : 数, Gend : 性, Ani : 有生性)

as- : 格付与能力に関わるもの (Case: 格, Lex: 語彙格)

setContr : 格領域を越えて述語の一致のコントローラーの指定を可に

有生性の一致に関わる素性について

匹田剛

本報告ではロシア語の名詞句内での有生性の一致, 言い換えると対格の名詞とその一致定語に生格形が現れることを予測する規則を検討し紹介した。

従来多くの教育文法においては, 例えば東一夫・東多喜子(1994)のように, 有生性に加えて数と性を生格形出現のための条件としている。また, 他にも Rappaport (2003) のように有生性及び数と屈折タイプをその条件としているものもある。これに対して本報告では対格での生格形出現のための条件となるのは有生性と性, 屈折タイプであるとし, 以下の格の書き換え規則を提案した:

(4) 性, 屈折タイプ, 有生性に以下に示す以外の値がなければ [acc] → [gen]

性 : [m]; 屈折タイプ : [I]; 有生性 : [an]

すなわち, 性, 屈折タイプ, 有生性の素性にこれら以外の値があった場合, 対格の生格への書き換えは起こらない, と規定している。

これに上述 (v) を加えて以下のような例を説明する。

(5) Мы знаем этого человека. (6) Она купила новый словарь.

(7) Я знаю этого мужчину. (8) Я пригласил одно лицо.

(9) Я пригласил близких лиц.

上記 (5) の例では человек は [m], [I], [an] がそろっている所以对格は生格に書き換えられている。また, それから素性を受け取る этот も [m], [an] を持つ (屈折タイプは名詞とは異なる独自のものがあるのでコピーされない)。結果として妨げる素性がないのでやはり生格化が起こる。(6) では словарь もそれに一致す

る *новый* も [in] を持つので生格化は起こらない。(7) の場合は *мужчина* の屈折タイプが [II] なので生格化が起こらないが、それから屈折タイプ以外の素性を受け取る *этот* は [m] と [an] だけを持つために生格化の条件を満たし、結果 *этот* は生格形に、*мужчина* は対格独自の形態にと、形態の現れ方に違いができる。(8) は数少ない中性の有生名詞の例だが、性の [n] があるため主要部名詞、一致定語ともに生格化は起こらない。しかし、(9) は複数であるため性の対立が消失し、妨げる素性 [n] が消失するので生格への格の書き換えが行われる。

一方次は数詞を含む名詞句 (= 数詞句) の例である。

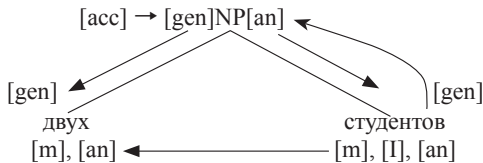
(10) Мы опубликовали две книги.

(11) Мы видели двух студентов.

(12) Мы видели пять студентов.

例 (10) において *книга* は有生性が [in] であるため生格に書き換わることはない。*две книги* 全体を支配する節点に対格が付与され、それが下の節点に降りてくるが、*две* は良いものの、*книги* は数量生格の付与が優先されるため、対格は降りてこない。(11) では以下の図のように句全体に対格が付与されるが、数詞 *два* は (3) で示したように [+upAni] を持っているため、頂点の節点には [an] があり、生格化条件が揃いここで生格への書き換えが起こる。そして生格は下の節点へと降りていき (数量生格より生格の方が優先される)、結果 *двух* も *студентов* も生格の形態を得ることになる。

(11')



一方 (12) では *пять* には [+upAni] がない。それ故節点 NP での生格化は起こらずに *пять* には対格のまま格が降りてくる一方、*студентов* は *пять* による数量生格が優先されて付与された結果、*пять студентов* という数量詞と名詞が異なる格を持つことになる。

ここでは全てのパターンを記すことはできないが、以上のような考え方で対格の形を説明した。

有生性および性に関する一致

後藤雄介

本報告では、上で示したいいくつかの前提についてより詳細な検討を加え、修正やより精密な理論の整備が必要であることを示した。

まず第1点目は性の対立の問題である。上ではロシア語の性の対立は複数において消失するということを前提としていたが、本報告ではそうは考えられない理由を記述的に示した。以下の例がそのことを物語っている：

- (13) Я доволен этими окнами, *каждое* из которых по-своему хорошо. (Зализняк 1964)
- (14) *золотая и серебряная* медали (Кохтев & Розенталь 1984)
- (15) *один* из студентов
- (16) Исчезновение *любого* из языков является невосполнимой утратой (...). (НКРЯ 2015.06.29)
- (17) Испытания не следовали *одно* за *другим*, а происходили одновременно. (НКРЯ 2013.01.07)
- (18) Студентки принесли *каждая* по яблоку.
- (19) Какие картошки — *одна* к *одной*!

つまり、以上の例において斜体で示した語の性は下線で示した語のものであるが、それらは複数形であるため性の対立を失っているはずである。

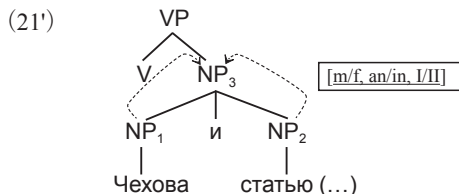
しかし、前報告の(4)は性と屈折タイプの対立が複数で消失することを前提に成立している。この問題を解決するために、まず複数でも性の対立はありと考える、その上で(4)を以下のように修正することを提案した。

- (20) 以下の素性の内、関係するものが全て揃ったら [acc] → [gen]
 - ・単数の場合：性：[m]；屈折タイプ：[I]；有生性：[an]
 - ・複数の場合：有生性：[an]

続いて名詞の等位接続構造での素性のコピーに関する理論的整備が必要であることを指摘した。例えば、以下の例で、斜体で示した等位接続構造の頂点の節点 NP に性、有生性、屈折タイプの素性が Чехова, статью のいずれかからもコピー

されるはずである。

(21) (...) я не люблю Чехова и статью о "Трех сестрах" (...) (НКРЯ 2017.12.1)



数の場合なら単数と単数が上がることによって複数になるなど考えることも可能であるが、この場合は矛盾が生じる。このような問題を避けるために以下の規則を提案した：

(22) 当該の名詞を含む NP より上位の NP へは性、有生性、屈折タイプいずれもコピーされてはならない。

また、単数名詞の等位接続構造を一致定語が修飾した場合、複数になる場合 (23) と単数になる場合 (24) がある：

(23) Мы видели старых короля и королеву. (Crockett 1976: 171)

(24) (...) назовите ваше имя, отчество и фамилию. (Corbett 1983: 160)

これらの一致定語の振る舞いを正しく説明するために、以下の規則を提案した：

(25) 有生性素性に関して、一致定語は等位項のいずれかから直接コピーする。

(26) (a) 一致定語が複数の場合、各等位項からではなく、各等位項を支配する節点から数素性 [pl] をコピーする。

(b) 一致定語が単数の場合、各等位項を直接修飾し省略が起こる。

性の連続体と文法素性

光井明日香

本報告では、職業や社会的地位などを示す一連の男性名詞のうち実際には女性を指示している場合女性形での一致、いわゆる意味的一致を引き起こしうるものを「混合名詞」と呼んだ。しかし、意味的一致に関わる振る舞いが第1変化名

詞，第2変化名詞，不変化名詞によって異なる。今回はその振る舞いの違いを説明するための理論の構築を目指した。

まず，第1変化名詞と第2変化名詞，不変化名詞の意味的一致に関する振る舞いの違いは以下のようにまとめられる：

(27)

(a) 第1変化の男性名詞のふるまい

	句全体の格が主格	句全体の格が主格以外
指示・所有代名詞や形容詞，один	意味的一致が可能	意味的一致が不可能
оба	意味的一致が不可能	意味的一致が可能

(b) 第2変化の男性名詞と不変化の男性名詞のふるまい

	句全体の格が主格	句全体の格が主格以外
指示・所有代名詞や形容詞，один	意味的一致が可能	意味的一致が可能
оба	意味的一致が可能	意味的一致が可能

このような屈折タイプによる振る舞いの違いを説明するために Pesetsky (2013) が提案する以下の「女性化形態素 Ж」を利用する (Pesetsky 2013: 39)：

(28)

(a) 随意的ゼロ形態素 Ж「女性」は NP 内のある構造的境界の上のどの点においても併合され得る。低い形容詞はこの境界の下にある。

(b) 一度 Ж が併合すると，名詞はそこから先，一致に関して女性とみなされる。

しかし，この Ж を想定するだけでは，上記の様な屈折タイプによる振る舞いの違いを説明することはできない。そこで Ж を非活性化するための規則を提案する：

(29) 以下の素性がコントローラーの名詞における統語素性にすべてそろうと Ж が非活性化される： 性 [+masculine, -feminine]，屈折タイプ [I]，数 [+sg]，格 [OBL]

これにより，例えば，第1変化の男性名詞が主格環境にあるか斜格環境にあるかによって意味的一致の可否が影響を受けることが説明される。

- (30) 主格→
- хорошая Ж врач
- [+masculine, -feminine, I, +sg, -pl, NOM]
- 素性 [NOM] があるので Ж はそのまま残る

- (31)
- с 造格→
- *вашей Ж врачом
- [+masculine, -feminine, I, +sg, -pl, OBL]
- 素性が全て揃うので Ж が非活性化される

この場合、(30) では主格 [NOM] が非活性化を妨げるため女性での意味的一致が可能になるが、(31) では (29) で示した条件が全てそろうため Ж の非活性化が起こり、女性での意味的一致が不可能になる。一方、第2変化名詞や不変化名詞の場合は屈折タイプの素性 [II] や [INDC] が非活性化を妨げるので格にかかわらず女性での意味的一致が可能になる。

一方 оба の場合は注意が必要である。句全体の格が主格の場合は名詞の格が数量生格になるため非活性化が妨げられ、意味的一致が可能なのが正しく説明されるが、全体の格が主格以外の場合ではどうだろうか：

- (32)
- об 前置格→
- *обеих Ж врачам
- [+masculine, -feminine, I, +sg, -pl, OBL]
- 素性が全て揃うので Ж が非活性化される

このままでは非活性化の条件が全てそろってしまい、Ж が非活性化され女性での意味的一致が不可能という誤った予測を行ってしまう。そこで以下のような書

き換え規則を提案する：

(33) 数量生格が語彙格に変わると、[+sg]の素性が[-sg]に書き換わる。
なお、これは少数が複数に変わると言うことで形態的な事実とも矛盾しない。

出来事名詞とその項

宮内拓也

本報告では上記(1)のような単純な理解だけでは捉えきれない問題を指摘した。すなわち、行為そのものを表す名詞である出来事名詞、その中でもとりわけ他動詞派生の出来事名詞の振る舞いの複雑さをいくつかの点に分けて指摘した。

第一に、出来事名詞は項として取ることができる生格名詞句によって以下の3つのタイプに分類されることを指摘した。

(i) タイプ1：動作主の生格名詞句は可，被動作主の生格名詞句は不可

(34) Мужчина ударил стол.

(35) (a) удар мужчины

(b) *удар стола

(ii) タイプ2：動作主の生格名詞句，被動作主の生格名詞句のいずれでも可

(36) Шаляпин исполнил арию.

(37) (a) исполнение Шаляпина

(b) исполнение арии

(iii) タイプ3：動作主の生格名詞句は不可，被動作主の生格名詞句は可

(38) Враг разрушил город.

(39) (a) *разрушение врага

(b) разрушение города

それぞれのタイプには例えば以下のような出来事名詞がある：

タイプ1：поцелуй, справка, измена, танец, шепот, укус ...

タイプ2：посещение, продажа, предательство, пинок, осада, строительство ...

タイプ3：построение, окружение, сбитие, заполучение, уборка, укушение ...

次に、動作主，被動作主のいずれでも生格名詞句を認めるタイプ2であっても、二重生格、つまりそれらが共起することはできない。(Шаляпинаがарииを修飾する意味では共起可能であるが、それは本報告で対象とするものではない。)

(40) *исполнение арии Шаляпина

また、動作主項は生格でなく造格で現れることもある。

(41) исполнение арии Шаляпиным

さらに生格では動作主項を表すことができないタイプ3の出来事名詞でも造格でなら動作主項を表すことができる：

(42) разрушение города врагом

しかし、造格動作主項は単体では現れることはできない。つまり造格動作主項が現れるためには生格被動作主項の存在が条件となる（ただし、明確に生格項の削除があったと考えられる場合はその限りではない。）

(43) *исполнение Шаляпиным

(44) *разрушение врагом

従って、そもそも生格被動作主項が現れ得ないタイプ1の出来事名詞では造格動作主項は現れることができない。

(45) (a) *удар мужчиной

(b) *удар стола мужчиной

以上、出来事名詞の動作主項と被動作主項の現れ方はまとめると以下のようなる：

(46)

項の種類	格	出来事名詞のタイプ		
		タイプ1	タイプ2	タイプ3
動作主項	造格	*	*	*
	生格	✓	✓	*
被動作主項	生格	*	✓	✓
被動作主項+動作主項	生格+造格	*	✓	✓
被動作主項+動作主項	生格+生格	*	*	*

なお、生格被動作主項と造格動作主項の両者が共起するとき、それらの語順は自由である。しかし、同様に他動詞と派生関係にあると考えられる結果名詞においては生格動作主項と生格被動作主項が共起することができるものの、それらの語順は厳しく限定されており、生格動作主項は生格被動作主項に先行することができない。このような様々な現象に着目することによって今後さらに理論的説明を発展させていく必要がある。

まとめ

最後に宮内から「まとめ」として全体の総括が行われた。一口に名詞句といってもその振る舞いは(1)で示したような典型的なものだけではなく、例えば、数詞句、等位接続構造、混合名詞、出来事名詞などは、それぞれに典型から逸脱して振る舞うことが示された。

文献

- Зализняк, А. А. (1964) “К вопросу о грамматических категориях рода и одушевленности в современном русском языке”, *Вопросы языкознания*, 4, 25-40.
- Кохтев, Н. Н. & Д. Э. Розенталь (1984) *Популярная стилистика русского языка*, Москва: Русский язык.
- Шведова, Н. Ю., Н. Д. Арутюнова, А. В. Бондарко, Вал. Вас. Иванов, В. В. Лопатин, И. С. Улуханов, Ф. П. Фили (1980) *Русская грамматика*, в 2 тт., М.: Наука.
- Babby, L. H. (1980) “The Syntax of Surface Case Marking”, *Cornell Working Papers in Linguistics*, 1, 1-32.
- Corbett, G. G. (1978) “Numerous Squishes and Squishy Numerals in Slavonic”, in B. Comrie (ed.) *Classification of Grammatical Categories*, Edmonton: Linguistic Research, 43-73.
- Corbett, G. G. (1983) *Hierarchies, Targets and Controllers: Agreement Patterns in Slavic*, London: Croom Helm.
- Crockett, D. (1976) *Agreement in Contemporary Standard Russian*, Cambridge: Slavica.
- Levine, M. I. (1978) *Russian Declension and Conjugation*, Columbus: Slavica.
- Pesetsky, D. (2013) *Russian Case Morphology and the Syntactic Categories*, Cambridge: MIT Press.
- Rappaport, G. C. (2003) “The Grammatical Role of Animacy in a Formal Model of Slavic Morphology”, in R. A. Maguire, A. Timberlake (eds.) *American Contributions to the 13th International Congress of Slavists*, Vol.1: Linguistics, Bloomington: Slavica, 149-166.
- Wade, T. (1992) *A Comprehensive Russian Grammar*, Oxford, Cambridge: Blackwell.
- 秋山真一(2002)「ロシア語数詞句の統語構造と数カテゴリーの問題について」,『ロシア語研究』, No.15, ロシア語研究会「木二会」年報, 19-27.
- 東一夫, 東多喜子(1994)『改訂版標準ロシア語入門』, 東京: 白水社.

(ひきた ごう, みつい あすか, ごとう ゆうすけ, みやうち たくや)

パネル報告

プラトーフ研究の現在：日本の視座から

古 川 哲

司会・コメンテータ

野中進（埼玉大学）

報告者

長井淳（津田塾大学）

奈倉有里（早稲田大学）

佐藤貴之（東京外国語大学）

古川哲（東京外国語大学）

【趣旨】 古川哲

ロシア革命 100 周年の節目となる 2017 年，日本で刊行された出版物においてアンドレイ・プラトーフの名が言及された。例えば，北井聡子「世界変容・ドグマ・反セックス ― 一九二〇年代ソビエトの性愛論争」（『現代思想』10 月号，2017 年）では 1920 年代のソ連で起こった性愛をめぐる論争に対してプラトーフが自作で示した批評的な言及が論じられた。またアルテミー・マゲーン「コミュニズムにおける否定性——疎外のパラドクス」（八木君人訳，『ゲンロン 6』，2017 年）では，現代ロシアにも存続する社会と個人の関係の特有なありさまを原型的に示すものとして『土台穴』が分析された。

日本のプラトーフ研究とその紹介はこの半世紀のうちに厚みをましている。

しかしその成果は、一般の読者むけのものとしては翻訳と作品解題が主であった。これらがプラトーフ研究の基盤形成のため今後必要であることはいうまでもないが、上記のような紹介によりプラトーフへの関心がさらに広がる可能性が感じられる。このワークショップはそのような関心に専門家が応えるための準備であり、同時に本パネルは2019年のプラトーフ生誕120周年に向けた予備的作業としての趣旨も含んでいる。

【第1報告】長井淳「『ジャン』のテキストをめぐる」

ロシアで新たなテキスト校訂が進んでいる現在、プラトーフのテキストをどのように捉えるべきか、改めて再考する必要がある。このような問題意識から本発表では『ジャン』が取り上げられ、稿と版の整理、派生作品との比較を通して、この問題が検討された。『ジャン』はスターリンの社会主義建設に対して矛盾する眼差しや緊張関係を内に秘め、ゆえに断片から別作品を作る形でしか生前は発表ができなかった。『ジャン』は出版を目指して改稿がなされたが、世に出る形に結実しなかったという点で「未完」の作品であると言える。結論としては、改稿過程の詳細を明らかにし、そこから作品に内在する鋭い批評性とテキストが被った時代の制約性を同時に見てゆく必要があると指摘された。

【第2報告】奈倉有里「プラトーフ初期散文における詩的要素」

プラトーフの初期散文作品（短編、論評等）における詩的要素（リズム、韻律、音韻的要素、抒情的定型表現等）にはいかなる特色があるのだろうか。またそれらは十九世紀の散文詩や雪解け期の抒情的散文と比較した場合、こういった類似点や差異があるのか。そういった点について、本報告では、Э. А. バリプロフの抒情的散文研究、М. Л. ガスパーロフの詩史研究、Н. Л. レイデルマンのジャンル研究、Е. トルスタヤのプラトーフ初期作品研究を足掛かりに、プラトーフ自身の詩との比較をふまえて検証がなされた。具体的には、プラトーフの初期の短編小説『星の砂漠』を中心にしつつ、後期の作品も対象に含めた分析を通して、そこに特徴的な韻律（ドーリニク）が示された。そのことにより、韻律を手がかりとして作者の創作の連続性を分析する可能性が示され、またブローク

を始めとする先行世代の文学者の作品とプラトーフを比較する視座がありうる
ことが示された。

【第3 報告】 佐藤貴之「プラトーフとピリニャーク：その師弟関係をめぐって」

E. トルスタヤの論文「“スチヒーヤの力”：プラトーフとピリニャーク」
(1978) は両作家の複雑な師弟関係を扱った先駆的研究である。トルスタヤによ
れば、活動初期のプラトーフはピリニャークの影響を受けつつ、その問題意識
を超克していく形で発展を遂げていった。両作家はやがて「共作」の形で作品を
発表した¹が、その作品は「反ソ的」として批判の対象となり、1930 年代にプラ
トーフが執筆した戯曲にはピリニャークの姿がアイロニカルに描かれている。
果たして両作家は師弟関係にあったのか、共作で発表された作品を中心に創作上
の影響関係を分析する。このような問題設定を採る本報告においては、文壇の趨
勢がピリニャーク攻撃に傾いたとき、ピリニャーク、プラトーフ、そして周囲
の文学者らが発した言説が詳しく参照された。そのことで、現在確立されたプラ
トーフ評価を受け入れるだけでは見えてこない、当事者たちの同時代的な把握
について考察するための視座が拓かれた¹。

【第4 報告】 古川哲「プラトーフとドストエフスキーの比較を再考する」

プラトーフとドストエフスキーとの対比は度々行われてきた。特にプラトーフ
の長編小説『チェヴェンゲール』と中編小説『土台穴』の研究についてみると、
ドストエフスキーを参照しながら論じる先行研究は多数ある。本報告ではプラ
トーフとドストエフスキーの比較をめぐる議論を整理し、この二者の比較が
何を明らかにするのか検討され、その可能性について考察された。このような問
題設定のもとで本報告においては、プラトーフとドストエフスキーを比較する

¹ なお、本報告に基づいた論文が発表されている。書誌は以下の通りである。佐藤貴之「プラ
トーフとピリニャーク：その「師弟」関係をめぐって」『スラヴ文化研究』第16号、
2019年、44-55。

ことを狙いとする先行研究のうちマルイギナ、コヴァレンコ、イパトワ、そしてカラショフによる論文が詳しく紹介され、それらの相関関係が整理された。その結果、人間の社会の秩序に関する洞察においてこの二人の作家には通底する部分が多いという共通する指摘がみられることが示された。同時に、両者を体系的に比較する作業はいまだ多くの未開拓の領域を残していることが指摘された。

【コメント】野中進

プラトノフという作家をいかに読むか、現代においていかに読むかという方向性がこのパネルの趣旨として強く打ち出されていると考えられる。それは、今学会のプレシンポジウムにおけるドストエフスキーに対するアプローチに通じるものである。

【質疑応答】

以上のような報告とコメントを踏まえて、議論がフロアに開かれた。

第1報告に対し、プラトノフの作品におけるシュールレアリスムの影響について質問がなされた。また聴衆のうち別の参加者からは、報告者の、ソ連時代において出版がなされた作品となされなかった作品を峻別して論じる姿勢は、ペレストロイカ以後の情報公開を踏まえて現在に至るまでに形成されたプラトノフ作品の芸術的な価値について定まった評価に対してどの程度の批評性を持ちうるのかに対して報告者の見解を問う質問がなされた。

第2報告に対しては、散文という形式をとっていながら詩として捉えうる形式的側面を持った文学作品を扱う場合の用語法について質問があった。

第3報告に対しては、ソ連時代の文芸をめぐる特殊な環境を報告が描き出していることを評価した上で、報告者がそれを現在の日本の言論の環境においていかにして伝えていけるのか、報告者の見解を問う質問があった。

第4報告に対して、ドストエフスキーとプラトノフという二者を比較するとき、どちらかに重点が置かれざるを得ないのではないかという問題意識から、報告者の見解を問う質問があった。

以上のような質問全てに対し、報告者がその場で的確に回答を成し得たとは言

い切れない。しかしここでの質疑を通して、プラトーフという作家をめぐる議論が含んでいる射程をより深く理解するための出発点が築かれたと言える。

このパネルへの参加を快諾くださった報告者と司会者、そして当日の聴衆の皆様に対して深く感謝する。

(ふるかわ あきら)

2019 年 10 月現在の役員・委員等（括弧内数字は任期）

会 長：三谷恵子（2017.10～2021.10）

副会長：貝澤哉，中村唯史（2017.10～2021.10）

理 事：（2017.10～2019.10）

北海道支部

寺田吉孝（支部長），越野剛〔事務局長：大西郁夫〕

東北支部

長谷川章（支部長）〔事務局長：川辺博〕

関東支部

伊東一郎（支部長），秋山真一，大石雅彦，熊野谷葉子，坂庭淳史，佐藤千登勢，
楯岡求美，堤正典，沼野恭子，乗松亨平（事務局長），番場俊，前田和泉，
三浦清美，八木君人

中部支部

杉本一直（支部長・事務局長），中澤敦夫

関西支部

中村唯史（支部長），大平陽一，藤原潤子，ヨコタ村上孝之〔事務局長：服部文昭〕

西日本支部

西野常夫（支部長・事務局長）

顧 問：佐藤純一，米川哲夫

監 事：木村崇，鳥山祐介

JCREES 幹事：三谷恵子

事務局：野中進（事務局長），安達大輔（書記）

各種委員会（2017.10～2019.10、ただし大会組織委員会、大会実行委員会を除く）

学会賞選考委員会：井上幸義（委員長）、郡仲哉、沼野恭子、柳町裕子、ヨコタ村上孝之

国際交流委員会：楯岡求美（委員長）、坂庭淳史、ヴァレーリイ・グレンチコ、中野幸男、
前田和泉

広報委員会：古賀義顕（委員長）、梅津紀雄、寒河江光徳、中村唯史、本田晃子、
八木君人

ロシア語教育委員会：熊野谷葉子（委員長）、秋山真一、金子百合子、寺田吉孝、
宮崎衣澄

倫理委員会：齋藤陽一（委員長）、黒岩幸子、佐藤千登勢、西中村浩、
イリーナ・メーリニコワ

日本ロシア文学会大賞選考委員会：諫早勇一（委員長）、井上幸義、大平陽一、貝澤哉、
熊野谷葉子、古賀義顕、楯岡求美、中村唯史、三谷恵子

会誌編集委員会：大平陽一（委員長）、朝妻恵理子、北見諭、鴻野わか菜、佐々木精治、
佐藤正則、下里俊行、高橋健一郎、田中大、堀口大樹、平松潤奈、
丸山由紀子

2019 年度大会組織委員会：中村唯史（委員長）、諫早勇一、恩田義徳、坂庭淳史、
楯岡求美

2019 年度大会実行委員会：坂庭淳史（委員長）、安達大輔、貝澤哉、鴻野わか菜、楯岡求美、
八木君人

◎各支部連絡先などは、学会ホームページにてご覧下さい。

<http://yaar.jpn.org/> 学会のご案内 /

編集後記

この駄文を書き終えれば、いよいよお役御免です。3期6年というのは異例の長さのようですが、特別な感慨はありません。私の場合、さしたる見識を求められない（無い袖は振れません！）雑用係に徹したからでしょう。結局は松籟社編集部の木村浩之さんに頼りつきりだったのですから、それも当然かも知れません。

感慨はありませんが反省点は多々あります。今も「あの論文を掲載すべきではなかったか？」とクヨクヨ後悔しています。ただそれはあくまでも個人的見解であり、査読の結果を編集委員長が覆す訳にはいきませんでした。

それにしても、委員長ばかりが雑用を強いられる今の体制は改めなければなりません。編集委員長という役職は婆抜きで負けた会員の罰ゲームではなく、名誉ある役職であるべきです。学識よりも雑務を処理する能力が求められるというのは、やはりおかしいのではありませんか。

そんな雑用係とはいえ、私のようなインチキ研究者が大過なく（ほんとかな？）編集委員長の職を全うできたのは、多くの会員の協力があったことでした。この場を借りて心より御礼申し上げます。

編集委員：大平陽一（委員長）、朝妻恵理子、北見諭、鴻野わか菜、佐々木精治、佐藤正則、
下里俊行、高橋健一郎、田中大、堀口大樹、平松潤奈、丸山由紀子
ロシア語校閲：ヴァレーリイ・グレチコ

Editor-in-chief : Y. Ohira

Editorial Board : I. Asazuma, J. Hiramatsu, D. Horiguchi, S. Kitami, W. Kono, Y. Maruyama,
S. Sasaki, M. Sato, T. Shimosato, K. Takahashi, H. Tanaka

Russian Editing: Valerij Gretchko

Published by the Japan Association for the Study of Russian Language and Literature
c/o Prof. S. Nonaka
Saitama University Graduate School of Humanities and Social Sciences
255 Shimo-Okubo, Sakura-ku, Saitama City, Saitama 338-8570, JAPAN
©2019 JASRLL

Выдержка из Правил Бюллетеня ЯАР

- 1 Бюллетень Японской ассоциации русистов публикуется ежегодно.
- 2 Все члены ЯАР имеют право посылать свои статьи, сообщения, рефераты докладов или рецензии в редакцию для публикации в Бюллетене.
[...]
- 4 Решение о публикации рукописей принимает редакционная коллегия.
- 5 В случае необходимости редакционная коллегия имеет право потребовать внести поправки в рукопись.
- 6 Основное содержание Бюллетеня публикуется также на вебсайте ЯАР.

Из Условий приема рукописей в Бюллетень ЯАР

- 1 Для публикации в Бюллетене принимаются рукописи на японском, русском и английском языках.
- 2 Для публикации предусмотрен следующий объем рукописей:
Статья и сообщение — не более 8000 слов, включая примечания, библиографию, реферат, списки, таблицы, графики, схемы, рисунки, фотографии и др.
Рецензия — не более 3000 слов.
- 3 Желаящие опубликовать свои материалы должны прислать тезисы (не более 1-ой страницы в формате A4) председателю редакционной коллегии по электронной почте (editor@yaar.jp.org) до 30-го ноября.
- 4 Рукописи, направляемые в редакцию для обсуждения возможности их публикации, должны быть получены до 31-го января.
- 5 Решение редакционной коллегии о публикации рукописей сообщается авторам в середине апреля.
- 6 Окончательные варианты рукописей должны быть присланы для публикации в редакцию до середины мая.
[...]
- 8 Редакционная коллегия оставляет за собой право предлагать альтернативные условия публикации.

Выдержка из Устав Японской ассоциации русистов

- 1 Настоящая Ассоциация именуется "Японская ассоциация русистов" (ЯАР).
- 2 Ассоциация ставит своей целью способствовать плодотворному развитию японской и мировой культуры путем изучения и распространения русского языка и литературы.
- 3 Для достижения поставленной цели (см. пункт 2) Ассоциация осуществляет следующие

виды деятельности:

- 1) проведение совместных исследований и изысканий;
 - 2) организация научных конференций и публичных лекций;
 - 3) издание журнала Ассоциации;
 - 4) проведение прочих мероприятий, направленных на достижение цели настоящей Ассоциации.
- 4 Ассоциация состоит из действительных членов, занимающихся изучением и распространением русского языка и литературы, а также ассоциированных членов, разделяющих цели Ассоциации.
- 5 Желающие вступить в Ассоциацию принимаются на основании рекомендации не менее двух членов ЯАР путем утверждения данной кандидатуры Правлением ЯАР по установленной процедуре. Для выхода из Ассоциации необходимо подать соответствующее заявление в секретариат ЯАР.
- 6 Ассоциация имеет следующие органы:
Общее собрание и Правление
- 7 Общее собрание является высшим органом ЯАР по принятию решений, оно проводится один раз в год. Однако в случае необходимости возможен созыв внеочередного Общего собрания. Решения Общего собрания вступают в силу, получив одобрение большинства присутствующих на нем действительных членов Ассоциации.
- 8 В Ассоциации имеются следующие должности:
председатель, заместители председателя, члены Правления, казначей.
[...]
- 15 Ассоциация имеет региональные отделения; каждый член Ассоциации должен быть зарегистрирован, как правило, в одном из региональных отделений. Местоположение региональных отделений определяется в особом порядке.
[...]
- 18 Членские взносы подразделяются на три категории: обязательные ежегодные членские взносы, добровольные взносы в поддержку Ассоциации и вспомогательные взносы для ассоциированных членов. Размер этих взносов устанавливается в особом порядке. Лица, вступающие в Ассоциацию, платят установленный вступительный взнос.
- 19 Члены Ассоциации, не платившие членские взносы в течение трех лет, признаются выбывшими; их имена вычеркиваются из списка членов Ассоциации.
[...]
- Принято в июле 1950 г. (с поправками от ноября 1962 г., октября 1963 г., октября 1965 г., октября 1971 г., октября 1975 г., июля 1976 г., октября 1986 г., октября 1991 г., ноября 2003 г., октября 2005 г. и октября 2009 г.)

Интернет-сайт Ассоциации находится по адресу:

<http://yaar.jpn.org/>

日本ロシア文学会会則（抄）

- 第1条 本会は日本ロシア文学会と称する。
- 第2条 本会はロシア語・ロシア文学の研究および普及によって、日本および世界の文化の健全な発展に貢献することを目的とする。
- 第3条 本会は、第2条の目的達成のため、次の事業を行う。
- (1) 共同の研究ならびに調査。
 - (2) 研究発表会・講演会の開催。
 - (3) 機関誌の発行。
 - (4) その他本会の目的を達成するのに必要な事業。
- 第4条 本会はロシア語・ロシア文学の研究と普及に従事する正会員および本会の趣旨に賛同する賛助会員をもって組織する。
- 第5条 本会に入会しようとする者は、会員2名以上の推薦により、所定の手続を経て、理事会の承認を得るものとする。退会しようとする者は、退会届を事務局に提出するものとする。
- 第6条 本会に次の機関をおく。
- 総会 理事会
- 第7条 総会は本会の最高議決機関であり、毎年1回開催するものとする。ただし、必要に応じて臨時総会を開くことができる。総会の議決は出席正会員の過半数によって成立する。
- 第8条 本会に次の役員をおく。
- 会長 副会長 理事 監事
- 〈・・・〉
- 第12条 理事会は、会長、副会長、理事、編集委員長、国際交流委員長、学会賞選考委員長、広報委員長、ロシア語教育委員長、大会組織員長、大会実行委員長、事務局長をもって構成し、会の運営にあたる。
- 〈・・・〉
- 第15条 本会に地方支部をおき、会員は原則としていずれかの支部に所属するものとする。支部の設置については別に定める。
- 〈・・・〉
- 第18条 会費は普通会費、維持会費、賛助会費の3種類とし、その金額等はそれぞれ別に定める。新入会員は所定の入会金を納入するものとする。
- 第19条 普通会費を3年を越えて滞納した会員は、退会したものと見なし、会員名簿から削除する。
- 〈・・・〉

1950年7月制定、2009年10月改正

◎詳しくは、学会ホームページにてご覧下さい。
<http://yaar.jp.n.org/> 学会のご案内 /

会誌原稿執筆要項

1. 原稿の執筆に際しては、本要項および、別に定める引用注の表記等の細目についての「ガイドライン」に従うものとする。ただし、編集委員会から別の指示がある場合はそれによる。
2. 原稿の使用言語は、日本語、ロシア語、英語を原則とする。その他の言語については、編集委員会の判断による。ただし、引用・用例の言語は原則として制限しない。
3. 日本語論文には、言語上の校閲を経た、ロシア語あるいは英語のレジюмеを付す。
4. 論文は注等を含めて 17,000 字以内。ただしレジюмеはこの字数に含めない。
5. 日本語以外の言語による原稿、図表・写真を含む原稿、詩の引用等空白の多い原稿、等の分量については、編集委員会が別に指示する。
6. 会誌規定 6.（イ）による投稿申込みの締切りを毎年刊行前年の 11 月末日、審査用原稿提出の締切りを毎年 1 月末日とする。審査通過者の完成稿提出および編集部への依頼した原稿の提出期限は、別途設定する。
7. 投稿申込みは、学会ホームページからダウンロードした所定の申込用紙を使用し、電子メールで編集委員長宛（editor@yaar.jp）に提出する。

1999 年 10 月制定 2000 年 12 月・2002 年 10 月・2003 年 9 月・2006 年 7 月・
2010 年 12 月・2013 年 12 月・2015 年 7 月・2016 年 7 月・2018 年 10 月修正

ロシア語ロシア文学研究 第 51 号

2019 年 10 月 15 日発行

発行者 日本ロシア文学会 三谷恵子

事務局：〒 338-0825

さいたま市桜区下大久保 255

埼玉大学人文社会科学部

野中進研究室気付

FAX：048-858-3685

学会ホームページ <http://yaar.jp>/

印刷所 株式会社松籟社

〒 612-0801 京都市伏見区深草正覚町 1-34

TEL：075-531-2878

**Bulletin of the Japan Association
for the Study of Russian Language and Literature**

No. 51

Izumi Miyazaki

The Iconostasis of the Orthodox Church in Osaka 1

Ayumu Urabe

«Empire V» as a Bildungsroman: A Paradox of Place and Identity 23

**JASRLL
2019**